



今月の編集——〈あこら沖縄〉

響け！ 女たちの憤り

沖縄からの告発

なぜおきなわなのですか 高里鈴代

沖縄はもう一步も後へは退かない！ 9.23, 10.21島ぐるみ集会
東京も燃えた！ 沖縄・米兵による強かんに抗議する女たちの集会
女たちは悲しむ・憤る・行動する……

栗国千恵子／糸数京子／伊良部裕子／浦島悦子／桑江テル子
高嶺典子／又吉喜美枝／源 啓美／斎藤千代



沖縄のレイコにカンパを！

REICO: Rape Emergency Intervention Counseling Okinawa

〈強姦救援センター沖縄〉が生まれました。

レイプとは性暴力です。強制された性的行為は、すべてレイプです。

世界のいたる所で幼児から高齢の女性まで被害にあっています。年齢も

タイプも全く関係ないのです。すぐ電話を！ お名前は聞きません。

098-867-6110 毎水曜日 午後7時～10時

毎土曜日 午後3時～6時

カンパは いつでもお待ちしております……

郵便振替02010-9-37289 強姦救援センター沖縄へ

「なぜ、おきなわなのですか……」軍事基地・軍隊はもう要りません！ 高里 鈴代 2

沖縄はもう一步も後へは退かない 4

◆これ以上許されたい！ 少女・女性への暴力・人権侵害 9・23子どもたち・女たち島ぐるみ集会 7

◆世界に届け！ 県民の叫び 米軍人による少女暴行事件を糾弾し日米地位協定の見直しを要求する10・21県民総決起集会 36

東京も燃えた！

◆沖縄・米兵による強かん事件に抗議する10・23女たちの集会 40

女たちは悲しむ・憤る・行動する

〔沖縄から〕 少女暴行事件に関して 伊良部裕子 83 女たちはだまされない 浦島 悦子 88

私の頭を離れないこと 高嶺 典子 91 基地ある限り平和はない 糸数 京子 92

沖縄は揺れている 又吉喜美江 93 A子ちゃんへの手紙 桑江テル子 96

〔東京から〕 加害者としてのわたし 斎藤 千代 98

資料 沖縄米軍基地の現状と課題／米軍関係事故にからむ県議会からの主な決議 ほか 102

〔連載〕 めじやーなりすとのめ 沖縄の深い憤り 源 啓美 112

気になる英語 スーパー・ストラテジー 奥川 睦 114

看護婦 光と影 27 青木孝子さん(3) (最終回) 増田れい子 116

〔論文〕 経済を小説にする女性性——清水一行の「動脈列島」の場合 プリンドル玉枝 123

編集後記 144

軍事基地・軍隊はもう要りません！

高里 鈴代

〈なぜ わたしが……〉

無数の少女・女性たちが息を吐くように問い続けています。今、その答えがハッキリと見えませんか。ただ〈女〉であつたから、なのです。

九月四日、学習ノートを買つて帰る途中の少女は、〈女〉を待ち伏せていた三人の米兵によつて拉致、強姦されました。今日の少女は明日の女性です。属する性のただそれだけの理由で少女に加えられたこれほどの暴力。女性の尊厳を完全に抹殺する行為に、女たちはもはや黙り続けることを止めました。

戦場、紛争地、軍隊駐留地、外国占領地、そしてPKO駐留地であつた所から無数の少女・女性たちのうめきが伝わってきます。いかに軍隊の大義が〈平和〉維持態勢でも、軍隊とはウォーマシン化した兵士の性攻撃を深く内在するものです。〈女〉はまぎれもなく攻撃のターゲットであり続けたことは歴史が証明しています。

しかし、人種や民族や国籍がなんであれ、女性への暴力、尊厳を侵す犯罪を、もはや矮小化させてはならないのです。

〈なぜ 沖縄が……〉

朝鮮、ベトナム、湾岸戦争、そしてアメリカが関与する紛争に直結した前進基地である

「なぜ おきなわなのですか……」

沖縄に、米軍基地の恒久化が図られてから五十年が経過しています。特に、あらゆる戦闘状況に即応する米海兵隊約二万人を含む兵力規模、演習内容は、日本の他の地域と到底比較にならない基地被害をもたらし、人に向けられる暴力は絶えません。

今、日米安保、日米地位協定の見直しで求められるものは、グローバルな戦略構想下に於ける日米のパートナーシップの再確認ではなくて、子ども・少女の安全保障、女性の尊厳の視点です。それは、僅かな基地の返還ではなく、軍隊の大幅な撤退を意味しています。しかしこの要求は、沖縄に強いられた五十年を振り返れば、当然すぎる権利ではないでしょうか。

北京NGOフォーラムで、女性に対する暴力を語り、尊厳回復のシステムや、武力によらない平和の構築にむけたネットワークづくりを確認した女性たち。また、採択された「行動綱領」には、「紛争下における強かんは戦争犯罪であり」「責任のあるすべての犯罪者を訴追し被害者である女性に十全な補償を行う」が盛り込まれています。これは長期軍隊駐留下の沖縄にも当てはめてよい指針です。

北京の熱い風を持ち帰った女性たちに、ポスト北京の第一步を沖縄と共に歩んで欲しいのです。

沖縄はもう一歩も後へは退かない！

少女に対する暴行が沖縄の県民に伝えられたのは、九月八日の午後。第一報を伝えた琉球新報夕刊は、二段組二十行の目立たない記事だった。見出しは「暴行容疑」。多くの島民は「またか」という思いで見すこした。米兵の暴行は、日常茶飯事だった。

この小さな記事をいま読み返してみると、県警は事件後すぐ緊急配備を敷き、犯行に使用されたレンタカーなどから三人組を割り出し、米軍に身柄の引き渡しを求めていることがわかるが、この県警の動きはマスメディアでは伝えられなかった。

九月七日午後、中部七市町村の自治体責任者と住民を集めて沖縄市民会館で開催された「基地シンポジウム——沖縄の基地 過去・現在・未来」でも、この問題は全くとりあげられていない。

*

しかし九月九日には、沖縄タイムスがこの問題を社会面のトップで伝える。先行した琉球新報が、この日は、「米軍引き渡し拒否」を四段抜き四十四行で「犯人の身柄引き渡しを要求した県警に、米軍は日米地位協定を理由に拒絶した」と短く伝えたのに対し、沖縄タイムスは「米兵が女子児童乱暴」と十二段抜き。内容は米軍が拒絶したという記載はなく、「三人の身柄は起訴後に日本側へ引き渡される見通し」と、やや樂觀的だが、「三人がかりでら致」の大見出しと、各界からの反響は、全島に衝撃を走らせた。

米兵が女子児童乱暴

本島北部 3人がかりでら致

米軍が身柄を拘束

十日、「新報」は社説で鋭い論陣を張る。「沖縄は占領地ではない」——人権には人一倍敏感な国を自認している米国のこの落差は何なのかと切りつけた刀で、基地犯罪を強いられている沖縄に、日本政府は責任を感じるべきだ、と。この日、北京NGOフォーラムから高里鈴代さんたち95NGOフォーラムの主要メンバーが帰国。女たちの怒りは即、行動に発展する。

十一日、高里さんほかNGOの女性たちが記者会見。万感胸に迫る涙は、テレビの映像で、島民たち、とくに女性の胸をかきむしる。

二十二、二十三、二十四日、三日連続で全島の女性を結集した四十年ぶりの「島ぐるみ闘争」。母親たちの怒りと悲しみがうずまき、女たちの一分間スピーチは、長い列をつくつた。その思いあふれる集会はアモへと流れ出して、五十年間の積もる憤りを路上にぶつけた。

の版

[illegible]

身柄引き渡しに
地位協定の力べ

見直し求める声高く

しゐる。

基地撤去

..
しかない

女性の地位向上をめざす
沖縄ウィメンズネット

幼い子に
言語道断
提提續紹・沖城人権

明
一ク

かせ
の経歴状の補綴に
ヒストミン

これ以上許さない！少女・女性への暴力・人権侵害

9・23「子どもたち・女たち・島ぐるみ集会」から

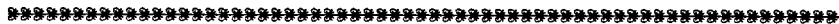
高里鈴代（前略）「もうこれ以上の破壊は許さない。核実験、軍事力、すべての暴力。さあ、女たちよ、新しい平和な世界を生み出そう。核実験だけではありません。軍事力から生まれる、女性に対する、子どもたちに対する、環境に対する、凄まじいばかりの破壊、そして一人一人の生活の場でうける、女性たちに加えられる暴力、すべてが無くなる世界を目指して、武器を背後にした平和ではなく、武器のバランスで考える平和ではなく、本当に新しい平和を、女性たちで生み出そう、そういう決意をしよう」

そういう呼び掛けを私たちは徹夜でメッセージを書いて北京会議で貼りました。あの布には、北京に集まったアフリカの、南米の、アジアの、中国の、フランスの、さまざまな国の女性たちのサインが、収められています。声をあげてメッセージを送って下さった方も含めて、今私たちは世界とつながっていると思うのです。勇気を出して、この島に振るわれている暴力を本気になつてはねのける力を出しましょう。

まずこの行動の基本的な考えとして、実は今度北京で採択されました行動綱領の中に「紛争下における女性に対する強姦、暴力は、戦争犯罪である」という規定が盛り込まれました。この新しい規定、これは一九九三年の世界人権会議において採択された宣言であります、紛争

下における、戦時下における女性に対する強姦・暴力は戦争犯罪で、決して個々人の兵士の行為ではない。個人のレベルを大いに超えて、戦争犯罪であるという、その定義を受けて、私たちはこの五十年間存在し続ける軍事基地——世界のさまざまな紛争に関わりをもち、これから起こるかもしれない紛争・有事に備えて訓練をし続ける前線基地から振り向けられる暴力も、同じく戦争犯罪として、私たちはしっかりと「許さない」決意が必要だと思っんです。

小学生が今、外出をするにも、不安な思いでいる。被害を受けた子はもちろん、どの子も、そしてここにいる私たちも、お母さんの膝に座っている姪ちゃんも、どの子もどの人も、誰からも暴力をふるわれたり、人権を侵害されたり、尊厳を踏みにじられてはならない尊い存在であることを、私たちは改めて決意をしたいと思います。日本も批准しております「子どもの権利条約」の中に、さまざまな紛争の中で、被害を受けたり傷ついたりした子どもに対しては、その子どもの心身の健康を回復させるために、痛みをきつちりと回復させるための手だてを取るの、締結国、子どもの権利条約を締結させた国の責任である、と書いてあります。子どもの権利条約も、そして北京会議で採択された、少女たちに加えられる暴力を許さないと、きちつと言っている行動綱領も含めて、このような暴力をこれ以上ふるわれることを「絶対に許さない」という強い要求を、私たちは、日本政府に対して強く要求していかなければならない。そしてそのためには、基本的に、最終的にはこの島から軍事基地、軍隊が撤退すること、その日が来るまで、私たちの生きている間に、私たちの子や孫の世代にこの負担が行かないように、しっかりと闘いをしていこうではありませんか。少女、そして多くの女性たちに思いをはせながら、今日の集会、抗議の行動をしていこうと思います。



司会（粟国千恵子）今日の集会は、当初、那覇市内でやろうということで計画がなされましたけども、その後、いろんな団体が那覇を中心に行動するということが、米兵による犯罪が圧倒的に中北部に集中しているということもありますので、実行委員会としましては、これを沖縄市でやろうということにいたしました。普段から女性の人權とか、暴力に取り組んでいる草の根のグループ十三団体の協賛も得まして、開催にこぎつけることができました。昨日は台風のことでも大変心配されたんですね。どうしようということもあつたんですけども、たとえ雨が降ろうが、少々の強風があろうが、私たちのこの気持ちをどうしても表現したい、そういうことで、延期にすることは決定いたしませんでした。私たちのこの心からの怒り、前進したいという思いが台風をはねのけて、無事開催するに至つたのだと思います。

さて、これから会場の皆さんと一緒に話し合いを進めてまいります。今日の集会は四日に起こりました少女への大変痛ましいレイプ事件がきっかけにはなっておりますが、今日はそれとだけではありません。これまでに多くの声を出す、または声を出せない少女・女性たちの事件がありました。いろんな事件がありました。そのことをもう今日から以後一つも許さない、二度と許さない、そういう思いを込めて、すべての女性への人権の問題を話し合おうということで企画をされております。ですから、今日参加をしました私たち一人ひとり、全員が自分自身の問題として、そして少女・女性への暴力、人権侵害を許さない問題として、全員でいろんな話し合いをし、発言をする集会にしていきたいと思ひますので、よろしくお願ひしたいと思います。次のプログラムはバズ・セッションということになつておりまして、六人から七、八人くらいの方がまず向き合つて、約三十分くらい話し合いをしていただきます。自分たちの人

権侵害の問題について、真剣に話し合いをしていただきたいと思います。まず前列の方から、一番前の列の方は椅子をちよつと後ろに向けて、話し合いに入りますので、前の方が後ろへ向きましたら、三列めの方がまた後ろを向いていただいて、順々に輪を作つて話し合いに入つていただきたいと思います。

(バズ・セクションに移る)

司会 会場の皆さん、残念ながら時間のお知らせをしなければなりません。お話はつきないと思いますが、だいたいこのあたりで一応バズ・セクションを終わりにしたいと思います。椅子を後ろに向けた列の方は、椅子を前に向けて下さい。正面のほうに椅子を直していただいて、次のスケジュールに移りたいと思います。

(こゝで歌、「明日の道を開こう—CONNA (I am going to) KEEP ON MOVING FOWARD」)

司会 ご協力ありがとうございました。次の日程に移りたいと思いますが、その前に今日の集会に対しまして全国から、それから県内からも、今日どうしてもこちらの会場には来ることはできないけれども、自分のメッセージを託したいということで、沢山のメッセージが届いております。それを全部皆さまにご紹介したいと思います。桑江テル子さんからご紹介いたします。参桑江 それでは最初にメッセージその他を頂きました方のリストからご紹介いたします。参議院議員清水澄子、東京葛飾「命どう宝」ネットワーク、ていーだぬ会、全国フェミニスト議員連盟、売買春問題と取り組む会十六団体、沖縄リサイクル運動市民の会、あごら・斎藤千代、

市川房枝記念会・山口みつ子、東京都大田区・神崎まき子、日本キリスト教婦人矯風会、NGO北京世界会議・八重山ミードウンネット石垣、ふえみん・婦人民主新聞、アジア太平洋資料センター、県議会議員糸数恵子、NGO北京沖縄うない・大城清子、静岡YWCA沖縄ツアール一同、函館YWCA、日本YWCA正義と平和委員会、福岡YWCA、活水女子大学YWCA、東京YWCA、東京キリスト教女子青年会、東京YWCA国際社会ネットワーク委員会、浦和YWCA、京都YWCA、在日外国人のための電話ネットサービス、仙台YWCA人権を考える会。二四の中から選びまして、三点ほど文面をご紹介します。

日本YWCA会長・島田玲子さん、正義と平和委員会・佐治絹代さんから。被害者の少女の体と心の深い悲しみを思うと、強い憤りを禁じえません。少女は人格を持った人間です。その尊厳を傷つける行為は重大犯罪であり、女性に対する暴力は人権侵害です。その行為を黙認するのが基地です。米兵による女性への犯罪は沖縄に基地がある限りたびたび起こっていることです。そして日米安保条約と基地がある限り、裁かれないうままになつてしまいます。私たちはこうした事態を許すことはできません。沖縄での集会によつて、多くの女性の声を力とし、再び悲劇を繰り返さないため、私たちもさまざまな形で共に連帯していきたいです。(拍手)

次は東京都大田区の神崎まき子さんのメッセージです。

九月四日のこと、非常に怒っています。悔しいです。兵隊なんかがいるからいけない、基地なんかあるからいけないと思います。委員会の要求、特に五に強く賛同します。犯人が米軍だ

から、被害者が児童だから、ということに限らず、すべて性暴力は被害者個人の尊厳、人格などに対する破壊的行為です。強盗か殺人などのような重罪で、重罪と同様に扱って、重刑に科すべきだと思っています。マスコミの報道を見ると、その内容は地位協定のこととか、沖縄の特殊性とか、誰が謝ったとか、そんなことばかり。性暴力自体、軍隊という存在自体、すなわち核心へと問題を掘り下げることが貴集会ではなされることと思います。そしてその問題意識が、一般的になればと願っています。できることから私も頑張りたいと思っています。台風はどうなのでしょう。気になるところですが、盛会でありますように。(拍手)

次は斎藤千代さん、〈あこら〉の斎藤さんからのメッセージです。

レイプ事件、怒りと悲しみに堪えません。再発を絶対に防止したい。地位保全協定の見直しなどでは再発は防止できません。犯人が重刑を科されても、少女の心身の傷は癒えません。安保廃棄まで共に闘い抜きます。ヤマトにも燎原の火をあげます。こちらでも女たちはもちろん、男たちも怒っています。ヤマトは、沖縄という娘を人質にして繁栄してきた。本当に申し訳なく思っています。まず沖縄の基地からだけでも撤廃を、力の限りつくします。皆さまの熱い思いを書いて下さい。訴えてください。〈あこら〉は全誌面を提供します。紙代、印刷代全部持ちますから、怒りをぶつけて下さい。お待ちしています。(拍手)

市川房枝記念会の山口みつ子さんからのメッセージです。

このたびの米兵の少女に対する蛮行は、断じて許しがたく、怒り心頭に発しています。先の

北京会議で、世界から女性に対する暴力の生々しい報告の直後だけに、私たちはこの問題を根源的に防ぐ方策を立てなければなりません。五二団体にも伝え、この問題に取り組むように伝えます。（拍手）

従軍慰安婦問題を考える女性ネットワーク・森川万知子さんからのメッセージです。

集会参加者の皆さま、ご苦労さまです。今回の米兵による輪かん事件を、私たちも大きく深く憤っていることをお伝えしたく、メッセージを送ります。一昨日、モンテール駐日大使が、河野外務大臣を訪れて謝罪したとき、三人の米兵たちのことを「獣たち「アニマルズ」と称したそうです。全くその通りだと思えます。さて私たちはこの問題の本質は、慰安婦の場合と同じで、軍隊と性、戦争と性というところに行き当たることと考えます。軍隊という組織そのものに人間性を破壊する暴力性が備わっているということの問題提起したいのです。極端に男性ばかりが集められた組織、上意下達で命令ばかりが幅をきかす組織、制服・制帽など何も彼も規則づくめの組織、二四時間管理の組織、そして不平等な階級組織、軍隊組織そのものが暴力組織と言えるのではないのでしょうか。そのような組織が、戦時には敵国への殺人集団となり、平時には自軍の兵士たちの人間性を殺し続ける、と考えます。軍隊内に精神病患者が多いことが、それを証明しています。私たちは今回の事件から、改めて男性中心社会の典型である軍隊が、私たち女性にとつて、性暴力装置であることを肝に銘じたいと思います。三人の米兵は強姦犯人として、厳しく罰せられなければなりません。私たちは軍隊を無くしていく努力をこれまで以上にしなければなりません。最後に被害者である少女を、沖縄の女性たちが物心とも

に支えていかれることをお願いしつつ、集会の成功を祈ります。（拍手）

司会 先ほどのバズ・セッションですけれども、涙を拭きながら一生懸命討議しているグループもありました。時間切れをお知らせするのも大変心苦しいくらいに、みんなで私ども女性に対する性暴力のことを、いろいろ話し合いをいたしました。最初の経過報告の中で、高里代表も思わず涙ぐんでしまいましたし、私も今日急きょ進行役をと言われました時に、こつちに立つて泣いてしまうのではないかと、大変心配をいたしました。この問題を、今回の事件を、そしてこれまでの事件をいろいろ思い起こして考えます時に、眠れない夜を過ごしましたし、皆さん一人一人みんなそうだと思います。これは女性に限らず、男性からもそういう声がたくさん聞こえました。本当にこういう事件を今後一切許してはいけない、許すことはできない。そのためには私たち一人一人の決意と行動、そういったことが求められている。もちろん個人の責任ではなくて、国家的な、組織的な意味でいろんなことが変えられていかなければいけない。特に、ここ数日間の新聞報道のなかで、地位協定の問題だけが何か取り上げられているみたいで、仲間の中でも「そういう問題ではない、そしてまたそういう問題だけにすり替えられていてはいけない」という疑問が強く出されておりますし、皆さんもきつとそうだろうと思うんですね。

それで、私どもの今日の集会は、これから行います「一人一分間のメッセージ」を一時間取りました。このことを私たちの今日の集会の、一番深い思いのメインにしていきたいと思っております。マイクを右と左、ちょうど中央からちよつと前くらいに二本準備いたしました。発

言をなさりたい方は、全員そこに並んでいただきたいと思っています。

今日の参加者は、三百名になりました。こういう悪天候にもかかわらず、これだけたくさんの方がこちらへかけつけて下さった。小さな組織から声をかけたんですけれども、これだけたくさん集まっていただけたことはやっぱりみんなの思いが結果されてるのだと思います。

ここでマスコミの方にお願ひします。正面から光をあてるかたちで、一分間スピーチを撮影することはちよつとご遠慮いただきたいと思っています。できるだけ遠方からという形で撮影してください。

会場の皆さんは自分の言いたいこと、思つてること、今日みんなの前で言いたいことを、どうぞ吐き出してください。私たちはその思いを、この会場でみんなと一緒に共有することによつて、一步、もしかしたら百歩前進できるんですね。そのことは、これまでいろんな運動を通して、私たちが考えてきたことだし、また確信しています。女の人はこれまで、発言する場がいつぱい抑えられてきました。現在もそういう事がいつぱいあります。そういう中で、私たち女性の友情と、連帯と、愛に包まれて、私たちはこれから一分間のスピーチの時間を取りましょう。そしてここで発言されたことをみんなで鎖のように胸につないで、これからの行動につなげていきたいと思うんですね。ここでは言つてはいけないこと、恥ずかしいこと、ちよつとしたことだからということとは決してないと思います。どんな小さな意見でも、どんな重たい事件でも、一つ一つみんなで共有して、受け止められる場であることをここで確認して、スピーチに移りたいと思います。

会場には十代の方々もみえてます。十代の皆さん、ここは大人のひとか、そういう遠慮はま

つたくないんです。どうぞどんな意見でも、あなたの意見を本当にみんなで共有したいと思いますので、列に並んでください。できるだけ全員の皆さんにマイクの前に並んでいただきたいと思っています。お名前とか所属とか、全く必要ないと思います。できるだけ多くの方と時間を共有したいと思いますので、ご自分の思いを一分間というものを頭にいれて、慣れている方も慣れていない方も、その範囲でご意見をお願いしたいと思っております。マイクの前にどんどん並んでください。右手と左手にマイクがあります。並びながら考えて結構だと思しますので、近いほうに並んでください。三十名くらいはご発言できると思いますんで、十五人くらいは並んで結構です。若い人も若くない人も、全部並んでください。右と左のマイク、交互に発言することにしたと思います。最初に会場の皆さんから見て右手のマイクからどうぞ。

基地をなくさないかぎり犯罪は続く

A 私は大学で児童教育を学んでいる者なんですけれども、今回の米兵による少女暴行というのは、この子の今後のことを考えると、本当に許せないというか、新聞を読んで胸が締めつけられるような思いがしています。マスコミで報道される度に、今どういうことをこの子は考えているのかなあとか、ご家族のこととか考えると、非常に許せないなあという気持ちで湧いてきます。私はやつぱり、こういう事件が起こるのは、基地があるからだと思うんですね。こういう基地を無くしていかなければいけないと思っています。根が深い問題だと思ふし、今女性の人権がないとか、非常に暴力とかやられてるんですけれども、もつともつとそういう根本にある問題、安保があるから基地もあるし、そういうことを無くしていかないと、いけないん

じやないかなと思います。日本政府とアメリカ政府は、地位協定の見直しとかを言ってますけれども、何だかごまかされてるんじゃないかと私は思ったりするんですね。運用の見直しとか、そういうことだけで済まされる問題じやないというか、やつぱりこういう沖縄の基地がどんだ日本とアメリカの政府の間で強化されていつてるのを作り変えていくということを指して、私たちは声をあげていかなければならないと思っています。(拍手)

B 今回こうして皆さんと一緒にスピーチできることを、とても感謝しています。何十年かずつと女性の問題、特に陰になつてゐる女性との関わりを続けてきまして、フィリピンの女性とか、働く女性たちのことをやってきました。やつとここで本当に皆さんと輪を広げる一つの座が生まれ生じたという感じです。米軍が実弾演習をするときに、あの弾は恩納岳だけではなくて私にも向けられている、女性にも向けられている、いつも思っていました。そういうことが実際に起こつた。今回の事件で自分の中で本当に爆発的に、ものすごく怒りが起こつたんですね。私は今自分がある周囲の、特に幼稚園で、お母さんたちどうなんですか、どうなんですか、一人の子を持つ親として何かしなければ、というものすごい怒りがありました、やつとこの集会で皆さんと一緒にすることができて、感謝しております。グループで話し合われた中で、沖縄の、今までのゆいまいるの具体的なことを、もつと復帰させなければいけないのではないか。地域が自分の子どもだけではなくて、周囲の子にも、もつと目を向けて声をかけあつたりしていかなければいけないんじゃないかということがすごくお母さんたちの中から出てきました。特に同年齢のお子さんをもつお母さんにとつては、言葉にならない、叫びきれないほ

ど今回の事件はショックだと思います。私たちがどんなに防衛して自分の子を守ろうとか、地域でやろうといつても、基地の膨大な、怪獣のようなあいうものに打ち勝つことはできないんです。あれが存在している以上は打ち勝つことはできないと思います。ですから基地撤廃をもっと今から本腰を入れて行動に移していかなければいけないのではないかと思います。

これは、沖縄の問題だけではないと思います。アメリカとかいろんなところで報道されていますけど、日本政府、日本全国には、真実はまだ伝えられていないと思います。いかにして私たち沖縄の女性が、真実を、日本全国の女性に伝えられるかというのが大きな課題じゃないかと思います。それを伝えていかなければ、沖縄の女性の強さが弱められていくと思います。沖縄から全国に向けてどのようにこれを伝えていくか、そしてネットワークを作っていくかが、広がりをもっと力づけていくことではないかと思っています。基地がある以上は、犯罪を無くすることは絶対にありえません。いくら詫びても、詫びても、また繰り返されることだと思えます。基地が演習している時には、私たち女性に標的が向けられているということをいつも意識したい。小学生に対する被害は、本当に現実の問題です。いつも女性に向けられた第二の実弾演習的だと思います。そういうことで、自分の問題として、基地撤廃を本当に心から叫びたいと思っています。どうぞ女性の皆さん、日本全国にどのようにしてこれを伝えていくか、そしてこの力が、これからも継続していけるような方向にもつていきたいと思います。(拍手)

C 私はい「新日本婦人の会」で領事館に抗議に行つたんですけれども、いとも淡淡とした感じの回答で、本当に地位協定に従つて自分たちは身柄を拘束してるんだということでは括つてしま

われたんです。けれども、どうしても釈然としないもんですから、じゃあ地位協定とは一体何だろうかという事で、私たち、地位協定の文章も読んだことの無い方のほうが多いんじゃないかなあと思うんですけど、私も初めて基本条項を広げましてね、地位協定の文章をちよつと読んでみたんですけど、本当に兵隊を守るための地位協定だなあと思いました。見直しとかいろいろ言われてるんですけども、見直しなんかいらないんですよ、安保はやめてくださいという感じでね。根っこはやっぱり安保条約だと思います。安保をやめてくれればすべて解決しますので、安保条約をぜひ破棄して、軍事基地が沖縄から撤退して、平和な豊かな沖縄を作っていくみたいなあと思つています。一つ一つの事件をその場で話し合うなんて、とてもできなと思うんですよ。先ほども私のグループで話し合つたんですけども、やっぱり安保条約を廃棄して、基地を撤去するしか方法はないんじゃないかという結論に達しました。ぜひ皆で、安保条約を廃棄しよう、軍事基地はいらない、と言いましよう。(拍手)

日本のお父さんお母さんから爪はじきされた思い

D 私は、いつから沖縄の県民は日本の国民じゃなくなつたのかつて思つたんですよ。私たちがNGOで北京に行ったときも日本の国民だつたんですよ。いつのまにかお父さんとお母さんから爪はじきにされて、私たちの声がお父さんとお母さんに届いてないんじゃないかって、そういう気がすごく強くしたんです。外相がおつしやつているような小手先な話ではすまされないうい思いを、私たち実際は持つていると思うんですけども、私たちの声よ届け、私たちのお父さんお母さん、私たちの声を聞いて、ちゃんと反映させてください！つて言いたいと思います。

E 先ほど私たち七名のグループで話し合ったことを、戦争体験者、体験していない私たちも交えてまとめてみました。先ほど、沖縄の女性には熱しやすく冷めやすいという言葉がありましたが、私たち七名の話し合いの中では、私たち女性は今度こそみんなで頑張ろうと、固い握手をして決意を固めました。一人ひとりが自分の問題として取り組み、自分の娘がいる、孫がいる、という気持ちで、母親として、女性として、今度こそ私たちすべての女性の力を一つにして、勇気をだして今回の問題を沖縄内の問題に止めるのではなく、世界規模な問題にすることにより、安保・地位協定の見直しを要求していこう。今回の事件は、基地がある故の問題で、基地の撤去も、私たち女性には、声を大にして要求を進めていきたいと、固い握手でまとめました。(拍手)

F こんにちは、学生です。あらゆる手段を尽くして、訴えることができたらと思うんです。特殊な島の沖縄であれば、思い切って報道してもいいと思うんです。沖縄タイムス、琉球新報ありますよね。特殊な沖縄であれば、特殊な報道があつていいと思う。一面全面全部抗議の文を書いてもいいんじゃないかと思いました(拍手)。私は緊張してるんで：先ほどのセツシヨンの中で、初めから米軍兵士による少女暴行というのは頭にくるなというか、こういうことをする人は人間腐ってるんじゃないかと思つていたし、こういう女の子は毎日どんなふうに暮らしているのかなと思つていたんですけど、さつきもすぐお母さんになる人の話を聞きました。こういう子どもを見ながら母としてどう思うか、というのを言つていらしたんですね。私は考えていなかったから、ああやつぱりお母さんというのはこういうことを考えるんだなあとと思つ

て、本当に許せないなあと思いました。こうした米軍の暴力がまかり通る、あまつさえ米軍の事故もとつても多いです。沖縄は。飛行機が落つこちたりして、非常にまだ米軍の占領下みたいにも思えます。支配するものに泣き寝入りを強制されて、人権も何もない、植民地の人民というように感じます。私はアメリカ政府によつて、戦争のために置かれている軍事基地、軍隊によつて、女の子とか、お母さんとかお父さんとか、労働者・市民の生活が脅かされるという状況を、一刻も早く私たちが団結して打開していかなければいけないんじゃないかと思っています。ところで植民地といえば、ポリネシアの、フランスの植民地で、先日、各国の反対の声を無視して、核実験が強行されました。北京でも女の子の人たちが頑張つて、核実験反対と言つてたんで、私はとつても嬉しく思つたんですね。だけどポリネシアというのは沖縄と同じように、平和な島にフランス軍がやつてきて占領して、戦争のための基地を置いて、許しがたいことに放射能をまきちらす核実験場として使っている。こういう中で私の友達は、タヒチ島に行つていろんなことを聞いてきたんです。そこで何が行われていたかというと、お母さんとか子どもたちに放射能障害がとつても多いんです。お母さんたちは子どもを産むのにも、フランスの指定された病院に行かないと子どもが産めないという状況があるんです。隠しているんですね、放射能被害。私はぜひ、女の子の人として訴えたいつて。核実験第二回が二十五日にあります。ぜひ沖縄からも、同じ母親として、連帯の声をあげてほしいなと思っています。(拍手)

G 今回の米兵の少女に対する拉致・暴行事件は、絶対にこれを許してはいけないという気持ちで、私も参加しています。そのことについて、ここにいる皆さん、すべての沖縄の県民でこ

の問題について真剣に考えて、論議をして、具体的に行動をしていく、その取り組みはとても大事なことだと思えます。そのために私は今日来しました。でも先ほど高里さんがおっしゃったんですけど、こういった事件は毎年のように起きています。さつき少人数のグループで話した時にも、戦後五十年と言われているけれども、今でもこういった事件は引き起こされていますよ、とおっしゃってたんですよね。とつてもびつくりしました。毎年起こっているという。なぜこういうことが許されてしまっているのかということを、私たち考える必要があると思うんですよね。確かに毎年引き起こされて、繰り返すたびに、その時々私たちはその問題について考えて、憤りをおぼえて、反対の取り組みをやってきたんですね。決して真剣ではないということではなかったと思うんです。それがなぜ力として発揮できないのかなあということを考えたいんですけども、やっぱりこれは反対していく運動に大きな限界がどうしてあるんではないかと思うんですよね。政府は基地見直しとか地位協定とか言ってるんですけども、私たちは、こういう立場で彼らがそう言ってるのかを考えて、私たちと同じ意味なのかを考えていかないといけないんじゃないか。みんなでぜひ考えていきましょう。(拍手)

由美子ちゃん事件の恐怖を思い出す

H 九月十四日に私の所属する婦人団体十四人で、総領事に抗議に行きました。私今回の事件、本当に皆さんと同じ思いで、この少女がどういう思いでいたか、そしてその後の子どもたちの心や家族を思うとき、本当に胸が締めつけられる思いです。私はそのとき一九五五年に起きた、六歳の女の子の「由美子ちゃん事件」が本当に思い起こされました。私も当時九歳、今回起こつ

た少女と同じ歳のころやんばるで過ごしたんですが、学校の帰り道に当時のマリン兵の行軍に行き会ったときの、あの背筋が寒くなるような恐怖感、そしてあの由美子ちゃんが本当に塵あぐたのように捨てられたあの事件、沖繩がどういう状況にあるのか、子どもなりに沖繩の実態を見据えた思いをまた思い起こしました。その時に少女だった私たちが今母親になつて、また自分たちの子どもたちがこういう事件に巻き込まれたということを、本当に怖く思います。実は総領事に抗議に行つたときに、対応したマーハーさんがおつしやつたんです。自分たちはなにも好き好んで身柄を拘束しているんじゃないと。地位協定にのつとつてると。基地があるのは、安保条約、日米両政府の合意のもとなんだとおつしやつたんです。皆さん、これはやつぱり本当にお互いが良き友人であるためにも、国として対等平等な関係で友好関係を結ぶためにも、日本が好き好んで結んでいると思つている、障害となつてこの問題を廃棄する以外に、本当に私たちはいいい関係を保てない。だからぜひこのことはもうきちつとしてほしいと、私たちの抗議と基地撤去や安保条約の廃棄を訴えてまいります。今度決議されます決議文の問題、大方賛成ですが、皆さんからも意見が出されましたし、話し合いの中でも出されましたように、安保条約廃棄の問題をぜひ盛り込んでいただきたいと思います。（拍手）

―― 一分間厳守でひとこと行きます。那覇から来ました。組合組織の方におります。実はこの事件が起こりまして、私どもも、知事、県議会要請もしましたし、米国の総領事にも抗議文を出してまいりました。決して起こつてはいけない事件がまたこの沖繩で起こつたわけで、私たちが思い起こすのは、終戦直後の夜中に半鐘を鳴らして、米軍が女を探しに来ているという、

あの鐘の音が、私はすごく耳についているんですね。女性がたびたび被害に遭いました。あれから五十年、未だにこういう事件が起こっているということは、許せないという気持ちです。私どもの話し合いのなかで、加害者にも親がいる、被害者にも親がいる。そういうことからすると、被害者も加害者も出さないように取り組みをしなくちゃいけないという話が出ました。基地があり軍隊がある、そのために弱い女性・子どもが被害にあう。ですから安保条約を廃棄し、日米地位協定を廃棄するような見直しを絶対に進めていかなくちゃいけません。それにしても、ドイツと、沖縄と、韓国と、どうしてアメリカは、地位協定の内容が違うんでしょうか。そんなに人権が、一等国民、二等国民、三等国民というふうに色分けができるんでしょうか。そこらあたりに私はものすごい怒りを感じています。犯罪を犯したら即時日本の警察に身柄を引き渡すべきであります。今後とも多くの女性と連帯して、この問題は闘っていききたいと思えます。

諸外国の女性たちにも訴えよう

」戦争中でもないのにアメリカ兵が軍隊として沖縄にいるということは、基地があること以外なにもないと思うんですね。皆さんと一緒になつて、基地撤去を叫んでいきたいと思っています。来週、沖縄県の〈女性の翼〉の団員として、アメリカ・カナダへ行きます。そのときアメリカ・カナダで、沖縄ではこういう事件が起きてますよと、抗議じゃなくて連帯の輪を求めていたらいいんじゃないかと、強く思っています。(拍手)

K 那覇からまいりました。一つだけ提案というか、お願いがあります。地位協定の問題で、それがあるから米兵が引き渡しできないということなんですが、これだけ国際交流とかいろんな交流が基地との内外で行われているという現実があります。米兵が「基地協定で守られているから何をしてもいい」と言ったとしても、基地内の女性たちも含めて、全女性が犯人を守っていると思つていても、基地の人たちが口をぬぐつてぬくぬくとしているとも考えられません。私たちがもつと積極的に金網の内の女性たちにも声をかけて、私たちの運動をもつと大きく展開していけば、このことを越えることができるんじゃないかと思ひます。米兵たちを守るということは、米国にとつても、結局恥な問題ではないかと思ひますので、犯罪者を引き渡すべきということを声を大にして展開していつてほしいというのが、今回参加した感想です。

(拍手)

L 難しい話は申しませんが、今日ここに来る前から、その前からですけど、もうずつとずつと本当に「ワジワジする（怒り心頭に発してもうガマンできない）」ですね。

二人の娘がいます。このたびの少女事件を目のあたりにして、もう絶対に許してはいけません。ここで黙っていたら、また二度、三度とか繰り返すんじゃないか、それを許してはいけません。あの少女のことを思えば、本当にそつとしてあげたい。でもそれではだめだ、という思ひで、今日はこの集會に参加いたしました。沖繩に基地があるから、このようなことが起きたと思ひます。これからデモ行進のなかでも、本当に沖繩から基地をなくす闘いを大声で叫んでいきたいと思ひます。（拍手）

M 九月四日の事件を知って、沖縄の女性が全部泣いたと思います。こんなことは二度とあってはいけません。今こそ私たち女性の力を世界に叫び続けていきたいと思っています。沖縄の女性から、今回の北京女性会議で明らかになった、世界で泣いている、差別を受けている女性のために、一緒になって闘っていきたいと思います。私たち女は、性行為の対象物として生まれたものではないと思うんです。私たち女は、人間として生まれてきたんだと思います。子どもであれ、若い女性であれ、おばさんであれおばあちゃんであれ（涙）この怒りを本当に私たちは共有したい。地位協定とかそういうことにすりかえられてしまう。それは私たちが本当に身をもって考えていかなければならないと思います。

今後私たちが、少女の怒りを、お母さんの怒りを共有することが、彼女に対して本当の支援になるんじゃないか。一つまちがえば、私たち彼女の加害者にならないとも限らないんですね。これが本当に私たちのほうにある「怖いこと」だと思うんです。一時的になってはいけないというのかな、これまでのいろんな事件も、被害者が一人の加害者の加害を受けたのに、多数の全男性と全女性が反対に加害者になってしまわないように、私たち連帯して頑張っていかなければならないんじゃないかと思います。（拍手）

N 〈NGOとみくすく…うないネット〉です。三点です。一点、基地撤去。二点、日米地位協定の見直し、三点、児童福祉の立場から少女の人権を守るということをふまえて、アフターケアの問題、そしてそのご家族の保障の問題、これを大きく取り上げていきたいと思っています。会場の皆さんと団結して、最後まで頑張っていきたいと思っています。（拍手）

〇 私は今回の事件でとても怒りを感じています。新聞報道を見て、この集会にぜひ参加してみようと思つて、参加しました。先ほどディスカッションをやつて、とても嬉しく思つたんですよ。今回のこの事件をどういうふうに反対したらよいのかというPTA連合会の方の、新聞報道議論の紹介があつたんですね。その方は、根本的な解決は基地撤去しかないんじゃないかという声に対する反論として、そういうことは政党や労働団体に任せておけばいいんじゃないかと発言して、結局子どもの権利を守ることに重点を置いて、基地撤去のスローガンを取り下げるということで落ちついたということが書かれてたんですよ。それに私はすごい疑問を感じたんです。私たちは今回のようないたましい事件を絶対二度と起こしてはならない、そのためには、やつぱり基地撤去、安保廃棄しかないと思うんです。そういう声が先ほどのディスカッションでみんな一致したんです。今後もうこういう集会がありましたら、ぜひやつていきたいと思つています。（拍手）

沖縄の資料をアメリカにもヤマトの村々にも送ろう

P 浦添市から来ました。私はアメリカに友人・知人がたくさんいます。この二、三日でたくさん謝罪の電話が来ました。多くの善良なアメリカの市民、私の友人、知人たちに、新聞の切り抜きやたくさん資料をいま送る準備をしています。アメリカの中でもこのうねりを起こしていきたい。アメリカには結構日本語が読める人がたくさんいます。皆さんも沖縄の新聞なんか読めないだろうと思わないで、アメリカの友人・知人へぜひ新聞を送ってください。私はせつせと送つて、彼らの中から基地撤去の運動を起こしてもらつてもいいです。

日本の国内からも、たくさんの方々が来ましたが、それでもなおかつ沖縄の状況を知らないヤマトの小さな村の女性たちにも、私はこの資料を送るつもりでいます。皆さんもどうぞ送ってください。（拍手）

Q 私は中部の町から来ました。小学生の時に「由美子ちゃん事件」がありました。その時は本当に大騒ぎになりました。小さい子が泣くと「米兵が来るぞ」と言われて泣き止むほどの恐怖の中で過ごした記憶があります。そういう中で復帰二十三年間たち、いま同じようなことが起こっている。絶対許せないと思います（怒りに震える声）。

私は学校現場に勤める者ですが、特に中頭（基地が集中している沖縄本島中部）では、子どもたちに、基地があるがゆえのいろんな問題が発生しています。ほんとに基地があるがゆえに子どもたちの健全育成ができない状態がたくさんあります。こういう最悪の事態が起きるということは絶対許してはいけないと思います。基地があるゆえ、こういうことが起きますので、私たちはみんなで手をつなぎあつて、基地を撤去させる。みんなで頑張りたいと思います。ここに結集した皆さん、共に頑張しましょう。（拍手）

R 日本の平和憲法の下だから復帰したのに、たいへんワジワジして（怒り狂つて）います。何も変わっていないじゃない、あの頃と。すごくワジワジしています。ここにある抗議文（案）「地位協定の見直しをする」なんて、こんな生易しいこと書かないで「撤廃！」と書いてもらいたいです（拍手）。「米軍が沖縄から撤退すること」は五番目じゃなくて、二番目に持つてき

て下さい。沖繩の人はみんな無念さをよく知っています。だから従軍慰安婦問題にも、もつともつとネットワーク組みましようよ。いま沖繩はこうして声を出せます。でもあの人たちはあの時代に誰も声を出してくる人がいなかったわけですよ。そして今もいません。この痛みをわかつてるみんななら、きつと連帯できると思うんです。あの人たちは親も子もなく、パツ！と連れ去られたわけでしょう。それを考えたらもつと無残です。さつき従軍慰安婦ネットワークの人の言葉、一言一言、ウン、ウン、とうなずきました。彼女たちと一番連帯し応援できるのは、私たちじゃないかと思っています。この働きをあそこの働きとも結び付けていたらなアと思っています。（拍手）

新しい運動を起こさなければまた事件は起きる

S　こんにちは。高里さんがおっしゃってました。「二度とこういうことを起こさないためにはどうしたらいいか」。私は非常に共感しています。私自身、なんでまたこんなこと起こるの？という気持ちで、二度とあつてはならないという気持ちでここに来ました。皆さんも同じだと思っています。

二度と起こさないためにはどうすればいいか……。たしかに今までは綱紀肅正をどうのこうのとか、地位協定をどうのとか言ってきました。でも皆さんがみんな語っているように、もうこれではダメなんです。こういう運動をしてきたから、また起こった。こういう運動を毎年毎年やる限りまた起こります。

確かに少女―女に対する人権侵害問題です。でも女性だけの問題にしないで、もつと多くの

男性にも呼びかけて、多くの働く仲間たちとも連帯して大きな声をつくっていききたいと思います。皆さん、共に頑張っていきましょう。私も小さい声ですけれど、みんなに呼びかけながら頑張っていきたいと思います。(拍手)

T 学校現場に勤める者ですが、本当に胸が痛いです。子どもたちは未来に向かって大きく育ってほしい。健やかに育ってほしい。そう思つてやつてゐるわけなんですけれど、沖縄であるがゆえに、基地があるがゆえに、こういう事態ができて、子どもたちに真実が何であるかをどういうふうに語っていけばいいのか、非常に胸が痛くなります。私は島尻のほうで勤めております。先週女性部の集会を持つて、抗議の決議文を出しました。現場にいる教師が、これ自分たちの問題としてとらえて、二度とこういうことが起きないように頑張っていきたい。沖縄のすべての人と手を取つて、軍事基地の撤去、安保の廃棄をやつていきたいと思ひます。今日のNGOの集会、昨日の婦連の集会、明日の婦団協の集会、ほんとに沖縄の女たちが怒つてこういう闘いをやつているのに敬意を表し、私自身も頑張っていきたいと思ひます。(拍手)

U 私も北京会議に参加した一人です。生活圏内に基地を持つ摩文仁から参りました。

九日の記事を読んだ多くの方は、驚愕と怒りで声も出なかつたと思ひます。十一日は私たちも防衛施設局に行きました。けれども、どんなに綱紀肅正を申し入れても、五十年間何も変わりませんでした。それが沖縄の現状だと思います。先ほどのバズ討議に親子で参加した中村さんという方がいらつしやいます。中学生のお嬢さんが一緒でした。彼女は、安心して勉強でき、

安心して生活できる環境をどうか作って下さいと言ひ、お母さんは由美子ちゃんの件でも国場君の件でも、みんな怒つたのに、なぜまたこんなことが起こっているのか、と問題提起しました。私たちは北京会議で「沖繩うない」の従軍慰安婦問題もやりました。「日弁連」の従軍慰安婦問題への提言というワークショップにも参加させてもらいました。軍隊の持つ構造的暴力が、女性の性への虐待という形で表れることは如実に示されています。沖繩に基地があるかぎり、そういう事件が起きて当たり前だというのを、私ども女は、いなぐわらび（女・子ども）は、忘れてはいけけないのではないかと思います。私たち女性は一人の人間です。男性の性の対象ではないのです。「軍隊における女は男の欲望のはきだめだ」そういう言葉がまかり通つていいはずがないと思います。女性の性の持つ、生命をはぐくむ、いつくしむ思いをひとつにして、本当に基地のない沖繩をつくっていききたいと思ひます。被害にあつた少女には、これからずつとずつと元気でいていただきたい（涙声）。こう祈らずにはおられません。共に頑張つて参りましょう。（拍手）

米兵はどんなひどい事をしてても基地に逃げればもう手が出せない

V (a) 私たちは高校生です。新聞を見てここに来ました。(b) いま混乱して、何を言つていいのかわかりません。でも……。 (a) でも基地は……。 (b) 基地がある限り、こういう問題は何も解決しないと思ひます。(a) ここに来て、自分たちは何も知らなかつたなあと、(b) すごく思ひました。新聞を見て、ただ怒りしか感じられなくて、(a) 何もしませんでした。(b) そんな私たちが知つていたのはただ一つで、米兵たちはどんなひどい事をしてても基地に逃げたら自分たちは何もでき

ないということです。だから……（ため息）……（二人で）二度とこんな事が起きないために、
沖縄から基地をなくしたいと思いました（大きな拍手）。

W 最近の新聞を読んですと、日本とアメリカが一緒になつて、沖縄県民の怒りをなんとか
なだめようという方向しか感じられないわけです。でも私たちはこれに絶対乗つてはいけな
い、とつくづく思つてます。男たちがだまされても女たちは絶対だまされないぞと（拍手）。
そうしないと、本当に軍隊と女性の人権は絶対に両立しないと思います。世界から軍隊がな
くならないかぎり、本当の女性解放はありえないと思います。それを沖縄からやつていきたい。
基地と毎日接して暮らしますと、感覚がマヒするんですね。でも、今度これが表沙汰になつ
たということは、本当に勇気がいったと思います。その陰には泣き寝入りしてきた数えきれな
いほどの女たちがいます。これを公にしてください。私たちは本心に
沖縄から軍隊がなくなるまで、世界から軍隊がなくなるまで頑張つていきたい。そのためのき
っかけにしなければ申し訳ない。少女の涙に報いることができないと思うんですね。だから今
度は絶対に許さないで、最後まで頑張つていかなくちゃいけないと思います。

もう一つ、さつきからとても気になつてることがあるんですが、ひどいことをした人に対し
てすぐ「獣みたい」とか「ケダモノ」とか使いますね。私は自然保護の運動に関わる者ですか
ら、気になるんです。獣たちは決して軍隊を持ちません。戦争もしません（拍手）強姦もしま
せん（拍手）人間だけなんですね、そういうことをするのは。私たちは獣たちにも申し訳ない
ようなことをしてるんですよ。だから本当の人間になつて、獣たちとも一緒に暮らせるように

なるためにも、頑張りたいと思っています。(大きな拍手)

X 沖縄市からまいりました。以前「基地は必要でしょうか」というインタビューをしたことがあります。「必要ない」という理想的な部分と、「なぜ必要か」という経済的な問題と、安全保障の問題が大きなネックとして残っています。安全保障という事を考えると、国を守るということは実際しなければならいし、安保に依存している事実があるのを私たちは認識しています。しかしながら、日本の一〇%にも満たない小さな沖縄にだけ七五%もの基地が集中しなければならいのかを考えたとき、安全保障は国家の問題と言いますけれど、国家が決める政策に、どうしても差別的なものを感じずにはいられません。基地があるということに対して、日本の政府はもつと強く言っていかなければいけないのではと思います。経済が基地に依存していることについては、基地をなくすことを前提に考えるべきだと思います。

私たちは沖縄にいるかぎり被害者という意識を持ちますが、日本国民であるという意味で加害者であることを決して忘れてはいけないと思います。従軍慰安婦の問題と同時に東南アジアで行われている買春ツアーを、私たちはどれだけ強く言ってきたでしょうか。軍隊の力、お金の力で、このように女性の人權が侵されていることを、自分たちの問題として、被害者的な立場と加害者的な立場に立って行動していきたいと思っています(拍手)。

これは全世界に突きつけられた女性の人權と尊厳の問題

Y NGO 北京会議から帰ってきて真つ先に飛び込んできたのがこの事実でした。元気で帰っ

てきたのに、自分たちが汚されたというか、自分たちが勉強してきたのが何だったのか、自己満足だったのかな、ということを感じました。少女の人権がこんなに踏みにじられていいのだろうか。今まで五十年間米軍のあまりに多い事件があつたので「いつもの事件か」と通り過ぎるだけでいいのだろうかということ、二つのことを思いました。またもや基地あるゆえの事件で、本当に基地協定、地位協定廃棄を強く叫びたいと思います。基地は絶対にイヤです。完全撤去まで共に連帯して頑張りたいと切に思います。

この事件は、単に米軍が引き起こした事件ではなく、全世界の一人一人に突きつけられている女性の尊厳と人権の問題ではないかと、とても強く感じております。二度とこのようなことが起こらないように、従軍慰安婦のような性のはけ口の口実を、私たちは絶対に許しません。

最後に心理学の専門家の方、教育の現場で働いていらつしやる方に、ぜひご協力をお願いします。少女とご家族のケアを完全にどうぞよろしく願います。（拍手）

Z 基地問題とか女性の性の問題とかが出ましたが、私は児童教育の専門をやっていますので、子どもの問題から視点をあてたいと思います。これは沖縄だけじゃなくて、日本だけじゃなくて、世界的な問題です。現在子どもたちの虐待防止のためのCAP（キャップ）というグループが出来ております。子どもたちの人権を守るためにも世界中に訴えていきたい。

一つの例をあげますと、ここにアメリカの方もいらつしやいますが、アメリカではこういう子どもたちの虐待、死亡は第一級殺人で、死刑にあたるんです。こういうひどいことをしたアメリカ兵に厳しい罰を与えてほしい。日本の司法当局は、非常に甘い気がいたします。アメリカ

力では親子心中で子どもだけが死んだ場合、その親は殺人犯で死刑を求刑されます。それくらいアメリカは子どもの人権を大事にする国なのです。それも二十年前の話ですから、いま日本でこういうことが起こったとき、どんな罰を要求してもふしぎではない。昨年も女性を犯した米兵をアメリカに帰しましたが、今度は絶対にそういうことがないよう犯人が拘留されたら厳しい罰を加えて欲しい。罰だけで解決するわけではありませんが、どうも日本の司法は甘く、特に男性は男性に甘い気がしますので、しっかりと厳しい罰を科して子どもの人権を守って頂きたいと思います。(拍手)

司会　たくさんの皆さんがご発言くださいました勇氣に、心から感謝します。どうもありがとうございます。ありがとうございました。これからカンパ袋をお返しします。会場費、雑費のためのカンパですので、よろしく願います。四時半にデモが発発します。では、これから桑江テル子さんが、行動の提起について皆様に提案いたします。

桑江　行動の提起を二つほど申し上げます。

一つは、この黄色いリボンです。NO!という字が書いてあります。これは女性への暴力、人権侵害ノーというマークです。署名運動も十月一杯展開しようと思いますので、今日皆さんにお渡ししたりリボンを十月一杯つけてみようということです。皆さんいかがでしょうか(賛成の拍手)。これは増産するのは簡単ですので、どんどん作って、シンボルリボンを一か月まずつけて仲間を広げたいと思います。

もう一つは署名運動です。今日受付で署名を書いて下さった用紙は署名運動の用紙です。あれをできるだけ持ちかえっていただきます。十月末にまとめまして、各方面に送る措置をしたと考えています。以上よろしくおねがいします。

デモは、第二ゲートを出て、働く婦人の家の小さな道を通ってパークアベニューの次の保健所通りから空港通りへ右折します。お持ちのプラカードなり、ゼッケンなり、リボンなり、できるだけいろんなことをして街頭アピールをお願いしたいと思います。

司会 九月二十七日、東京で集会を予定しています。「沖縄の少女暴行事件を通して米軍基地問題を考える会」を、沖縄で会場を確保して用意しました。ご出席は本間博さんという大学教授と、「沖縄の米軍基地」という本を書かれた軍事問題に強い梅林宏道さんです。沖縄から四人まいます。伊波洋一さん、有銘政夫さん、キャロリン・フランシスさん、そして高里鈴代さんです。東京近郊にいらつしやる方に、ぜひご連絡してください。入口に資料があります。次に決議文をおはかりしたいと思います。

*

村山首相・クリントン大統領・在沖米総領事・在沖米四軍調整官にあてた決議文は満場一致で採択され、熱気あふれるデモは、女たちの決意をさらに高揚させました。（決議文の原文は「資料」の一〇九ページに掲載してあります。）

世界に届け県民の叫び！

米軍人による少女暴行事件を糾弾し

日米地位協定の見直しを要求する

10・21県民総決起集会

九月以来、大小無数の集会を積み重ねて来た沖縄は、十月二十一日午後、ついに宜野湾市で八万五千人の県民総決起。

「久しぶりだなア」「なつかしいなア」

本土復帰運動以来の情熱をたしかめあつて燃える熟年おじさんから、集会は生まれて初めてという高校生まで、女も、男も、ぎつしりと芝の上に座る。

おだやかでやさしい沖縄の人びとも、ついに堪忍袋の緒が切れたのだ。

大田知事の「代理署名を拒否した理由」に割れるほどの拍手を送った人びとは、次々に壇上に立つ各地・各界代表者からのメッセーじに、ただ拍手！拍手！！

動員されたのではない、噴き出る思いにかられて集った人びとに、いつも辛口の築柴哲也さんも、「これこそ人間の集い」と感嘆した。

「少女」が主人公の事件だけに、議長の一人は女性。登壇者のうち二人は女性で、「性暴力」

への抗議も力強く打ち出されたが、中でも人びとの心を打つたのは、十七歳の高校生、仲村清子さんのスピーチだった。

静かな沖縄を返してください

もう、ヘリコプターの音はうんざりです。私はごく普通の高校三年生です。たいした事は言えないと思いますが、ただ思つたことを素直に伝えますので聞いてください。

私はこの事件を初めて知つたとき、これはどういうこと、理解できない、こんなことが起つていいものか、とやりきれない気持ちで胸がいっぱいになりました。

この事件がこのように大きく取り上げられ、九月二十六日普天間小学校で、十月五日には普天間高校で抗議大会が開かれました。高校生の関心も強く、大会に参加したり、大会の様子を見守つていた生徒も少なくありません。そんな中、私はこの事件について友人たちと話をするうちに、疑問に思つたことがあります。米兵に対する怒りはもちろんですが、被害者の少女の心を犠牲にしてまで抗議するべきだつたのだろうか、彼女のプライバシーはどうなるのだろうか。その気持ちは今でも変わりません。

しかし、今、少女とその家族の勇気ある決意によつてこの事件が公にされ、歴史の大きな渦となつてゐるのは事実なのです。彼女の苦しみ、彼女の心を無駄にするわけにはいきません。私がここに立つて意見を言うことによつて、少しでも何かが変われば、彼女の心が軽くなるか

もしれない、そう思い、今ここに立っています。

沖縄で米兵による犯罪を過去までさかのぼると、凶悪犯罪の多さに驚きます。戦後五十年、いまだに米兵による犯罪は起こっているのです。このままでいいんでしょうか。どうしてこれまでの事件が本土に無視されてきたのが私には分かりません。まして、加害者の米兵が罪に相当する罰を受けていない事には、本当に腹が立ちます。

米軍内に拘束されているはずの容疑者が米国に逃亡してしまうなんてこともありました。そんなことがあるから今、沖縄の人々が日米地位協定に反発するのは当然だと思います。それにこの事件の容疑者のような人間をつくり出してしまったことは、沖縄に在住する「フエンスの中の人々」、軍事基地内の人々すべての責任だと思います。

基地が沖縄に来てからずっと犯罪は繰り返されてきました。基地があるゆえの苦悩から早く私たちを解放してください。今の沖縄はだれのものでもなく、沖縄の人々のものなのです。

私を通った普天間中学校は、運動場のすぐそばに米軍の基地があります。普天間第二小学校はフエンス越しに米軍の基地があります。普天間基地の周りには七つの小学校と四つの中学校、三つの高校、一つの養護学校、二つの大学があります。

ニュースで爆撃機の墜落事故を知るといつも胸が騒ぎます。私の家からは、米軍のヘリコプターが滑走路においてゆく姿が見えます。それはまるで、街の中に突っ込んでいくように見えるのです。機体に刻まれた文字が見えるほどの低空飛行、それによる騒音。私たちはいつ飛行機が落ちてくるか分からない、そんな所で学んでいるのです。

私は今まで基地があることを仕様がないうことだと受け止めてきました。しかし今、私たち若

い世代も、あたり前だったこの基地の存在の価値を見返しています。学校でも意外な人が、この事件についての思いを語り、みんなをびっくりさせました。それぞれ口にはしなかったけれども、基地への不満が胸の奥にあつたというこの表れだと思っています。今日、普天間高校の生徒会は、バスの無料券を印刷して全校生徒に配り「みんなで行こう、考えよう」とこの大会への参加を呼び掛けていました。浦添高校の生徒会でも同じことが行われたそうです。そして今、ここにはたぐさんの高校生、大学生が集まっています。

若い世代もこの問題について真剣に考え始めているのです。

今、このような痛ましい事件が起こったことで、沖縄は全国に訴え掛けています。決してあきらめてはいけないと思います。私たちがここであきらめてしまうことは、次の悲しい出来事を生み出してしまうからです。いつまでも米兵におびえ、事故におびえ、危機にさらされながら生活を続けていくのは、私は嫌です。未来の自分の子供たちにもこんな生活はさせたくありません。私たち、子供、女性に犠牲を強いるのもうやめてください。

私は戦争が嫌いです。人を殺すための道具が自分の身の周りにあるのは嫌です。次の世代を担う私たち高校生や大学生、若者の一人ひとりが、嫌なことを口に出して行動していくことが大事だと思います。若い世代に新しい沖縄をスタートさせてほしい。沖縄を本当の意味で平和な島にしてほしいと願います。そのために私も一步一步行動していきたい。私たちに静かな沖縄を返してください。軍隊のない、悲劇のない、平和な島を返してください。

東京も燃えた！

沖縄・米兵による強かん事件に抗議する

10・23 女たちの集会

JR 池袋駅からはど近い会場エポック10に入ると、時間前というのに会場にはもうあふれるほどの人、人、人。その人びとに、壁面いつぱいに拡大されたビデオの中の美しい少女が、淡々と、縄の思いを語りかけていた。

「このままでいいんでしょうか。どうしてこれまでの事件が本土に無視されてきたのが私にはわかりません」

「いつまでも米兵におびえ、事故におびえ、危機にさらされながら生活が続けていくのは私はイヤです」

かわいい、やさしい声。ういういしい姿は人々の心にしみとおった。

そのビデオの少女の姉のようにやさしいおもぎしの高里鈴代さんが壇上に立った。

司会(牧田眞由美〈婦民〉) この事件の後、この事件をきっかけに日米地位協定、沖縄を見直そうという声が大きくなりました。軍隊、基地はいてもらいたくありません。でも「この事件

をきっかけに」と言われることに私たちは強い違和感を覚えました。まず第一に少女、女性への人権侵害である事を強く訴えたいと思います。「この事件をきっかけに」と言われるのなら、性暴力は犯罪であり、軍隊そのものが恒常的暴力であり、軍隊がなくならなければこのような事件は後を絶たないということを、強く言いたいと思います。

先程のビデオにもありましたように、十月二一日に沖縄で八万五千人が集まり、総決起集会が行われました。その沖縄から高里鈴代さんに来ていただきました。高里さんは那覇市市議会議員であり、二五日に発足する「強かん救援センター沖縄」のメンバーの一人でもあります。高里さん、お願いします。（拍手）

五十年前にも沖縄の女たちは犯された

只今ご紹介いただきました高里です。私の報告を始めます前に、今年の六月二三日に私たちが発表しました「軍靴に踏まれ碎かれていった姉妹たちよ」というレクイエムを読みます。

戦争中 戦後　そして現在まで、日本軍兵士に、米軍兵士に、
強かん、殺害されたおんなたちへのレクイエム

終戦から十年経って……由美子ちゃん！

砲弾の雨が止み、火炎放射で焼かれた山野に、

生き残った女性たちが安堵したのも束の間、新たな軍靴の暴力。

銃をつきつけられ、軍靴に踏まれ、

ふたたび女たちのからだは戦場のように踏み荒らされたのだった。

収容地でたくさん起こった強かん。

「老若を問わず、妊婦であろうと、食料や燃料の薪を探しに行った山野で、

農作業の最中に集団の中から拉致したり、

いえの中に押し入って家族の面前で暴行を加える者もいた」(「沖縄・女たちの戦後」より)

終戦後、沖縄を取材したタイム紙の米人記者でさえ

「沖縄駐留の米軍軍紀は世界中のどの米軍紀より悪い」

と、記事に書いたのだ(一九四九年十一月二八日号「忘れられた島」)

一九五五年の夏の盛り、米兵に強かんされ殺された由美子ちゃんはまだ六歳だった……

今生きていればあなたは四六歳。どんな女性になっていただろう。

仕事や家庭、そして子どももいただろうか

ベトナム戦争の時にも……

ベトナム戦争真ただ中の一九七一年だった。

沖縄の米軍基地からB52が北爆にひんばんに飛び立っていったあの頃

二二歳の良子さん(仮名)は三人の米兵に輪かんされ、

それ以後の人生を完全に奪われた

「私は二二歳で人間でなくなつたけれど、わたしは人間よ。忘れないでね」
正気と狂気の中で彼女は叫び続ける……そこは真つ暗な闇のなか……

日本国家の罪として……

一九九〇年秋、故郷韓国について帰ることなく、
那覇市でひっそり亡くなつたペ・ポンギさん。

強制軍隊慰安婦となつた異国の地で、七七歳の人生を閉じた彼女のように、
戦火の中で、本名も覚えてもらえず、兵士に都合のよい源氏名で呼ばれたまま死んだのは、
いったい何人の女性たちだったか。

そしていったい何人が無事に故郷に帰れたのか。

沖縄の全島に日本軍が作つた軍隊慰安所は一三〇か所を越え、
沖縄の女性も軍隊慰安婦にされていた。

女性たちの傷はいまだ顧みられず、復権さえ約束されない。日本国家の罪。

平和……のいしじ

五〇年前にこの沖縄を染めた血が、誰のものかはもう問わない。
思想や立場は違つても血の色は皆同じなのだから。

二度と憎しみで血が流されないために、

一人ひとりの名前を呼んで不戦を誓う平和のいしじ……

刻まれた名前の後ろに、前に、行間に、刻まれることのない少女たち、おんなたちの名前。源氏名ではなく、本名でしつかり覚えてほしいと求める声がある。

由美子ちゃん……ペポンギさん……良子さん……

平和の礎にあなたたちの名前はないけれど、私たちは忘れません。

あなたの恐怖、あなたの孤独、あなたの無念、あなたの願い、あなたに流れ続ける涙を。多くのあなたたちがいる。

ルワンダに、カンボジアに、すべての紛争地に、世界のあちこちに……。

ボスニア・ヘルツェゴビナで集団強かんにあつた女性たちも。

戦後五〇年のこの日

今日、戦後五〇年のこの日

基地の爆音は止まず、沖縄はいまだ基地の島。

五〇周年、沖縄上陸作戦に参戦した元米軍兵士が大挙して来沖している。

八〇となり、七〇代となったかつての戦士たち。

戦士たちが今沖縄の地に建立するのは戦友を称える慰霊碑。

戦士たちが今返しに来たのは盗んだ「戦利品」。

だが兵士たちがかつて奪ったたくさんの方たちの尊厳は、

もはや返そうにも返せないではないか。

女性には戦後はなく、今も続く戦時体制。

歴史の中のどんな戦争も「聖戦」なんてありはしない。

女性にとつて平和とは、

軍隊——その構造的暴力が地上から完全に消えること、と、はつきり言おう
そして平和を作り出すために共に行動しよう！

なぜなら、従順と沈黙で女たちも同じく加害者の側でもあったのだから。

今日、この非平和な時代に、世界中のおんなたちよ、おとこたちよ、

平和の実現に向かって共に歩み出そう。

それぞれの心に平和への約束のリボンを結び、姉妹たちへのレクイエムを捧げます。（拍手）

このレクイエム、実は私は詩を書いたことがなくて、本当に詩の態様がわからないのですが、
どうしても六月二三日に発表したいと思つて、徹夜して数人の友人とこれをまとめたのです。
なぜなら戦後五十年といつて各地で様々な記念行事が取り組まれ、沖縄も特に六月二三日はその
平和の碑が初めて公に出される日でした。

でも戦争の被害というときに、砲弾に散つた、あるいは戦線下の中で病死した、あるいは砲
弾が止んだ後に実は始まった女性に対する戦争、その中で死んでいった多くの女性たちの名前
は、平和の碑には刻まれていません。

ましてアメリカは、五十年経つたからとVJキャンペーンといつて、ノルマンディー上陸の
地にもう一度五十年ぶりに立つ。あるいは硫黄島に、そして沖縄に立つ。実はスミソニアン博

物館の展示目的を変えさせたアメリカの大きな団体である退役軍人協会が、戦後五十年の式典を、かつての米軍の力をもう一度世界に誇示する、そういう意味合いでしょう、ノルマンディーから始まって、各国で記念の式典がなされておりました。

記念式典のためにサイパンに来た、グアムに来た、硫黄島に来た、そういうニュースを聞く度に、では沖縄にかつての兵士たちが立つということはどういうことなんだろうか。硫黄島ではかつての日本の海軍兵士とアメリカの兵士が肩を抱き合つて、自分たちも兵士として闘わざるを得なかったと握手をした、という画面をテレビで見ました。

でも日本の兵士も米軍兵士も、五十年前に戦火の中を侵略者の権利として女性たちの体を奪い取つていった、女性たちの尊厳を踏みにじつていった、そのことを彼らは五十年経つてどのように思い起こし、そのことを本当に悔いて謝罪をしていたのでしょうか。そうではなかったのです。

実は沖縄に何百人か来るといふニュースを聞いて胸騒ぎがしました。そしてついに那覇市の大変な激戦地であつたところに戦死者の碑を建てるといふことで、その碑文を見てびっくりしました。南北戦争の最も激戦地であつたゲティスバーグの戦いに匹敵するという沖縄のシュガーローフの戦い、その戦いの戦死者を称え、戦死者の勇氣ある戦いを永遠に覚えようという碑が建てられることになったのです。

そういうことを聞くにつけ、私たちはどうしても六月二三日に、女性たちのことを思つて新たに私たちの決意をしなければと、このレクイエムを発表しました。これを発表しまして、すぐ英語に直しまして、沖縄に当時訪ねてきた何人かの米兵にも手渡ししましたが、このレクイエ

ムを発表するということは、私たち女性自身がここでもう一度「こういう事を二度と起こさせない」という決意でなくてはなりません。

百四十年前から犯されてきた沖縄の女

入り口にも資料が置いてありますが、今度北京会議に沖縄のグループとして「軍隊……その構造的暴力と女性」というテーマでワークショップを準備していましたので、五十年前、それ以前にさかのぼって沖縄の島の女性たちの経験を、軍隊が侵略してきてからの経験をこの北京会議で発表したいと思つてまとめている最中だったのです。ですからこのレクイエムを、世界の女性たちと呼びかける私たちの決意としてまとめました。

北京で九月七日、小さなテントでハワイやアメリカの女性、ベトナム、カンボジアの女性、オーストリアの男性なども加わつて小さなワークショップをしました。言葉のハンディもあるので、私たちは沖縄の女性たちの過去の、軍隊にその尊厳を奪われ続けてきた経験を小さな寸劇にして演じました。

まず最初の場面は一八五三年、米国海軍のペリー総督が浦賀に来て日本の開国を迫つたとき、実はその隊は沖縄に寄っていました。琉球王朝のその港に。ペリーが浦賀に行っている間に、残された水兵の一人が沖縄の女性を強かんしました。

そして第二次大戦時、日本の軍隊約十万が駐留する中で、多くの苦しみが自国の兵士である日本軍の駐留によつて起こりました。その中でも最も大きな被害は何といつても慰安婦の問題

です。

多くの女性たちが慰安婦として強いられ、沖縄の全島くまなく調査をしたら百三十か所も慰安所が作られていた。軍隊とは、その戦意高揚を保つために必要とする女性への性侵略、女性に性暴力を加え続ける中で、軍隊が軍隊として統率されていく。ですから日本国の罪として、日本の軍隊は軍隊の組織によって構造的に利用されていた、それが今明らかになっているわけですが、その中に実は沖縄の女性たちも組み込まれていました。

先程のビデオをごらんになっても、高校生の代表が言っています。「このことが公けになって本当に良かったんだろうか。公けになったことで今その少女はどうしているだろう」。それは毎日毎日の私たちの思いでもあるのです。

葬られ続けてきた無数の犯罪

北京会議から九月十日に戻って来て、十時半、空港に着きましたら、先に帰りました友人たちの二人が空港に迎えに来ていました。大きめの茶色い封筒を出して「とにかくこれを読んで、ひどい事が起こっているから。あしたとにかく皆で考えることにしているので、まずこれを読んで」と渡されたのが新聞の切抜きでした。

沖縄から記者二人を含めて七三名が北京会議に参加しましたが、十一のワークショップを行動綱領とつなぎながら、沖縄の女性の抱えている問題を北京で世界中の女性たちと語り合い、沖縄の抱えている問題に何とかヒントを得て帰りたい、そういう思いで準備をして北京に行つ

たわけです。私は代表でありましたので、帰ってくるのを待つていたといつて迎えに来たわけです。その晩夜中の二時頃まで十二日間の新聞を読んでもみると、数日前にはハリヤーが墜落している事で県議会ではそれを大きく問題にしようとしている動きもあつて、この一人の少女に加えられたこれ程までの暴力について、新聞、マスコミの一人ひとりも戸惑い、どうしていいかわからない、そういう思いが紙面からも感じられるような出方だったのです。

私は先程の高校生が言っているように、これほど公けになることが良かったのかどうか問いながら、でもこれは「声をあげよう」と決心をして、翌日朝八時にNGO事務局の者が集まり、十二時には記者会見をしてこの問題に対する私たちの怒りを伝えることを決めました。怒りの前に少女と、そばにいる母親、家族に対して「私たちも同じように悲しんでいる」ということを伝えたい、という思いで記者会見をしたのです。

私が北京から帰つてきて、翌日どうしてもこの少女に対するメッセージを伝えたいという思いに動かされたのは、実は二年前の事があつたからです。二年前に十九歳の女性が路上から拉致されて、基地に連れ込まれ強かんされました。

この時、女性たちは事件を知つて……でもその事件というのは拉致され強かんされたから知つたのではないのです……拉致され強かんされ、その容疑者が捕まつて基地の中に拘留されていて、県警が取り調べを續けていて、容疑がほぼ固まつて起訴寸前になったとき、この容疑者が何と基地の中の旅行社から切符を買つて、ゲートから悠々とアメリカに逃亡した事件があつたわけです。新聞には、その逃亡後、はじめて出ました。逃亡しなかつたら私たちは果たしてこの事件を知つただろうか。起訴のとき知つたかも知れません。ある意味で逃亡したとき始め

て事件が明るみに出るほど、性暴力を受け、人権侵害に追い込まれつらい思いをしている女性の状況は、沖縄ですつと起こり続けていても、その人が殺されてしまった時は新聞に出るけれど、運悪く、あるいは運よく起訴されても、紙面に少し出るけれど、もし一人でそのような状況にあったとしたら、紙面にも出ず、誰にも知られず、全部自分一人で抱えてその後生き続けていかなければならない、こういう状況がずつとあつたわけです。

二年前に事件が容疑者の逃亡で明らかになつて、私たち女性は「大変だ、ほんとに声を上げなきゃ。彼女に私たちも一緒だと伝えなきゃ」と思いながら状況がどんどん変わつていくんですね。逃げていった、追つかけている、そして捕まえた、連れ戻した、その度に私たちは集まつては状況に合わせて文章を練っていました。

私が県警に行つて今までの状況を調べた時、県警の国際担当の記者の「米兵による強かんは統計的には年間三件か五件ですよ。そんなに多くはありません。しかもそのほとんどは基地の中で起こっているんですよ」と、あたかも基地の中で起こつたらその女性が悪いかのようなニユアンスの説明を聞いて憤慨し、一九九三年のウイーン国連人権会議の決議などとも突き合わせながら、何とかこれが女性に対する人権侵害であるということをしつかりと見てほしいと、意見書に女性に対する呼びかけと、沖縄社会に対するこの問題の本質をしつかりと見てほしいと、意見書を一生懸命書き直していく度に状況が変わつていったんです。

FBIも動き、インターポール（国際刑事機構）などにも依頼し、米軍は必死に容疑者を追いました。なぜならそれ以前にも強盗事件で容疑者が逃亡した事があつたからです。そういう事があつて容疑者が捕まつて沖縄に連れ戻された。さあこれからはきちんと裁判をさせるんだ、

しかし何と日本の社会は強かんに対する刑が甘いことか。だつたら私たちはこれを加害者側の国の法律で裁いてほしいとさえ思つて、そういう意見書を出そうと思つていたら、実は被害を受けた女性が告訴を取り下げたのです。

その間に約半年かかりました。五月に事件があつて十一月に容疑者が連れ戻されるまで、彼女の事を思つていと言いながら、私たちは何と自分の日常に追われていたかと思ひます。やつとつかまつたとき、彼女が取り下げた。半年間の彼女の事を思うと、同じ女性として、性暴力のことを怒つていと言いながら、何と腰の重い、何と筆の重い、何と心の鈍い私たちであつたかと大きな悔いが残つたのです。

「うないフェスティバル」では署名活動をし、その後こういう問題が二度と起こらないための対策としての意見書をまとめて知事に提出しました。そういうことをしてもそれが直接女性にしっかりと届いたとは言えません。そういう後悔があつて、北京から帰つて一刻も猶予ならなという思いに駆られてこの抗議を出したわけです（涙ぐむ）。

軍隊が駐留するかぎり悲劇は続く

私たちの思いを、少女に、母親に、家族に直接には伝えられないから、公けの場で声にしたのです。記者会見にいわせたたくさんのマスコミの方に特に強く願つたのは、ハリヤーの墜落は政治的な問題、県議会の大きな問題になり、一人の少女が三人の米兵に、獲物を待ち伏せるようにして女なら誰でもいいという相手に、たまたまそこを通りかかった少女が魂を踏みつ

ぶされるような経験を強いられたことは無視されていいのか、ということでした。

ハリヤーが落ちることは議会の大きな問題で、少女に加えられる暴力は、記者たちが躊躇し、あるいは三面記事で終わってしまう事なのだろうか。「マスコミの方たち、躊躇しないで本気でこの問題に取り組んでほしい。皆さんのペンをカメラを、少女ではなく、しっかりとこの問題の本質に向けてほしい」。被害を受けた女性の周辺に向けて、あたかも個人の犯罪かのように、女性に非があつたかのような書き方をした過去のいろいろなことを踏まえても、私たちは本気になつて記者会見の時にお願いしたのです。

「あなたたちのペンで本気になつて問題の本質に迫つてほしい。五十年間、起こり続けた事を本気になつて探つてほしい。同じような犯罪がアメリカで起こつたら、どれだけの重さの犯罪として裁かれているのか、調べてほしい。基地がある故の犯罪は基地というスペースによって引き起こされるのではなく、そこにいる軍隊によつて引き起こされるのであつて、最新の近代兵器が集約されているのが基地ではなく、そこに恒常的に軍隊として駐留し有事に備えて訓練するのが基地であり、訓練を加えれば加えるほど兵士自身がどのようになつていくのか、そこをしっかりと見据えてほしい。これは決して三人の腐つたりんこの犯罪ではない。これは軍隊の犯罪であるという視点に立つて取材をしてほしい」とお願いしたのです。

そういう記者たちへの必死の願いだったのですが、私たちが気になつたのは少女と家族のことでした。私たちが決意をしたのは、このことにきつちりと対応できるシステムを私たちの社会が持つために私たちは取り組まなければならないと。

それが九月十一日でした。そして今、高校生が言つたように、私たちはその思いを持ちなが

ら、資料としてたくさんある過去の事件・事故を調べました。中で最も多いのは女性の飲食店従業員に対する殺害ですね。二四歳の女性が殺害された、二五歳の女性が殺害された、四五歳の女性が殺害された、そういう殺害の記録です。

由美子ちゃんという六歳の少女が何と一九五五年に、四十年前の九月三日に殺害されたのです。そして四十年と一日後に今度の事件が起こったわけです。その間、由美子ちゃんから今度の少女までほんとに数多くの女性が殺され、生きているとしても声も上げられません。これからも、もし軍隊の駐留が続くなら、これは続いていくのだろうか。そう思つて、声をあげたのです。

かつて同じような苦しみを受けた女性たちの尊厳を回復できるようにこの社会がなつていかなければならない。この事件が公けになつたことでもう後ろに一步も引き戻れない。なぜなら私たちがこの状況を解決していかなければ、少女が勇気を持つて現場検証に立ち会つたことが、本当に大きな悔いとなつてしまうからです。

言えない苦しみ 言つたあとの苦しみ

私は二年前、寒い冬の日韓国に行きました。元慰安婦であつたと名乗りを上げた七〇歳の方を訪ねました。その方が話の途中でわーっと泣き出したのです。壁に向かつて泣きながら叫んだのです。「言わなければ良かった。言つてもつと苦しい。言つたことで何も変わらない。言つたことで別れた兄弟に会えるわけでもない。私の青春を返せ」と言つてわーっと泣いた。

その声を聞きながら、泣き声が次第に弱くなるのを待ちながら、やつと振り返つてしばらく話をして、私が帰る時に彼女が「やつぱり言つて良かった」と言いました。

その女性はその事実を明らかにするまで、同居して彼女を引き取つてくれた血の繋がりのない若い夫婦との生活の中で、毎日、夜、外に出ていくんだそうです。深いため息をつく。あるいは泣いている。

一緒に生活している若い妻は、実の娘ではないんですが、「この人は結婚もしてないから、家族もないから、子どももないから悲しんで泣いているんだろう」と。それで七〇歳の誕生日に美しいピンクのチマチヨゴリをプレゼントしてお祝いをした。しかし彼女が元慰安婦である事がわかり、実は彼女が毎晩毎晩外に出ていたのは、体中が痛むその痛みに冷たい外の風に当てれば少しでも和らぐのではないかと、どんな冬の日でも外に出ていたということがわかったんです。毎日痛み止めを飲んでいても治らないその痛みは、実は沈黙を持ち続けていた苦しみだったのです。尊厳が踏み潰されていたことへの怒りをしっかりと表すことを許されないその苦しみ、痛みとなつて彼女の体を打つていた。

彼女が思い切つて名乗りを上げたら、毎日毎日取材に追われ、毎日同じ事を聞かれ、自分の青春は、自分の過去は戻ることなく、別れた肉親に会えることもない。本当に名乗りを上げて良かったんだろうかと思つたんですね。

でもそういう怒りを、そういう叫びを聞いて、帰る時、彼女が「言つて良かった。来てくださったてありがとう」とおつしやつてくださった。

少女の勇氣にみんなで応えたい

北京會議の合い言葉は、女性一人ひとりが孤立化させられ悩んで苦しめられていたところから、「あなた一人ではない」というお互いの支えによつて声を出していく、沈黙を破つていく、沈黙を破れるように支え合う、そういうことではなかつたかと思ひます。

そして今の慰安婦問題に現されているように、各国のたくさんの女性たち、アジアの多くの女性たちが勇氣を持つて声をあげてくださったことが状況を変えていく力になつてゐる。今度の事がどうなるかわかりませんが、願うのはこの事が公けになつて、この事を本気で解決しようという女性たちの輪が広がつて、どの女性も、どの少女も、どの子どもも、どの男も、その人の大事な尊厳が消耗品のように扱われたり、欲望の対象物とされて消耗品化されてはならない。そういう事がもし私に起こつても許さないし、隣の彼女に起こつても一緒に戦うんだ、怒るんだ、声を上げるんだ、そういう決意が本当に広がるのなら、この少女が勇氣を持つて証言したことが報いられる。

堂々と生きる權利はありながら、今まで多くの女性が、あたかも本人に非があつたかのように見過ごされてきた、そういうことではないんだという社会に沖縄が生まれ変わらなければ、この少女が勇氣を持つて公けにしたことが良かった事か、後悔になるか——もう一步も後ろに退けない氣持ちです。

実は今回たくさんの地域からファックスが届き、署名運動に賛同して多くの声がかけられま

した。その中で「わかった」という声が圧倒的に多かったのは「安保条約というのは何があるかわからなかった。安保条約や日米地位協定の中身はまだ十分読んでいないけど、そういうことがあることによって一人ひとりの尊厳が脅かされる状況が沖縄にあるということがわかった。だから私も声をあげます」と。たくさんの女性たちから賛同の声が上がり、集会をやりま
すから来てくださいと呼び掛けがあつて、仙台でも、福岡でも、佐賀でも、岡山でも、兵庫でも、西宮でも、というふうに呼び掛けが広がっています。

性暴力、女性の人権侵害は決して小さな問題ではないはずです。女性の人権が侵害される、その人の人生が丸ごと潰される。一九五三年四月二十八日は「沖縄が日本人でなくなる日」と言われていますが、一人の女性が二一歳で三人の米兵に強かんされた後、その女性は二一歳の私は人間でなくなつたと言いました。島が日本人でなくなる日があると同時に、一人の人が自分
は人間でなくなるといふ思いを押しつけていく、そのような行為、犯罪、暴力が、どうして今までこの日本で、そして沖縄で見過ごされ、大きな政治的な課題よりも小さな問題として、大きな日米の安定よりも小さな問題として、大きなアジア太平洋地域の安定よりも小さな事柄として、処理されてきたのか、本当におかしいですね。

日米安保条約がどうであれ、アジア地域の安定がどうであれ、一人の少女の人生が潰される
ということとは、これは比べることでできない、比べてはいけない大事な価値を持つている事柄
だと思ふのです。

私たち女性は、今まで国家による暴力を受けること、家庭で、地域で、社会で、慣習の中で
の暴力が、どうして国益に準じて価値がないとされてきたのか、ここで考えていかなければ

いけないと思います。女性たちも沈黙し、そのまやかに惑わされていたのではないかと思います。

いま日米地位協定の見直しが言われていますが、特に十七条五項のC、容疑者を先ず拘束する権利が軍側にあるということなんです。今回の事件で身柄引渡しを強く要求したのは二年前の事件があつたからです。簡単に逃がしてしまう状況があつたからです。簡単に逃がしているということは、加害の犯罪性を十分に認識していないからです。

アメリカの軍人が駐留中に、個別の犯罪を犯しても、その人のアメリカ国民としての人権がある一定、保証されるということを明記しているのが地位協定ですから、それなら基地がある島に住んでいる一人ひとりの人権の視点に立った見直しが地位協定全般にわたってなされる必要があると思います。決して単に十七条五項のCだけの改正だけではないことを言っているのです。

そして安保。

冷戦が終わり、新たな太平洋地域の戦略として、この太平洋地域に十万規模の軍隊を駐留させるということが、日米の間で、特にアメリカの軍事計画の中で確認されているという事です。フィリピンからは完全に米軍が撤退しました。では十万人、今以上に数が増えるという事は沖縄に来ることなんでしょうか。それとも皆さんの住んでいる県に来ることでしょうか。どの地域の紛争を予想して、アジア太平洋地域、しかも中東までを視野に入れた新たな軍事計画の中で、十万規模の軍隊がいるのだろうか、という事の意味を本気で問い直さなければと思います。

「自分とは関係ない」という気持ちが暴力を許す

いま沖縄には五万を越える軍人・軍属がおり、約三万の軍隊が駐留しています。そのうちの三分の二が海兵隊です。そしてその軍隊が紛争地に即応して、ベトナム戦争のときにはグリーン迷彩色で、砂漠の戦争のときには砂漠色の迷彩色で出かけました。都市の戦争になるとスーツ姿になるかも知れません。本当に紛争に合った対応を日夜訓練しているのが軍隊のわけです。

今回のことで、大田知事が大きく出している三次案も、もう問題ですらないと思っています。今ここで確実に一歩進むということは、駐留している軍隊の数が確実に減っていくということです。

だいたいアメリカのマスコミの取材では「でも日米のパートナーシップについてあなたはどう思いますか」という質問が必ず来ます。日米のパートナーシップは大切かも知れませんが、でも日米のパートナーシップを話すことと同次元で、沖縄で生きている私たちの人権も同じ重さで考えるテーブルが必要であって、沖縄の一人ひとりの人権が無視されたところで、どうして日米のパートナーシップの存続が諒解され得るのでしょうか。

実は去年、四軍調整官の方が失言なさいました。失言どころか信じているから信念を話しただけなんです、たまたま沖縄の老人クラブの方たちが基地を訪ねてお話を聞いたわけです。そのとき演習のヘリコプターがジェット機が通った時の爆音について、彼が「皆さんすみませ

ん。音がちよつとうるさいんですが、あれは自由の音です」と言つたのです。皆さんはこの言葉を初めて聞いて「わあ、ひどいことを言う」と思われたでしょうか。これは実に使い古された軍隊意識なのです。三沢基地の格納庫の上には「Pardon our noise. This is the sound of freedom」と書いてあります。

それからフリービンのオロンガボ市のスービック基地の前にたくさんＴシャツのお店があつて、そのＴシャツの胸にもPardon our noise. This is the sound of freedomと書いたのがありました。訓練をし続けているジェット機の爆音はそこに駐留している戦闘兵士にとってはアジア太平洋の安全を、世界の平和を守つて日夜訓練をしている音でしょう。

けれどその下で生活をしている、ましておとい発言をした高校生が生活している普天間地域は、海兵隊のヘリコプター演習場があるところで、周りには小学校が二つあり、中学校があり、高校があります。学校の窓から滑走路に離発着する姿や、エンジンをつかしているパイロットの姿すら間近に見えるところで訓練をしています。彼らにとつては平和の音かも知れない。でもその音は別の音でもあるのです。病気で寝ている人にとつては本当は心臓を揺さぶる痛みの音です。赤ちゃんにとつては安心して生きていることを保証されない音です。子どもたちにとつてはしっかりと学びたいと思つても学ぶことを許さない音です。ですから教室でも先生と子どもたちの声はどんどん大きくなつていきます。そういうことが五十年間続いているのです。

爆音一つとつても、何と距離があるのでしょうか。一方では平和の音と言ひ、一方にとつては許し難い耐え難い音なんです。皆さんが沖繩の問題をもし自分たちの問題として感じ取つてくださっているのなら、これから続くパートナーシップと言われること、安保条約と言われるこ

と、地位協定とはいったい何なのかというところを、どうぞ沖縄の島に生きている一人ひとりの人間、あるいは少女、赤ちゃん、そういう立場に立つて学習していただきたいと思います。

私は先日東京に来た折に八重洲ブックセンターに行きまして、「ミリタリーバランス」というのを買いました。私は女性の差別を本気になつて怒っている者ですが、軍事用語は十分に知りません。でもこうはしておれないと思つてその本を買つたのですが、世界中にどれだけの軍隊があるのか、どれだけの軍需産業があるのか、どれだけの武器輸出入があるのか——カンボジアでは今二八か国が作った地雷が、戦火が止んだ後、女性たちを、農民たちを、子どもたちを、その爆破で体の自由を奪っています。足をもぎ取られた女性は妻として役に立たないと夫の暴力に会い、家を出て行つたそうです。戦火は止んだというのに軍需産業で作られた地雷、二八か国の製品である地雷がカンボジアで炸裂しています。女性たちは、もつとこのような問題に関心を行かなければと思います。

確かにミリタリーブックを読んでも用語はわかりません。あるいは日米安保条約をベースにして日米の首脳が話し合うこと、あるいはペリー国防長官が演説をする内容なんて、どれほど私たちは理解できるでしょうか。でもそんなことを恐れていいんでしょうか。そんなこと自分と関係ないと思つていてという意識が、実は少女への暴力を許しているのではないかと思ふんです。

わかる方法があるんですね。私もその方法でわかつていきたいと思うんですが。安保や何かからわかつとすると、軍事専門家を呼んで学習する事も大事だけど、その専門家のところから降りていくのではなく、一人ひとりの尊厳、命というところからしつかり見ていけば、迷う

ことなく問題が見えてくるのではないのでしょうか。上の方から見ていると一体どのような状況につながっていくのか道に迷ってしまいます。今回この少女に起こった事が何を訴えているかという、そういう事でないかと思うんです。

軍隊は人間性を剝奪する暴力装置

時間が来てしまいましたから、最後に、軍隊のメカニズムということについてももう少し触れて終わりたいと思います。

基地問題、基地撤去と言いますと、どうしても私たちは物理的な面積が目に入ります。沖縄本島の二〇パーセントを基地に占められています。そこに五万余の軍人・軍属が住んでいて、残り八〇パーセントに百万人が住んでいるのです。同じ人口密度で住むとなったら、私たちが住んでいるところは二五万人くらいでいいことになるんですね。でも一方には肥沃な土地、有効に使える中心地に五万余の軍人・軍属がおり、八〇パーセントに百二〇万県民のうち、百万人が住んでいるのです。このような密度からいっても基地と隣接している事が想像できるでしょう。洗濯物が見え、演習地が見え、その彼らの姿が垣根越しに見える。そのように隣接した中で、このような暴力が起こつてくるということは想像に難くありません。これから「基地」というときは、しっかりと「軍隊」と置き換えていくことが必要だと思っています。「基地撤去」というときに、「そこにいる軍隊の完全撤収」ということを言いたい。私は基地撤去と言うと同時に軍隊を必ず加え、基地・軍隊と言う言葉をしっかりと出す事によって、基地の持つ暴力

性、軍隊の持っている構造的な暴力が見えて来るのではと思います。

軍隊の問題は、慰安婦問題に取り組んでいる方は、第二次大戦中の日本の軍隊がどうであったかがわかるわけですが、今の沖縄にいる米軍がどんな形か知るために、私はベトナム戦争につながった映画を極力見るようにしています。ベトナム戦争に参戦したら、彼らが帰ってくるころは沖縄の基地であり、フィリピンのスービックであり、タイのパタヤだったりカンボンであったり、あるいはアジア地域のいくつかの町々、村々が、紛争から米軍の戻ってくるころだったのです。

沖縄は基地があることによつて米兵の砲撃的であると同時に、兵士たちの受けた恐怖の捌け口でもありました。ベトナム戦争当時、多くの兵士たちはあのベトナムのジャングルの中から九死に一生を得て、恐怖の中から若い兵士が我に返つて降り立った基地の町で、その恐怖を、妻でもなく、恋人でもなく、母親でもなく、実は基地の街の女性、沖縄の女性たちにつけてきたわけです。吐き出してきたわけです。そういう恐怖や怒りを女性たちは受け続けてきました。

ベトナム戦争の時、基地の街では多くの女性がその生存をかけて働いていました。その女性たちが稼いだドルの背後で沖縄の島々が生き延びてきたわけです。けれども紛争が終わつて、経済が回復しても、相変わらずその時受けた暴力のゆえに今でも苦しんでいる女性たちの尊厳は回復されないまま忘れ去られようとしているわけです。軍隊がその地にあるという事は、それ程までに凄まじい暴力がその地域に来るといふことです。

ロン・コビックという人が書いた「七月四日に生まれて」といふ本があります。映画にもな

つてトム・クルーズが出ていましたが、その海兵隊に入隊した兵士を訓練をする上官がいるのです。「ここに甘つちよろい若い男が八十人、甘つちよろい女が八十人、これをこれから鍛えて男にしてやる。兵士に鍛え上げて世界一強い海兵隊に鍛えるんだ」。彼はそのように訓練を受けてベトナムで戦い、腰に砲弾を受け、半身麻痺の体になつてはつと我に返ったとき、彼が述懐をしているのは、「アメリカが教えてくれたのは、海兵隊が教えてくれたのは、人間性を忘れること。人間性を奪われ、教養を奪われて、自分はベトナムで村を焼き、ベトナムの子どもたちを殺した」ということなんです。

軍隊が毎日訓練を受けているということは、相手より一歩先んじて相手に勝つために、相手より一秒先んじて相手に的を絞り打ち落とすためです。相手の顔が人間に見えたり、親しみを覚えたり、優しさを自分の中に起こしてはいけないうえです。限り無く人間性を奪われ、麻痺させ、はぎ取らなければ、そのような行為はできないわけです。

特に海兵隊は陸・空・海の三軍に先んじて、紛争地に攻撃をかける隊として日夜訓練を受けるといふ性格からいっても、常時攻撃性を奨励され、常時暴力を合法化され、常時そのような体質であることすら期待されて訓練を受けているわけです。

そのような軍隊が沖縄に約二万、アメリカ本国に二個師団あつて、三番目が沖縄にあるんです。その二万人規模の海兵隊が存在し続けているそのこと自体が、実は「冷戦後、本当に必要だろうか」という専門家の大きな疑問もあるように、「冷戦後必要ない」という軍事的意味ではなく、「沖縄に必要ない、もうこのような存在は必要ない」と言い続けていく必要があるし、言い続けなければならないと思っています。

五十年はもう忍耐の限界

このように暴力を肯定され、合法化され、絶えず戦闘に駆り出されるために訓練を受けている存在が、あなたの垣根越しに在るということを想像してください。今回の被害はそうように起こったのです。そのように訓練を受けている人が、五時以後の公務外だからといって、すぐゲートから出られる。このような社会が日米安保条約、あるいは日米地位協定によつて保証されている。ゲートを出ればすぐ住宅街、ゲートの隣は小学校、そのような環境の中で、その内側に、決して私人、何々さんではなく、兵士何々、軍人だれそれがある社会が、どうして沖縄に二〇パーセントの面積を占めて存在しなければならないのでしょうか。五十年はもう十分すぎるほどの年月だと思います。五十年間で、もはや多くの女性の犠牲を、戦争を好む神への捧げ物のように捧げました。

友人のキャロリン・フランシスさんは「何で沖縄は急にこんなに怒りだしたのですか」と言われ、突然日本中が騒ぎだして、「どうして今まで怒らなかつたんですか。どうして皆さんの怒りが大きいんですか」とたくさんのマスコミの人に訊かれて答えたそうです。「ラクダの足が一本の藁で折れたという諺がアメリカにあります。しよえる以上の荷物を積んでしまつて、もうこれ以上は耐えられないラクダが立っていたとき、吹けば飛ぶような一本の藁なのに、そこに一本の藁が置かれたので足が崩れてしまつたのです」と。

この五十年は、もう、一本の藁で崩れる年月ではないかと思っています。この少女に加えられた

暴力は「もうこれ以上はいい」という私たちの思いに突き刺さっています。沢山の女性たちがこういう集会を開いて話し合ったのです。

まず女性たちがしつかり考えて声に出そう、女性たちの思いを声に出して語り合おう、という集まりをしましたら、二五〇人が皆発言をしました。そして多くの女性たちが「もし私たちがもつと前に声を上げていたら、沖縄はこんなことは許さない社会なんだともつと言っていれば、今度のことは起こらなかつたかもしれない」——そういう思いに立っていて、自分たちの曖昧にしてきたこと、自分たちが同じ女性に対して、つい今年の五月に殴り殺された二四歳の女性のことすら、「この人は離婚歴があつた」と新聞の記事を鵜呑みにして話題にし、「この人は一年つきあつてたらしい」と、あたかも殺されるのが当然かのように声をあげなかつた私たち。人が一年つきあおうと離婚しようと、なぜ殴り殺されなければいけないんですか。どこかで私たちは「あれは酸っぱいブドウなんだ」と言いながら、口実を付けて大事な問題から自身を避けてきたのではないか。今回はもう言い逃れは許さない。そういう思いに多くの女性があつています。

そして最初のときから是非しなければと思つているのが、〈強かん救援センター〉をスタートさせることです。行政に働きかけるには時間もかかる、被害を受けた女性が警察に訴え出たとき、まず最初に、被害の痛みを十分に知つて人権尊重の視点に立つた女性の警官に聞き取りをしてもらいたい。体の傷を診察する医者は、彼女の思いに十分配慮する女性の医者に診察をしてほしい。彼女が訴えを起こすことになつて、作業を進めていく時も、しつかりと支える弁護士も相談する者もそばにいてほしい。そういう制度が日本にはありません。もちろん沖縄に

もありません。いくつかの国々では、すでに行政としても、法律としても出来ているのに、日本にはまだないということは、女性の受けた被害の重さが十分に認識されていないからだと思います。

沖縄では是非、遅れ馳せながら取り組みたい。その前にまず民間でボランティアでしたいということでスタートいたします。五人の女性精神科医、五人の女性カウンセラーが、みんな自分の時間を出すということで、チームを作ってくれました。今まで精神科の病院で、人に出会い、そこで治療にかかわることが自分の役割だと思っていた女性が、「いや、私にできることは、このような状況の中で、声をあげようとする女性の声を聞くことだ」と言ってチームを作ってくれました。

二五日から「レイコ」強姦救援センター沖縄の電話相談がスタートします。精神科医になぎ、カウンセラーになぎます。ご自分の名前は言わなくてもかまいません。困っていること、怒っていること、何でも相談してください。

私たちはまた、行政に対して、軍事基地特別措置と言うなら、そのように人権にしっかりと配慮した政策にも予算がつくようにお願いしたい。国会議員の方にもぜひお願いしたいんです。そのような対策がなされるべきだと思います。

以上報告をし、ご質問がありましたら受けながら、これからの取り組みの連帯につなげたいと思いますのでよろしく願います。（大拍手）

司会（笹沼朋子〈行動する女たちの会〉） どうもありがとうございました。問題の本質を本気

になって探ってほしい。その思いでいっぱいです。では皆さんの意見や質問を受けたいと思います。

基地の撤去・縮小に向けて頑張りたい

大脇 参議院議員の大脇雅子でございます。私も二一日、沖縄に参りまして、高校生の胸に響く訴えを聞きました。それを聞きながら目に涙をためている労働組合の男性、大学生、女性に混じって会場の芝生に座っておりまして、この問題で、本当に女性の力が試されるのではないかと思います。

北京会議で「女性の権利は人権である」と高々と謳い上げた本当の意味は、国家に向き合い、安保体制に向き合ったときに、私たちが今何をしなければならないかを、鋭く問いかけているのではないかと思います。

大会のアピールの中で、「この真相に潜んでいる悪の正体がどこにあるか、私たちは歴史的体験で知っている」という言葉がありました。私は名古屋で市民平和訴訟の弁護団長をしていて、湾岸戦争に九〇億ドルを出し、掃海艇を派遣した国家の行為が「平和的生存権」、一人ひとりが平和にいきる生存権——それこそ憲法九条の意味だと思うんですが——を侵害したとして、慰謝料を請求する訴訟をやっています。今年八月証言に立った人が、「国会の不戦決議が曖昧なことが、戦争にかかわった加害の行為を明解に打ち出せないという原因になっている」「だから本当に真実を問ひかけ、真実が世界の前に明らかにされるには、先ず国家がきちんと

しなければならない」という証言をひき出しました。私は尋問をしながら法廷で棒立ちになりました。国家や政府がまずきつちりと歴史的体験に向きあうことが、どんなに大切なことか。

私は沖縄の集会に行きまして、それと同じように、ここで私たちとともに、国家がどういう態度を取るかについて、きつちりと発言をしていくのが重要だと感じております。私も安保条約と地位協定の改定の問題、本質的な意味での基地の撤去・縮小、在日米軍の削減に向けて発言していきたいと思います。

沖縄の集会に勝るとも劣らない女たちの集会を本土で持つて、政府にことの重要性を知らしめる必要があるとつくづく思っております。（拍手）

司会　力強いお言葉をありがとうございます。この問題は慰安婦問題ともかわりがありますので、〈行動ネット〉の方お願いします。

従軍慰安婦とこの問題はひと続き

山崎　私も北京会議から帰ってこの事件を知って本当に悔しくて。余りにも従軍慰安婦問題とつながりすぎていて、どう気持ちを表現していいかわかりません。日本でも従軍慰安婦問題についていろいろな女性が取組んでいます。まだ普通の公民館などでは「従軍慰安婦」という言葉をはつきり使えない、ためらいのある女性が多いと聞いています。新聞の中でも「少女暴行事件」と書かれていて、少女の人権への配慮もあるにせよ、なぜ「強かん事件」「性暴力」

とはつきりと言えないのかを考えると、今までの日本の運動が性暴力の真相を見つめてこなかった、その結果ではないかと思っています。従軍慰安婦問題を政府はきちんと認めていないんですね。民間基金なんて言つて本気で解決する気がない中で、日本政府が沖繩の少女の人権を守るために何をするのかが問われていると思います。怒りをどんどん政府にぶつける必要があると考えています。(拍手)

司会 従軍慰安婦も売春婦としておとしめられ、苦しんできました。私たちは売買春も性暴力と考えています。その〈売買春と取組む会〉の方から発言を。

高橋 事件を知つて、かなうことなら、沖繩に行つて少女を抱き締め、皆さんと連帯したいと思ひました。三人の米兵は少女をガムテープで口を塞ぎ、手を縛り、凄いかたちで蛮行に及んでいます。これはポルノビデオの影響があるのではと思ひました。日本の社会状況が収斂したのが、この事件です。日本の法体系は、強盗は五年以上の刑なのに強かんは二年以上の刑でしかないのです。十五歳の少女が売春防止法違反をしたら罪になるのに、買った男性は売春防止法の適用外なのです。社会のあらゆる場面で法改正ははじめ改革に女たちが力を結集し、性暴力と戦うことが一番大切です。それが人権の始まりであり世界の平和を築く基だということを、一人ひとりが心がけたいと思ひます。ご出席の国会議員の皆さま、何べんも聞かされて耳にタコができています。が、ぜひ国会の場でご健闘下さい。(拍手)

司会 性暴力を受けた女性をサポートする団体が東京近郊にいくつかあります。先ず「サポートライン」の方からお願いします。

藤原 「性暴力被害者サポートライン」から来ました。これは女性全体の問題だと思います。女性は暴力を加えられないまでも、女であるという理由だけで、おとしめられたり脅かされたりを限りなく重ねており、このことと沖縄の事件とは地続きだと思います。女の人が被害を受けても安心して援助を受けられるように「サポートライン」というものを発足させました。心の傷を沈黙に閉じ込めず、被害の記憶や感情を押さえつけて無理やり忘れるのではなく、理解し支持してくれる女たちの中で話を聞いてもらい、何をしていくか手探りできる関係ができたらいと思います。そのためには小さなサポート体制ができるだけではまだ不十分です。社会全体がこの問題を女性に対する人権侵害だととらえて、周りの女の人たちの中でそういう関係が生まれることが必要だと思います。

今、私たちは性暴力の被害に対する実態調査をしています。被害を受けても「大したことない」と言われて孤立化させられ、警察は「日本では強かんの被害は全部届けられている。騒いでいるのは客から金をもらえない売春婦だけだ」と言っています。いま女性の性暴力のアンケート調査をしています。女たちの被害を社会に突き付けるデータとして、ぜひ多くの方が答えてください。（拍手）

司会 「へみずら」の方、いらつしやいますか。

阿部 女のスペースへみずらゝの阿部です。私たちは女性の民間の相談活動をしてシエルトーもつくっています。性の被害者の共通点は「なぜ」と自分を責めることです。「あなたが悪いのではない」ということが本人も周りも理解できない。被害者本人にも問題があるという扱われ方が根強くあります。「なぜ」ということをどう答えるかが今日の課題であり、強かん救援センターを作ることが一つの答えです。人類愛と人権を語ることはだれにでもできますが、隣の人の人権を守るためには多くの人の助けが必要です。一人の少女の傷をいやし、人間として生きていく自信と確信を持たせるためには多くの人の力が必要です。お金の出せる人はお金、時間の出せる人は時間、プロのカウンセラーはカウンセリング、国会議員は政治と制度を変えてほしい。何もできない人は周りの人に訴える。力を出し合ひましょう。一つひとつの力を次々に有機的に結び付けて社会を変えていく。怒りだけでは変わりません。そして高里さんのようないいリーダーを育てましょう。（拍手）

司会 最後に「東京強かん救援センター」の方からご発言があります。

A 十月二五日に「強かん救援センター沖縄」がオープンすることは大きな希望であり、力強く感じ、とても嬉しく思っています。女性たちは無力ではありません。私たちも十三年前、同じ気持ちで「東京強かん救援センター」を、それが必要でなくなる日を目指してオープンしました。残念ながらまだ必要な状態ですが。

この沖縄の事件に対し、私たちは十月十二日に抗議要請文をクリントン大統領、モンデール駐日大使、ローリング司令官、マーハー沖縄総領事に送りました。

「私たちへ東京強かん救援センター」は、強かんとは、女性に対する支配、征服、所有が性行為という形を取った暴力だと考えます。ことし九月四日、沖縄での米軍兵士による少女強かん事件に対し、少女の傷つけられた人権と心身を考えると激しい心の痛みと憤りを覚えます。この一人の少女への暴力は、人種、国籍、民族を越えたすべての女性に対する暴力であり、ここに強く抗議します。また二度とこのような事件が起こらないよう、アメリカ国家に対し軍隊における女性の尊重と人権教育の具体的な実現を要請します。誠意ある返答を期待しています」抗議文を要約したハガキを配りますので、皆さんの一言を書き添えて出してください。女性は無力ではないことを行動をもつて示していただきたい。すべての暴力に対してたたかていきましょう。（拍手）

司会 会場から手が上がってます。時間がないので手短かにお願いします。

小笠原 日本キリスト教協議会の小笠原と申します。高里さんの話で大事だと思ったのは軍隊・基地というものが構造的暴力を持っているということ。それが女性への暴力と切り離せないということです。私は横須賀の基地の学校で十数年間英語を教えていました。英語を教えることが女子学生にどんな意味があるのか苦しみながら教えました。彼女たちは基地に自由に入ることができる。米兵と仲良くなることがフアッションになっていました。この事件が起こったと

き、ある若い人から「自分の友達は米兵と付き合っている。彼女たちは自分の事を『アメパン』と呼んでいる」と聞いて衝撃を受けました。そういうふうに自分を否定的に表現している若い人たちがたくさんいる。どうやったらわかってもらえるのだろう。日本中に基地はたくさんあります。この事件で女性と基地の関係が暴露されたことが、もつともつと若い人に伝えられないといけないと思います。教育に関わっている方々、特に伝えていただきたいと思います。

(拍手)

司会 そのチェックの服の方、なるべく短くお願いします。

五十年間沖縄差別を続けてきた自分たちを恥じる

斎藤 〈あごろ〉の斎藤と申します。さつきから性暴力との関連が強烈に出たんですが、もう一つ「沖縄差別」の問題だと思っています。(拍手)

高里さんの言葉ですが、「ヤマトは沖縄という娘を身売りして五十年間栄えてきた」。このことを私たちは忘れすぎたと思います。私は八九年に初めて沖縄に行っただけです。なぜそれまで行けなかったかというと、沖縄を犠牲にして戦争を終わらせたヤマトの人間が、どうしてまだ骨の埋まっている沖縄の土を踏めるかという気持ちがあつたんです。へうないフェスティバルに呼ばれて初めて行っただけですが、空港に着いたら島中が沸き立つような大騒動になっていました。恩納村に都市型ゲリラの施設が出来る。今日沖縄の新聞を壁に貼り出しまし

たが、こんな大きな字の見出しの新聞が、沖縄では毎日出ています。毎日大事件が起きているのに、ヤマトのメディアはそれを全然伝えない。そのことを私たちは本当に考えなければいけない。

さっきの高里さんのお話で一番刺さったのは、「私たちはなんと感性が鈍かったのか。なんと腰が引けていたのか」という言葉です。高里さんは自省を込めておっしゃったけれど、鈍かったのは私たちです。沖縄の人はいま一步も引けないところで頑張っている。ここで私たちが千歩も万歩も前に出なければどうしようもないと思うのです。なぜ腰が引けるのか、村山政権が倒れるから安保に踏み込めないという意見があります。そんなことで倒れる政権なら倒してもいいのではないですか（拍手）。

私たちは国民の声とあまりにも遠い政府を持ち続け過ぎた。北京会議では謝り続ける毎日でした。しかし五十年間、女性も投票権を持つていながら何と情けない政府を持ち続けたか、それは私たち一人ひとりの責任だと感じなければこの問題は解決しません。沖縄差別と女性差別が二重になっていてその根本は一致している。腰が引けていた、感性が鈍かった私たち。改めて心から沖縄の方々にお詫び申し上げます。（拍手）

司会　ありがとうございます。そこに立っている方。

湯前　へ夫・恋人からの暴力調査研究会の湯前と申します。北京会議に行つて主に女性に対する暴力について経験交流しました。日本の女性政策は現在「男女共生社会」と官民一体で言

つていますが、その中で一番取り上げてこれなかったのが女性のセクシャリティと暴力の問題だと思っています。それを抜きにしながら共生社会といっています。その隙をついて、北京会議の最中にそういう事件が起きたことを怒りと悲しみで聞いたわけです。

北京会議の行動綱領の中に「女性への暴力」がはつきり書かれています。これを日本の国内政策課題として出していかなばならない。今日この決意を新たにしたいわけです。（拍手）

司会 ではあと三人。そちらの赤い服の方。

政府の弱腰を許すまい

谷内 〈二人会〉の事務局長の谷内と申します。八年前に沖縄に行き、当時学者だった大田知事と那覇市長と我々とでシンポジウムを持ち、基地もつぶさに視察しましたが、高里さんのおっしゃった以上の状況を痛感しました。

「この五年間アメリカの国内で起訴された婦女暴行が一九〇何件ある。それを上回る数の犯罪がアジアで起きていて、しかもそれは凶暴だ」とアメリカの新聞も伝えています。それが集約的に現れている沖縄の現状はいかばかりかと思えます。こういうことが日常的に起きている沖縄で怒りが爆発して、知事が代理署名のことで頑張っている。本土のマスコミは「政治面で早く断固たるリーダーシップを取れ」と言っています。しかしリーダーシップとはいかなることを催促しているのか。署名を拒絶した知事を政府が訴えるということですか。こういうことを

許してはならない。女性の強かんに対して具体的な行動で怒りを表して、総理が知事を訴えるという行為にはつきり反対の立場を取らなければならないと思います。斎藤千代さんがおつしやったように、二重の差別の問題だということを確認しながら運動したいと思います。（拍手）

司会 思つたより人数が増えたので、資料をもらつてない方が出ましたが、増刷りが出来ましたので持つていない方に配ります。では白いＴシャツの方。

広瀬 〈日本婦人会議〉の広瀬と申します。この事件は北京会議から持ち帰つた行動綱領の「占領下の女性への暴力」と「少女」に対する大きな挑戦だと、ショックを受け、高里さんの詩に心が痛む思ひです。

私は神奈川に住んでいます。沖縄に凝縮された犯罪に比べ規模は小さいけれど、県土の一パーセントを占める基地によつてこの十年間だけでも四九五件、そのうち二七件凶悪事件が起きています。女性の殺害、レイプはもとより、騒音でお年寄りが眠れない、子どもが引きつける。特に厚木、横須賀は夜間発着訓練を空母の入港の度に繰り返します。帰還率が高く攻撃効果が高いのは夜間に限るそうです。したがつてこの訓練の精度を上げることは、人間性を失つていかに野獣に徹するかかの訓練です。

一六日にも厚木の司令官と交渉しましたが、基地の縮小・撤去、このことは米本国にも働きかけて、あらゆる局面で運動したい。従軍慰安婦ともかわりある補償と国交正常化、南北朝鮮統一などに絡まる平和戦略を、米ソ冷戦構造崩壊後の展開を一緒に持つていきたいと思いま

す。まず私たちのできることから一緒に頑張りましょう。(拍手)

司会 では最後の方。

石下 神奈川から来ました石下と申します。へ神奈川戦争への道を許さない女たちの会で、差別こそ戦争の根源であると運動してきました。今度の事件は性差別、民族差別の問題だと心に刻んで社会を変えていかなければならないと思います。今日へ核も基地もいらない神奈川女性の会へからお願いがございます。沖縄の苦しみには遠く及びませんが、神奈川も苦しみ続けてきました。大田知事への激励と米軍撤去を求める連帯の思いを伝えるはがき運動をしています。一言お気持ちを書き添えて、出してください。(拍手)

司会 遅れて清水澄子議員がいらしたので一言発言をお願いします。

強かん救援センターを全国的な運動にしよう

清水 高里さん、本当に私たちが今やらなければならないことを主張されて、胸が詰まりながら責任を痛感しています。

北京で事件を知ったとき、とつさに少女のことを心配しました。北京会議で「武力紛争下における女性への強かん、つまり性に対する暴力」が女性への人権侵害であると決定した世界会

議の、まさにその最中でしたから、ショックでした。帰ってすぐ、私は女性問題担当大臣は官房長官ですから「担当大臣はこの少女への人権侵害に対してアメリカに抗議してもらわなければ困る。謝罪と共に償いも要求すべきだ」と、要請しました。

しかし今回の米兵の行為と同じように日本の軍隊も他国の少女や女性を性奴隷にしてきました。私たちがこの少女の人権侵害に対して徹底的に謝罪させ補償させられるかどうか、ということが今後の従軍慰安婦の問題を含め、日本の女性が性暴力を人権問題として日本の中ではつきり確立できるかどうか、女性自身に求められていると思つています。

高里さんが主張された「強かん救援センター」を、私たち皆で成功させるようなカンパ運動をやりましょう。全国的に広げていきましょう。

私も議員として、女性に対する性暴力撤廃の法律や、救援センターを政策として実現したい。人身売買や強制売春など、性的な搾取も虐待も性奴隷化も許さないという、人権の確立のために女性議員が先頭に立つて取りくんでいきたいと思つています。皆さんも一緒に叱咤激励をしてください。

斎藤さんがおっしゃったように、私たち本土の人間も、沖縄の皆様の怒りが何を提起しているか考えなければなりません。沖縄の集会の主張も「なぜ私たちは本土の人にこういう目に合わされるのか」と言つています。これは単なる感情ではありません。沖縄の基地の七〇％は私有地です。憲法を守れと言いながら、沖縄だけが私有地を基地にされています。私有財産の権利という憲法上の権利さえ沖縄のみなさんは保障されていない。そのことを私たちは五十年も放つてきた。一九五一年のサンフランシスコ条約では、日本は独立したのに沖縄をアメリカの

政権下に切り捨ててしまった。一九七二年、祖国に復帰した時も「核抜き、本土並み」という約束であつたが、それが全く嘘のことで終わつてきた。だから戦後五十年とは、本土の我々も沖縄の皆さんの犠牲の上に今日の繁栄を築いているんだということを、しっかりと受け止めることが大切ではないでしょうか。今度こそ一人の少女への性暴力を許さないという憤りを、今までの基地反対の運動と基地撤去の要求と重ね合わせながら、新しい基地撤去運動を高めて行きましょう。（拍手）

司会 いろいろな意見が出ましたので、最後に高里さんに一言お願いします。

これ以上の破壊を決して許さない

高里 たくさんの方々からご発言頂きましたが、それを突き抜けて行けば皆つながっていると
思います。それぞれ取組んでいるところで、共闘して行けたらと思います。特に性暴力、平和
の問題、皆根っこに流れる問題は一つだと思えます。

こちらにありますのは、北京で世界中の女性たちに署名をもらつたものです。これは出発の
直前に中国の核実験を知り、行くのをやめようかとすら言う中で、意思表示をしようと、北京
の中で考えて「命どう宝」——一つ一つの命こそ大事だという言葉が沖縄にはありますが、
「これ以上の破壊は許さない、核実験、軍事力、すべての暴力を許さない。女たちよ、新しい
平和を生み出そう」というメッセージを作つて英訳して、アジアテントの日に出したのです。

その後、終わるまで世界中の方がこの言葉を読みながらサインをしてくれました。

今度の行動綱領に「紛争下における女性への暴力」、「占領下における強かん」は戦争犯罪であるという規定が盛り込まれたんです。実は七月に総理府に沖縄から「長期軍事駐留下における女性への暴力」も同じように戦争犯罪に準じて扱ってほしいと、手紙を書きました。

紛争下であろうと、占領下であろうと、長期軍事駐留下であろうと、短期PKO駐留であろうと、そこで平和の名の下に犯される女性への暴力は戦争犯罪であるという規定を、しっかりと実際に国政の中に生かしていただきたい。今回代理署名拒否をしている大田知事を皆で支えたいと思っています。このことは決して敵対関係ではない、当然のことを当然のこととしてやっていく、ということなのです。ぜひ皆様のご支援をお願いします。（拍手）

司会 どうもありがとうございました。発言いただいた方も参加していただいた方もありがとうございました。今日の参加者は二二八名、カンパは一七万六九五円集まりました。どうぞ役立てて下さい。

資料の集会決議案を作成しました。読み上げますので賛同する方は拍手をお願いします。

沖縄・米兵による強かん事件に抗議する女たちの集会決議（案）

日本政府・村山富市首相殿、外務大臣・河野洋平殿、防衛庁長官・衛藤征四郎殿、駐日米国大使・モンデール殿、米大統領・クリントン殿

沖繩で起きた三人の米兵による強かん事件は、遠く離れた私たちにとつても衝撃的なことでした。被害にあつた少女、家族、周囲の人たちの苦しみ、怒りを思うと、身体が震えるような憤りにとらわれます。人の尊厳を踏みにじる行為は、絶対あつてはならないことです。

沖繩に米軍が上陸して以来、復帰後二三年目を迎えた現在まで、数え切れないほどの少女、女たちの尊厳が痛めつけられてきました。米兵による性犯罪は、「地位協定」を理由にほとんどが裁かれることがありませんでした。また、基地被害を調査した文書に、女たちが受ける性被害は一切取り上げられていません。何という悔しさ。それは沖繩の女たちだけでなく、すべての女たちの悔しさでもあります。

日本で唯一地上戦の惨禍を経験してきた沖繩は、常に軍事的拠点として位置付けられられてきました。その沖繩には、日本全体にある米軍基地の七五%もが存在し、「基地の中に沖繩がある」と言われています。私たちはこの事実を知らながら、長い間沖繩に犠牲を押しつけてきました。これは沖繩だけの問題ではなく、私たちの問題でもあります。基地・軍隊は構造的暴力そのものです。米軍がどんなに「綱紀粛正」しても、軍隊・基地というものがある限り、このような事件は後を絶ちません。

他方、日本の法律は性暴力の被害者の救済という点では極めて不十分であり、多くの女性が泣き寝入りを強いられています。現に日本のマスコミが、この少女を特定しようと取材攻撃をかけているのは、二重の人権侵害を犯すことです。こんな残酷なことを許すわけにはいかないと、強く訴えたいと思います。

沖繩の女たちは、「二度とこんなことを起こしてはならない」と固い決意のもと、連日デモ

を続けています。私たちも、「二度と起こさせない」という思いで一杯です。そして一日も早く平和で、人権を守り、安心して暮らしていける沖縄であることを望みます。

私たちは、地位協定の見直し、構造的暴力である軍隊・基地の全面撤去を強く要望します。女性の人権を保障するよう日本の法体系を改めること、性暴力被害者の相談、援助システムを女性の側にたつて整備することを求めます。

これは「沖縄米兵による強かん事件に抗議する女たちの集会実行委員会」ということで、資料の裏に名前が書いてある者たちが作成しました。承認される方は拍手をお願いします。

(大きな拍手)

ありがとうございました。

*

会場を出たあとも、女たちは三々五々集まって熱い思いを語り合った。

政府の姿勢は依然としてあいまいだが、名誉も地位もない、失う物のない女たちの思いは純粹だ。

もう一步も後には退かない。ヤマトのすべての女たちも、沖縄の女たち、男たちと共に、たたかい抜こうとしている。安保廃棄にまでたどりつくのは至難の業だが、女たちが本心に心をついてたたかうとき、各政党ともその声に耳をふさぐことはできなくなる、と信じている。

女たちは悲しむ！ 憤る！ 行動する！！

〈沖縄から〉

少女暴行事件に接して “私のとりくみ”

伊良部 裕子

私がこの事件の第一報を耳にしたのは九月八日のテレビニュースだったと思う。家事をしながら耳に聞こえてきたという程度で、「また何か起きたな」ぐらいにしか思わなかった。こんな大きな問題になるとは……。今思えば女性問題を引っ提げているものとしては、はなはだ恥ずかしいことではあるが、翌日の行動に心を奪われていて、他のことは眼中になかったと言えよう。

翌日の行動とは自治労女性部の宿泊学習会のことで、テーマの一つに「沖縄の従軍慰安婦を追って」と題する講演会を行なったのであるが、この学習会の質疑応答で会場からこの事件について問題提起が出たにも拘わらず、これに対して全く取り合わなかったのであるから私自身の認識不足もはなはだしいと思うばかりである。

学習会の翌日、これも夕食の支度をしている最中、ニュースで北京会議に参加したメンバーがこの事件に対する抗議声明を発表しているのに出会（でくわ）した。「あごろ」で

お馴染みの高里鈴代那覇市会議員の涙ながらの声明は、私のみではなく多くの県民に刺激となったであろう。私たち、自治労（実は私は自治労沖縄県本部の女性部長である）も抗議をしなければと思いつつも、何をどうしたらよいかわからず誰にも相談せずおろすばかりであった。

ようやく私がこの件で口を開いたのは九月十三日自治労県本部の執行委員会の席であった。男性ばかり二十数名が居並ぶ会議で抗議決議をすることを要請した。これは「女性部がやったら」という御仁もいたが、女性だけの問題ではないことを主張し、即決議し、村山首相とモンテール駐日米国大使に発送した。

その後連合の女性代表者会議（東京）が開かれた時、この問題を発言すべきかどうか迷ったが結果的には発言しないで終わった。交流会の席で沖縄の独自の問題は？と問われた時この問題を話したが、内容をよくつかんでいなかったため全体会議では口にできる状況ではなかったこと、会議のテーマがあまりにもこの問題とかけ離れていたため口火を切りにくかったと言えよう。

その夜テレビ朝日の「ニュースステーション」でこの問題と土地協定についてかなり詳しく伝えていた。沖縄では放映されていない局の番組が沖縄以上の取扱いであった（十月一日より琉球朝日放送として開局）。

沖縄に戻ったら斎藤さんからの電話である。沖縄の人に思いの丈を書いて欲しいという書いてくれと言われても何をどのように……と戸惑ったがこの事件をしつかり自分の問題とし、女性蔑視の象徴である性暴力と日米安保の欺瞞性を大きく声にすることが必要だろ

うし、何とか全国の「あこら」の読者の方々に沖縄の実態を知ってもらう好いチャンスではと思いペンを執り、沖縄在住の「あこら」会員と連絡を取ったところだ。

この間、女性団体の抗議集会は、九月二二、二三、二四日と続き、二五、二六日は労働団体を含む市民集会在連日連夜行われた。私は、二四日婦団協（沖縄県婦人団体協議会）主催の集会に自治労女性部として参加、抗議のメッセージと、この運動を一過性のものとせずマンネリや諦めに負けず問題が解決するまで様々な方法で頑張ろうと発言した。

翌二五日午後の連合執行委員会では明日（二六日）昼休み緊急抗議集会を開くことを決定。緊急中の緊急だったが二百余名が集まり、私は連合沖縄女性委員長として決意表明をし、基地撤去とこの少女の精神的ケアを求めた。また同じ日の夜は平和運動センター主催の大抗議集会が中部・宜野湾市の普天間小学校で行われ三千人余が集まった。集会終了後は軍の司令部までデモ行進をし、シュプレヒコールで怒りを露（あらわ）にした。

翌二七日、連合女性委員会として在沖米総領事を訪れ抗議決議文を手交すると共に一時間余の抗議行動を行なった。この際対応したのがジョン・O・マーハー領事で、六月に横浜から沖縄に赴任したばかりの二九歳という若い男性だった。通訳を通して私たちが抗議文を読み上げると、それに対して領事から深い陳謝の言葉があり、現在軍内で新たに始まった運動と対策を語った。それは「この事件はここ沖縄の基地内はもちろん、本国でも大変申し訳ないことをした、せめて罪の償いにとカンパ活動が始まっている。また綱紀粛正の具体的取り組みとしてはこれまでは講堂に集め講義形式での注意だったが、今回からは小グループに分け沖縄の歴史や習慣や心理的側面を教え、県民との接し方を指導している」

と。私たちの、いま米軍は県民からたくさんの抗議を受けていると思うが、原因は何と考
えているのかという問いに、「重要であり難しい質問だ。誰も予想だにしなかった。前歴
もないし、募集要項の基準にも当てはまっていた。解決策があつたら教えてもらいたい」
との答。さらに「このような事件は基地内で起きていないのか」との問いには「つかんで
いない。プライバシーを保つことに終始してきた」。「沖縄県民を見下していないか。沖縄
蔑視があるからこういう事件が後を絶たないのでは。地位協定を見直す時期ではないか。
世界の警察になるのはやめて欲しい」と追求すると、「米軍当局の反応は、恥ずべき行為
でショックを受けている。防止策の一つとして基地を無くしなさいと言う。これも一理あ
る。しかし私の立場ではどうするとも返事のできる立場にない」という。

私たちは最後に、「基地の中でどんなにすばらしい教育をしても所詮軍隊だ。口先で沖
縄の人と仲良くしなさいといつても日常では人を殺すため厳しい訓練を強いている。いざ
事が起れば戦場に真っ先に飛び出し、相手をやつつけなければ自分が殺られるような戦
場に行くのだから、人権や人間性などといつておれない。そんな基地の中にいて人間を尊
重するような生活はできない。まずは基地を無くすことしかないではないかと、強く鋭く
訴えた。領事はこれに対して返す言葉もなく沈黙の状態で、ただこの件でアメリカの人が
すべて悪者でないことをわかつて欲しいと言うばかりだった。

自治労女性部としては集会に出られない女性でもできる行動として、ハガキ抗議行動を
することにした。これは沖縄からの提案で全国の女性部に呼びかけたものである。村山総
理宛のハガキを十月中に一斉に出すのである。〈あごろ〉の皆様のご協力もお願いしたい

ところだ。

そして十月二日には全県民的に五万人抗議集会を行う予定でいる。このような規模の集会が行われるのは実に四十年ぶりといわれている。この巨大な基地を仕立てた土地取り上げ反対闘争以来という。今沖縄の人は長い間の我慢や日米の欺瞞的発言に堪忍袋の緒を切ったのである。今までとは違うぞ！と私も思っている。

十一月には、クリントン大統領が来日し、日米安保条約の再定義がされと言われてい。この時まで行動を続け、安保の犠牲になっっている沖縄の実情を充分知ってもらいたいと思う。

最後に、今、防衛施設庁が基地の契約期限切れの地主が契約を拒否しているため地主に代わって署名を知事にさせようとしているいわゆる「代理署名」についてだが、大田知事は勇気をもって拒否した。この問題を話すと切りがないので改めてこの事について書きたいと思っているが、ともかく知事がしなければ総理大臣がせねばならない。つまり、ここにたどり着くまでには訴訟という事になるようで、そうなると契約切れとなり基地が使えなくなるとい。政府は何とか知事に署名をさせるべく宝珠山防衛施設庁長官を沖縄に送ったが、知事は文書で拒否の態度を明確にしたとのことで会おうとしなかった。

いま県民が盛り上がり、そしてその影響を受けた大田知事の勇気ある態度に県民はさらに一体となつて行動を起こす決意をしている。私は一坪反戦地主でもある。基地撤去の第一歩は契約拒否からしかないのだから。

県民あげて知事を支援し基地撤去、安保廃棄まで精いっぱい頑張りたい。（十月二日）

女たちはだまされない

浦島 悦子

九月二十三日、米軍の嘉手納空軍基地に隣接する沖縄市民会館で行われた「これ以上許さない！ 少女・女性たちへの暴力・人権侵害——子どもたち・女たち・島ぐるみ集会（NGO北京95沖縄実行委員会主催）」の会場へ足を踏み入れたとき、私の胸の中で何かのはじけた。

九月四日に起こった米兵三人による少女（小学生）拉致強姦事件の衝撃。それをきつかに積もり積もった怨念が噴出したかのように渦巻く県民の怒りと、それをなんとかだめ、日米安保条約と在沖米軍基地の安泰をはかろうとする日米両政府と米軍の動きが連日大きく報道される中で、私はいても立つてもいられない気持ちと、その気持ちをどのように表現し、行動に移せばいいのかわからない苛立ちにさいなまれていた。

諸悪の根源が軍事基地であり、それを正当化している安保であること、そして、問題の解決は基地撤去、安保廃棄にしかないことは明らかなのに、どのようにすればそこに到達することができるのか、その道筋が見えないのだ。日常風景と化してしまった基地のフェンス、基地経済に深く組み込まれた私たちの生活。沖縄市に住むようになってたかだか五年余りに過ぎないのに、早くも、軍隊と隣り合わせに暮らしていることにも、軍用機の爆

音にも、慣らされてしまっている私自身を見いだしてゾツとする。

そんな私（たち）の日常性をどう突き破つていけばいいのか。どうすれば、少女の苦しみに対して「二度と起こさない！」と胸をはつて言うことができるのか――。重い問いを抱いて会場に足を運んだ私は、そこに集まった女たち（少数ながら男性の参加もあった）の中にわが身を置いて、やつと一つの足掛かりを得られたような気がしたのだつた。

参加者全員が少人数に分かれてのバズ・セッション、一人一分間スピーチ（思いがあふれすぎて「三分間スピーチ」となる人も多く、デモ出発の時刻をひかえた主催者をやきもきさせた）で、女たちはそれぞれの思いを、怒りを、悲しみを語り、安保廃棄を、基地撤去を、そして被害を受けた少女とその家族へのこまやかな心配りを強く訴えた。「地位協定の見直し」など生ぬるい。今すぐ地位協定の廃止を！」という意見は大きな拍手を浴びた。

バズ・セッションの中で、基地のゲートのすぐ近くに住むという女性の「こんなことは日常茶飯事よ」という実感のこもった言葉が忘れられない。今回の事件の陰には、同じような被害を受けながら声をあげることでできない多くの女たち（少女も）がいるのだ。

私も一分間スピーチの列に並んでマイクを持ち、「激しい県民の怒りをあの手この手でなだめようとする日米両政府にだまされまい、たとえ男たちがだまされても、女たちは決してだまされない、沖縄だけでなくこの世に軍隊がある限り、女性の解放はありえない」と、訴えた。

破壊と殺りくを任務とする軍隊の中で、人としての当たり前の感性を抑圧され、ゆがめられた若者たちが、そのうつぶん晴らしとして、さらに弱いものを踏みにする。強姦を引き起こすのは、性欲というよりも「獣欲」などという言葉がよく使われるが、自然の摂理に従って生きるものたちは、人間のようにゆがんだ性欲は持たない。征服欲であり、（それを公認のもとに組織的に行なったのが、かつての日本軍の従軍慰安婦制度だった）、だからこそ、その矛先は、より弱い者、少女へと向けられるのだ。いくら「綱紀を肅正」し、地位協定を手直したところで、軍隊が存在し、軍事基地がある限り、強姦はなくなるらない。

集会場から嘉手納基地第二ゲートまで、休日で街へ出てきた米兵たちが遠巻きに見つめる中を、女たちのデモは進んだ。平和を願う歌をうたい、「ノーモア・バイオレンス（暴力）」「ノーモア・ベイス（基地）」と声をあげながら。

今回の事件に接して、四十代以上の人は一様に、四十年前の「由美子ちゃん事件」を思い出していた。日付も今回と一日しか違わない九月三日、六歳の由美子ちゃんが米兵に強姦されたうえ殺され、棄てられた。あの悪夢のような事件は、米軍占領下の象徴的な犯罪として、今もウチナンチュの脳裏に刻み込まれているが、今回の事件は、現在の沖縄が本質的には当時とまったく変わっていないこと、「戦後五十年」が沖縄にとつて何だったのかということを、白日のもとにさらけ出したのである。

沖縄戦が終結してから五十年たつたのは事実だが、その間、全国の七五%の米軍基地を抱えこまれた沖縄は、決して戦争と無縁ではなかった。朝鮮戦争、ベトナム戦争、湾岸

戦争と、沖縄は否応なく加担させられてきたし、私たちが軍事基地の存在を許す限り、今後とも私たちは、被害者であると同時に加害者でもありつづけなければならないのだ。

私（たち）は、被害者になることも加害者になることも拒否したい。米軍用地強制使用の署名代行業務を拒否した沖縄県知事の姿勢を引き出した県民の怒りを終息させることなく、基地撤去、安保廃棄へとつなげていかなければ、少女の流した涙に申し訳がたたないと思う。世界の女たちとの連帯のためにも、今こそ立ち上がるときだ。

（十月四日）

私の頭を離れないこと

高嶺 典子

今回の事件で、私の頭を離れないことがある。加害米兵の、母親の声である。遠い故郷にいて、息子の犯したことに驚き、嘆き、そして言う。「私の息子は、日曜日には教会に通い、ボーイスカウト活動をしていた。このようなことをするはずがない。私は息子を信じている」と。

もし、母の言葉に偽りがないのなら、なぜ、この「善良」な青年たちは、異国の地で幼い少女の口にテープを貼りつけ、自分の欲望を遂げたのか。

肌の色が違うから？ アジア人だから？……。

私はここに軍隊の本質を見る思いがする。おそらく国にいたなら、立派な息子、優しい

恋人としてふるまっていたはずの彼らが、いったん軍隊の枠にとらわれ、武力を誇示するため外国に來た時、ごく当たり前の人間としての感性が、次第に痩せ細り、変わつて別の行動様式を獲得することになるのだろう。五十年前、私たちの「善良な父、善良な夫」が中国やフィリピンなど多くのアジアの地でやつたように……。

私の気持ちを重くしているもう一つの事は、マスコミなどの報道姿勢である。興味本位で、少女を特定するような取材をしたり、政争の具として声高に叫ぶやり方は、少女をさらに傷つけてはいまいか。心配でならない。少女の心や体が、これ以上損なわれることがあつてはならない。だが、これを誰に向かつて言うべきかわからない。

およそ人の一生にも相当する五十年という長い年月を、異国の軍隊と隣り合せて生きてきた沖繩は、異常なことが、日常の中で起こる。この島の悲しみ、痛み、無念さが、少女の体を通して、私の体に深く深く突き刺さる。

(十月九日)

基地ある限り平和はない

糸数 京子

米兵による少女暴行事件の報に接した時、沖繩県民の誰もが強く心を痛め、怒りにうち震えた。少女のこれからと思うと、女として、人の子の親として、少女の心の傷が少しでもいやされ、恐怖が少しでも治まるよう抱きしめてやりたい思いでいっぱいである。

事件が起こるたびに米軍は謝り、綱紀肅正を約束してきたが、このような残忍な事件は後を絶たない。卑劣な行為を弁護する気は毛頭ないが、彼らの置かれた状況、恋人や家族と別れ、終日軍事訓練に明け暮れる戦場的毎日の中で起こった事件と考えれば、これは単なる兵士個人の犯罪と言うよりも軍事基地そのものがもたらす犯罪であり、戦争犯罪に類するものとはいえないか。

この安保体制下で、不平等な地位協定を押しつけられて「基地と共生・共存」なんてできるわけがない。このことを、基地のない地域で生活している日本国民及び、安保の名のもとに冷戦後の今なお、この沖縄を極東のキーストーンと考え、駐留している米国政府に対し、基地ある限り、われわれに平和で安全な暮らしはありえないことを強く訴えたい。

(九月二十五日)

沖縄は揺れている

又吉 喜美枝

今、沖縄は、日本は、揺れている。「日米地位協定」見直し、安保廃棄の声が日本中に渦巻いている。九月四日に起きた「米兵少女乱暴事件」は、多くの人にその事件の内容から、ショックと怒り、悲しみを与えた。

米海兵隊の三人が十二歳の少女を車の中で口をガムテープでふさぎ、動きを取れないま

まにし、レイプした。この話を聞いたとき、私は声も出せないほどであった。基地があるゆえの蛮行であり、そして、いかに女性の人権がないがしろにされてきたかということをも物語る話である。少女の泣き叫ぶ声と、家族のおえつが聞こえてくる。少女の痛みは私の痛みであり、家族の悔しさは私の悔しさである。

九月の中旬から、さまざまな団体が抗議集会を開き、「基地の全面撤去」などを訴えてきた。そう、このような事件をなくすためには、全面撤去しかない。異論はない。しかし、「日米地位協定」「安保」と政治的な面だけがクローズアップされているような気がしてならなかった。これは、性暴力、女性の人権侵害でもあり、この視点からも見ていかないと一過性で終わってしまう危険もある。確かに軍隊が存在し、そこに属する人が犯した。だが、それ以前に「なぜ、男性の女性に対する性の暴力が起きてしまうのか」を考えていかななくてはならないだろう。これは、職場でのセクシユアル・ハラスメントや、まだ根強く残る女性差別と根っこは変わらないのである。

レイプは女性にとつて最も屈辱的なことである。今回の事で中年の女性が「なにもいたいけな少女に手を出さなくても、まわりにパンパンはたくさんいたはずなのに」と言っているのを間接的に聞いた。こういう話にはほんとに愕然としてしまうのだが、この事件の「盛り上がり」を見て、友人の一人は「ほとんどの人は少女の未来をめっちゃめっちゃにして」という気持ち強いはずよ。二十歳の女性が被害者だったらどうなっていたかしら」と語っていた。確かにそうだ。失礼だとは思いますが、少女だったから、これほどの大きなニュースになった、ということはあるだろう。いまや、日本とアメリカの大きな政治課題にまで

発展した感があるが、本質を見逃したくない。地位協定の見直しも必要だろう。やはり、続けて基地の撤去を訴えていくことも大切だろう。同じように、なぜ、こんなことが起きたのか、そして後を絶たないのかと考えることも大事だと思う。

それにしても、今年は沖縄の子どもたちにとつてなんと受難な年であらうか。一月には名護で三人が、四月には石川で、小さな命が失われた。PTAや子ども会育成会のオジサン、オバサンがシンポジウムなどで、ティーンエイジャーを対象に「夜型社会をなくそう」と叫んでいる間に、その下の子どもたちが散水タンクの中や、犬にかまれ、幼い命を亡くした。いずれも非日常的な出来事だ。私たち大人は子のまわりの環境にもつと目を光らせなければならぬだろう。

話はそれるが、私は九月二十三日に沖縄市で開かれた「NGO北京95」実行委員会主催の集会に参加した。地位協定見直しや安保廃棄などの政治的な意見のほか、被害者へのカウンセリングにまで言及できたのは、沖縄における草の根女性運動の成長の証しだと思った（その後、レイプに遭った人のための電話相談を開設）。

「被害にあつた関係者は今は多分、そつとしておいてほしいと思う。彼らがカウンセリングを受けたいと思つた時に、いつでも対応できるように態勢を整えておきたい」とそのグループに携わる友人は語る。今、こういう言い方をするのは酷かもしれないが「それでもなお、人生は生きるに値するものである」と信じる。少女とその家族が頑張つて生きていけるようにと願わずにはいられない。

（十月十二日）

A子ちゃんへの手紙

桑江 テル子

A子ちゃん、お元気ですか。

私たちの南国沖縄も朝夕はすっかり秋の気配です。読書の秋、スポーツの秋、食欲の秋……二学期も追い込みですね。是非ともがんばって下さいね。

最近、新聞やテレビでたくさん報道されましたが、沖縄は五十年という長期にわたる米軍駐留に対し「もうこれ以上がまんできない、基地との共生はいや」とはつきり意思表示をして、多くの県民が怒りに燃えて立ち上がっています。十月二十一日は「米軍人による少女暴行事件を糾弾し日米地位協定の見直しを要求する沖縄県民総決起大会」が、約八万五千人の結集で開かれました。

おばさんたちは、去る九月、中国北京で開催されたNGO世界女性フォーラムに行ってきたメンバーが互いに呼びかけあつて参加しました。北京で世界の人たちが約束したように「すべての暴力に反対」「軍隊はいらない」「平和な沖縄を取り戻そう」とシユプレヒコールをし、そのことを書いた大きな布（旗のかわり）を掲げて強く意思表示をしました。

大田知事は「このようなひどい事件が起きてしまい、行政の長として深くお詫びします」とあいさつしました。また高校生の仲村清子（すがこ）さんは「事件を公にしてくれた彼

女の心を無駄にするわけにはいかない」「軍隊のない、悲劇のない、平和な島を返して下さい」と若者として率直な言葉で訴え感動的でした。もし貴女がああいさつを聞いたら、どう感じただろうか。ぜひ聞いてもらいたいと私は思いました。

でもねA子ちゃん、おばさんは今とても心配し、憤っているんです。

五十年間いすわり続け嫌われている米軍基地。日米安全保障条約と地位協定がある、アジアや極東の安全だけではなく世界の紛争に備えて今後必要である…など理由をつけて、こんなに県民が反対しているのに再び三たび、沖縄に押しつけようとしているのです。そして常に凶悪事件を起こしてひんしゆくをかつている海兵隊の人員を減らしてくれという声にも「ノー」とのことです。だからおばさんたちは、大田知事がおつしやつているように、百歩譲って安保がそんなに重要なら「基地の苦しみと重圧を日本国民全体が分担しましょうよ、狭い沖縄に七五%も集中させないで」と日本政府に求めているのです。例えば、村山総理の出身地大分県や河野外務大臣が住んでいる神奈川県にも移転させてみて下さいと提案しているんです。そうすれば日本国民全体が安保についてもつと真剣に考えてくれるだろうと思うからです。

この怒りを要求が叶うまで燃え続けさせ、闘い続けたいと、いまおばさんたちは、北京で知り合った外国の女性たちや日本国内のこころある女性たちにどんどん手紙を出して、軍隊という構造的暴力をこの地球上からなくすために連携を取りあっています。アメリカのクリントン大統領が来日する十一月下旬まで、決してくじけないでがんばると固い決意をしています。きっと本土の女性たちも応援してくれると信じています。

A子ちゃん、貴女たちは次の二十一世紀を担う世代です。基地の島沖縄は、おばさんたちの二十世紀で、充分過ぎるほど充分です。これからほんとうに「豊かで平和で安心して暮らせる東洋のガラパゴス・おきなわ」にしなければなりません。そのために若者たちがいつしよに立ち上がり闘ってくれることを願っています。お元気でね。（十一月一日）

〈ヤマトから〉

“加害者”としてのわたし

斎藤 千代

高里さんのお話は、いつ聞いても心に沁みるが、十月二十三日の集会のお話ほど、心に刺さった話はない。「――なぜお前は心がにぶかったのか、腰が引けていたのか」――あれから毎日毎夜、私は自分を責め続けている。

六年前、沖縄空港で初めて沖縄の新聞を見て、恩納村に作られようとする都市型ゲリラの訓練施設に、島じゅうがたぎりたつほど怒り狂っていることに驚愕した。これほどの事件、実弾演習で山が崩れるほどの状況を、ヤマトの新聞もテレビも一言も一句も伝えていないことに呆然とした。ヤマトの人間として、ただ恥ずかしかった。申し訳なかった。

「ハンストをしよう」ともろさわようこさんを誘ったのは、それでもするほかおわびの方法がない、と思ったからだ。私はもろさわさんほどの知名人ではないが、ヤマトの女が

ハリストでもし倒れたら、ヤマトのメディアも全く無視することはできないだろう。沖縄の情報がヤマトに伝わる、そのきっかけになれば……と願った。幸か不幸か健康に異常はなく、「絶食のあとは急に食事をしてはいけない」と、温かなおかげに、温かな沖縄の心からだの底まで汲み取って帰ったが、あれから私は何をしていたのだろう。

「あごろ」146号「沖縄を犠牲にした安保の上に眠れますか」のAGORAZEINで、私は次のように言っている。

「沖縄のことをメディアが伝えないのは、自主規制じやないのか。せめて女性ジャーナリストだけでも書き立ててほしい、マスメディアに記事の材料を提供しよう。『婦民』『婦人展望』『あごろ』のようなミニコミは精力的に報道しよう。各地で集会を開こう」

このどの一つでも、すぐにも実行できることで、いくつかは実行もした。しかし何とわずかな実行だったのだろう。沖縄全土の演習場で、毎日毎日砲弾が射ち込まれている、あの砲弾にも匹敵する運動を続けなければ、沖縄の声はヤマトには届かなかつたのに。

基地がある、ということは暴力がある、ということ。それもただの暴力ではない、すさまじい暴力がある、ということ。今度の事件は決して偶発的なものではない。いたいけな少女を傷つけた加害者は、状況を知りながら行動をしなかつた私自身にはかならないのだ。

*

北京会議の一番のメインテーマは、暴力・とりわけ日本軍慰安婦問題だった。私たちは十日間、毎日毎日謝り続けた。恥ずかしかった。人間として決してはならない恥ずべき行為をしながら、それを認めず教えず謝らない政府を持っていることがいたたまれな

つた。そして、戦後五十年、女は選挙権も被選挙権も持ち、選挙民の過半数は女であるのに、その恥ずかしい政府を持ち続けているということは、私たち自身の責任にほかならないと、心に刻んだ。その北京会議の最中に「事件」は起こっていたのだ。ヤマトは、今度は珍しく反応したが、沖縄ほど捨て身の反応だろうか。

十一月一日、ペリー国防長官は、沖縄の米軍四万七千人を減らす意志はないこと、極東十萬の米軍は、「アメリカの極東政策のために、そして日本の安全のために」欠くことのできない存在だ」と重ねて明言した。

毎日弾丸が飛び、米軍によるセツ盗、強盗、レイプが日常茶飯事の沖縄の「安全」が守られなくて、なぜ日本が「安全」であり、なぜアメリカが信頼されるのだろうか。これは「大東亜戦争は聖戦」と言い続けた過去の日本政府と少しも変わらない暴言ではないだろうか。どのような美辞麗句を連ねても、軍隊は構造的暴力であり、軍隊で安全は守れない。政府がそれを言わないなら、私たち一人ひとりが捨て身で声をあげ続けるほかない。

阪神大震災で、無残に崩壊した老朽住宅を見て、日本の安全政策のむなしさをしみじみと思った。一日一二九億円もの自衛隊費、一日三六億円もの米軍費を払い続ける代わりに、堅牢な住宅を建てることはできなかったのだろうか。「人を殺す」ことを毎日叩きこまれている自衛隊や米軍の代わりに「人を助ける」救援隊をなぜつけれないのだろうか。

かつて「聖戦」の名の下に日本国民のすべてがマインドコントロールされたように「安全」の名の下に、その正反対の構造がつくられている。しかも、それを一人ひとりの国民が自分の胸に問う機会を失っている。「安全」とは何なのかから、今こそ本当に問い直す

べきではないだろうか。基地には核もあればサリンもあり得る。少女に加えられた残虐は氷山の一角にすぎない。一人の人間の存在は地球と同じ重みがある。極東の和平・日本の平和と、一人の少女の心身は、同じ重さで尊重されなければならないことを、どんなに声を大にして言っても言いすぎることはあるまい。

「沖縄」に日米安保のほとんど全責任を負わせて、ヤマトは経済的繁栄を得た。そして一九六〇年以来、国民の多くは安保に疑問を抱き続けながら、次第に不問に付すようになった。

六年前「日本女性会議89なは」の分科会「沖縄発おんなと戦争そして平和」に参加して、私が「沖縄と本土と、すべてのうない（女）を結ぶネットワークを」とフロア発言したとき、壇上の琉球大学教授大田昌秀氏は、「沖縄の痛みがわからなくてネットワークが組めるか」と、バシッと切り返された。その瞬間、私は、さし出した手を手首からバサツと切り落とされたように感じた。私たちがどんなに想像しても「慰安婦」と呼ばれた人の痛みを追体験することはできないように、目の前で、米軍に日本軍に、愛する人びとを殺された沖縄の人びとの悲しみはヤマトンチュにはわかりつこないのだ。

「基地容認は加害者への道、安保の撤廃以外に解決の道はない」、そのとき強く語った大田教授こそ、今の大田知事。「ネットワークが組めるか」と迫った教授は、いま知事として、あらゆる恩惑をかなぐり捨てて、「安保容認を続けるなら、ヤマトは加害者だぞ」と迫っているように思われる。その思いを受けとめないのは、行動しないのは、あえて加害者に安住することにはかならない。

（十一月一日）

沖縄の米軍基地の現状と課題

1995年5月沖縄県

1. 概 要

| | | |
|------------|------------|-------------|
| (1) 施設数 | 42 | (1994.3現在) |
| (2) 施設面積 | 24, 526 ha | (1994.3現在) |
| (3) 軍人・軍属数 | 52, 594 名 | (1994.12現在) |

2. 沖縄の米軍基地の特徴

(1) 広大かつ過密な米軍基地

○県土面積の約10.8%が米軍基地

○沖縄本島では、面積の約20%

市町村面積に占める基地面積割合が40%以上の市町村

| | | | |
|-------|-------|-------|-------|
| ①嘉手納町 | 82.8% | ②金武町 | 59.8% |
| ③北谷町 | 56.7% | ④宜野座村 | 51.5% |
| ⑤読谷村 | 46.9% | ⑥東村 | 42.2% |

(2) 沖縄に基地が集中・安保の過大な負担

○国土面積の0.6%に過ぎない沖縄県に全国の米軍施設の約25%が存在する。

○米軍専用施設面積は全国の約75%

(3) 私有地の占める割合が高い

○本土の基地がほとんど国有地（約87%）であるのに、沖縄は市町村有地（約31%）、私有地（約33%）が多い。（国有地約33%、県有地約4%）

○特に基地が集中する沖縄本島中部地域では、約75%が私有地。

○跡利用の推進には土地所有者の協力が不可欠。

(4) 歴史的背景

①戦時における日本軍の接収（1941～1945年）

北飛行場（読谷）、中飛行場（嘉手納）等

②占領下の土地接収（1945～1952年、講和条約発効まで）

「ヘーグ陸戦法規」による接収

③布令・布告による土地接収（講和発効後、1952～1972年）

④沖縄返還協定による在沖米軍基地の継続使用（1972～現在）

3. 米軍基地による社会的・経済的影響

(1) 地域振興を図る上での障害

①健全な都市形成を図る上での制約、那覇港湾施設、牧港補給地区、普天

間飛行場、キャンプ桑江、キャンプ瑞慶覧等

②産業振興上の制約

那覇港湾施設、牧港補給地区、恩納通信施設、読谷補助飛行場、奥間レスト・センター、キャンプ瑞慶覧等

③交通通信体系上の制約

普天間飛行場、牧港補給地区、キャンプ瑞慶覧、嘉手納飛行場等、制限空域・水域

(2) 復帰後も変わらぬ演習、あとを断たない基地被害

①演習等関連事故の多発

復帰（1972年）後22年間に……

航空機事故115件（うち墜落34件）

山林火災130件（焼失延面積約1,323 ha）

※最近における航空機関連事故

1994年4月4日：離陸しようとしたF-15戦闘機が、嘉手納弾薬庫地区内に墜落・炎上

1994年4月6日：CH-46ヘリコプターが不時着訓練中に施設内滑走路に墜落。機体大破。

1994年8月17日：AV-8Bハリアー攻撃機が嘉手納飛行場から発進後、粟国島近海に墜落。

1994年11月16日：UH-1Nヘリコプターがキャンプ・シュワブにおいて着陸を試みたところ失敗し墜落。

※航空機事故の、事故原因の究明と県への報告を再三申し入れているが、米軍からの報告はほとんどなされていない。

②航空機騒音（嘉手納飛行場、普天間飛行場）

○1993年度の騒音測定結果、嘉手納飛行場周辺で22ポイント中12ポイント、普天間飛行場周辺16ポイント中8ポイント環境基準値を超えている。

○厚木、横田については飛行時間の制限に関する日米合同委員会合意が存在するが、嘉手納についてはない。現在嘉手納基地騒音訴訟係争中（控訴審）

③県道104号線越え実弾砲撃演習

県道を封鎖して行われる実弾演習。演習場に近接して住宅、学校、病院等が位置する。また、着弾地の背後は県内随一の海浜リゾート地域（恩納村）であり、危険である。

④パラシュート降下訓練（読谷補助飛行場）

演習場は民間地域に隣接しており、これまで度々、施設外降下が発生している。1965年6月には訓練中の米軍機から宇座喜味の民家にトレーラーが落下、小学生が圧死。

⑤原子力潜水艦の寄港（ホワイト・ビーチ地区）

1994年、復帰前後を通じて最高の18回寄港を記録した。

⑥その他赤土流出・基地からの油流出等、環境に及ぼす影響

キャンプ・ハンセン内の実弾演習による着弾地からの赤土流出が、金武湾を汚染している。

(3) 県経済に占める基地収入

| | 1972年 | 1992年 |
|------------------------|-------|--------|
| 軍人・軍属消費支出 | 414億円 | 546億円 |
| 軍雇用者所得 | 240億円 | 500億円 |
| 軍用地料 | 126億円 | 568億円 |
| 軍関係受取（合計） | 780億円 | 1614億円 |
| 基地依存度 （県民総支出に占める割合） | 15.4% | 5.1% |
| 基地従業員数 | 200百人 | 79百人 |

4. 返還の状況

(1) 基地の返還が進展していない（返還率14.8%）

【返還状況】

復帰時（1972年5月） 87施設 28,661ha

現在（1994年3月） 42施設 24,526ha

(2) 基地の返還を妨げている移設条件付き返還合意一狭い県土に移設は困難

(3) 日米安全保障協議委員会返還合意施設の返還状況（1994年3月31日現在）

| | | | |
|---------|---------|---------|-------------|
| 返還計画面積 | 返還面積 | 未返還面積 | |
| 4,824ha | 2,859ha | 1,966ha | （返還率：59.3%） |

(4) 1990年6月19日の日米合同委員会で返還に向けて手続きを進めることが確認された17施設23事案（約1,000ha）の返還状況（1994年9月末）

| | | | |
|------|------|------|----------|
| 返還確認 | 17施設 | 23事案 | 約1,000ha |
| 返還済 | 7施設 | 9事案 | 504.3ha |

5. 基地返還跡地利用

(1) 返還のあり方—相当な遊休期間

- ・地主に対する30日前の返還通知
- ・地主や関係市町村の意向が反映されない一方的な返還
- ・補助採択基準に満たないコマ切れ返還
- ・返還後の利活用が配慮されない返還

(2) 返還する場合の措置

- ・金銭補償による原状回復から、合理的な土地利用が可能となるような制度的な措置へ

(3) 地主の経済的な損失に対する補償措置

- ・地主が長期間にわたって使用収益をあげられないことによる経済的損失に対する補償

※以上のような問題を解決するため、「軍転特措法案」の早期制定が全県民的要望となり、国会で慎重審議の結果、今国会で制定されることになっている。

【軍転特措法案の概要】

- ①国による返還見直しの通知及び返還実施計画の策定
- ②返還する場合の措置（原状回復措置及び給付金の支給）
- ③市町村または県による総合整備計画（駐留軍用地跡地利用のマスタープラン）策定
- ④総合整備計画に基づく事業に対する行政上の支援措置

6. 米軍基地返還への取り組み

- (1) 県としては、県民の生命、生活及び財産を守る立場から米軍基地問題の解決を県政の最重要課題として取り組んでいる。特に、来年の太平洋戦争・沖縄戦終結50周年の節目の年までに、解決を図るべき重要3事案を中心として、日米両政府に対し、基地問題の解決促進を強く訴えている。

〈重要3事案〉

- ①那覇港湾施設の返還
- ②読谷補助飛行場におけるパラシュート降下訓練の廃止及び同施設の返還
- ③県道104号線越え実弾砲撃演習の廃止

〈3事案に準ずる重要事案〉

- 普天間飛行場の返還

- (2) 沖縄県知事が、5度にわたって訪米し、沖縄の米軍基地の整理・縮小及び基地被害の防止等について、米国政府要路並びに連邦議会議員等関係者に直接要請活動を行っている。

米軍関係事件・事故に絡む、県議会の主な抗議決議

- 1972年 米軍人による日本人射殺事件に関する意見書・抗議決議
- 1973年 米軍戦車による日本人れき殺事件に関する抗議決議・意見書
- 1974年 米兵による日本青年狙撃事件に関する抗議決議
- 1975年 米兵による女子中学生暴行傷害事件に関する意見書及び抗議決議
伊江島における米兵による狙撃事件の第一次裁判権放棄に対する抗議決議
米軍基地の毒劇物たれ流し事件に関する意見書・抗議決議
- 1976年 米第一海兵航空団の国外撤去、伊江島での射爆撃等一切の米軍演習の即時中止及び米軍油送パイプラインの即時全面撤去に関する意見書
- 1977年 在沖米海兵隊の弾薬輸送事故に関する意見書・抗議決議
- 1978年 廃弾処理事故並びに105ミリ砲彈落下事故に関する意見書・抗議決議
米軍用機F-4ファントム戦闘機墜落事故に関する意見書・抗議決議
- 1979年 名護市宇許田における機関銃被弾事件に関する抗議決議
米軍基地演習場近接地における砲彈破片落下事故等に関する意見書・抗議決議
名護市字数久田における機関銃被弾事故に関する意見書・抗議決議
読谷村におけるパラシュート落下事故等に関する意見書・抗議決議
- 1980年 相次ぐ米軍事故に抗議し、米原子力艦船の寄港反対に関する意見書・決議
米軍演習による山林火災に関する意見書・抗議決議
北部訓練場におけるCH-46ヘリコプター墜落事故に関する意見書・抗議決議
- 1981年 伊江島における機関銃被弾事故に関する意見書・抗議決議
宜野座村における照明弾落下火災事故に関する意見書・抗議決議
米軍機主脚収納ドア落下事故及び米軍用空中投下式センサー事件に関する意見書・抗議決議
米軍演習による山林火災に関する意見書・抗議決議
- 1982年 金武町伊芸区における砲彈破片落下事故に関する意見書・抗議決議
照明弾落下事故及び宙づり訓練に関する意見書・抗議決議
米軍ヘリコプター墜落事故に関する意見書・抗議決議
- 1983年 米軍のソノブイ落下事故に関する意見書・抗議決議
米軍基地内における米兵による日本人刺殺事件に関する意見書・抗議決議

- 米軍トリイ通信施設内における米兵による拳銃発砲事件に関する意見書・抗議決議
- 米軍演習による山林火災に関する意見書・抗議決議
- 1984年 名護市宇許田における機関銃による被弾事故に関する意見書・抗議決議
- 在沖米海兵隊の演習による金武町伊芸区の水源涵養林への砲弾直撃に関する意見書・抗議決議
- 米軍ヘリコプターのドア落下事故に関する意見書・抗議決議
- 1985年 米軍人による日本人刺殺事件に関する意見書・抗議決議
- 米軍舟艇による漁網ロープの切断に関する意見書・抗議決議
- 金武町字伊芸における小銃弾被弾事故に関する意見書・抗議決議
- 米軍ヘリコプター墜落事故に関する意見書・抗議決議
- 米軍人による婦女暴行致傷事件に関する意見書・抗議決議
- 1986年 B-52核戦略爆撃機の飛来阻止に関する意見書・抗議決議
- 1987年 金武町における砲弾破片落下事故に関する意見書・抗議決議
- 米軍演習による貨物船被弾事故に関する意見書・抗議決議
- 国道58号上におけるタクシーの重機関銃被弾事故に関する意見書・抗議決議
- 1988年 金武町字伊芸における小銃弾被弾事故に関する意見書・抗議決議
- 米陸軍特殊部隊の実弾射撃訓練施設の建設中止に関する意見書・抗議決議
- 1989年 北谷町のキャンプ瑞慶覧内のジェット燃料流出事故に関する意見書・抗議決議
- 沖縄近海における米海軍水爆搭載機の水没事故に関する意見書・抗議決議
- 米軍ヘリコプター墜落事故に関する意見書・抗議決議
- 都市型戦闘訓練施設の建設中止に関する意見書・抗議決議
- 1990年 県道104号越え実弾射撃演習の即時廃止に関する意見書・抗議決議
- 1991年 キャンプ・ハンセンにおけるざん壕施設の建設中止に関する意見書・抗議決議
- 米軍人による殺人事件に関する意見書・抗議決議
- 1992年 米軍ヘリコプター事故に関する意見書・抗議決議
- 1993年 米軍人による殺人事件に関する意見書・抗議決議
- 身柄拘束中の被疑者米兵の逃亡に関する意見書・抗議決議
- 米軍ヘリコプターの救難用具落下事故に関する意見書・抗議決議

- 1994年 米軍F-15イーグル戦闘機墜落事故に関する意見書・抗議決議
米軍ヘリコプター墜落事故に関する意見書・抗議決議
米軍AV-8Bハリアー攻撃機墜落事故に関する意見書・抗議決議
米原子力艦船の寄港に伴う放射能測定調査拒否に関する抗議決議
米軍ヘリコプター墜落事故に関する意見書・抗議決議
- 1995年 米軍演習による住宅地域への照明弾落下事故に関する意見書・抗議決議
-

プライバシーを侵害する報道自粛の申し入れ

去る9月4日、沖縄本島北部での米兵による少女暴行事件は、マスコミ各社の重大な関心を持った取材により県民の怒りの状況が、国内外に広く報道され、その結果世論を動かす契機になった。

私たちは、抗議行動を起こすにあたり、少女の恐怖や悲しみ、家族の無念さ、地域住民の不安を共有しながらもなおかつ、個人のプライバシーの侵害が絶対にあつてはならない事を確認し慎重に行動してきた。

しかし、なかには、被害者を特定するような周辺地域への侵入や興味本位ととれるワイドショー化がみられる。それは被害者にさらに追い打ちをかけ、報道による新たな暴力につながることであり、極めて残念な事である。

私たちは、プライバシーに配慮を欠いたこのような報道に怒りを禁じ得ない。

これ以上個人の人権侵害を増幅する過剰な報道を自粛するようマスコミ各社へ申し入れる。

1995年9月27日

N G O 北京'95沖縄実行委員会

代表 高 里 鈴 代

「これ以上許さない！少女・女性たちへの暴力・人権侵害」 9.23子どもたち・女たち・島ぐるみ集会決議

9月4日に起きた米兵3人による小学生少女の拉致強姦事件に抗議をする集会に今日集った私たちは、自分の通い慣れた道で被害に逢った少女の恐怖と苦しみの深刻さ、また母親や家族の衝撃と怒りの大きさを改めて思います。「女なら誰でもよい」という加害者の攻撃は、この事件が単に少女とその家族だけの問題ではなく沖縄の全ての少女・女性に向けられた暴力であり、許しがたい人権侵害であります。

被害にあった少女もここに集った私たちも、共に侵されてはならない尊厳を持った一人ひとりであることを確認すると共に、50年前の米軍上陸から始まって、復帰後23年目を迎える現在に至るまで、沖縄で数えられない程の少女、女性の尊厳がふみにじられて来た事にも心の底からの怒りを感じます。

沖縄に集中配備された軍事基地。また、軍隊が相手に先んじて殺傷できるよう日々訓練を続ける組織であることを考えると、ウォーマシン化された兵士が金網を隔てた地域社会に暴力を加えるのは、兵士の個人的犯罪のレベルを越えた軍隊組織の犯罪であり、沖縄に基地・軍隊が存在する限り続く問題であることを示しています。

沖縄の子どもたちが心身健やかに育ち、かつ少女、女性の人権が保障されるには、危険と緊張に満ちた現在の環境が変わらなければなりません。それは、現在世界の紛争地での子どもたち、女性たち、市民が受ける苦しみともつながっており、軍隊のない、武力のない平和な社会を共に作っていく決意をわたしたちにうながすものです。

今月北京で開かれた第四回世界女性会議NGOフォーラムでも、世界の女性たちから少女・女性に対する暴力の酷さが報告され、特に採択された行動綱領に「戦時下、紛争下における女性への強姦、暴力は戦争犯罪である」が盛り込まれ、少女・女性への暴力の廃絶に対する政府、関係機関の姿勢が強く望まれています。また、日本も批准した「子どもの権利条約」に、様々な理由によって受けた人権侵害、心身の痛みを治療、回復させる責務が国にあることを示されています。

以上のことから、私たちは次のことを決議し要求します。

- 1 少女強姦事件の起きたことを強く抗議し、完全な謝罪と補償を求める
- 2 米軍は、女性に対する犯罪防止、性病、エイズ対策プログラムを公開すること
- 3 地位協定の見直しをすること
- 4 政府は、性暴力被害者の保護、救済、相談に十分な行政的措置をとりシステムを整備すること
- 5 米軍は沖縄から撤退すること

「子どもたち・女たち・島ぐるみ集会」参加者一同

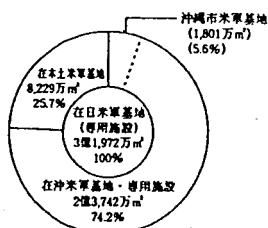
市町村別米軍基地面積の状況

| 番号 | 市町村名 | 市町村面積 (ha) | 施設面積 (ha) | 市町村面積に占める割合 | 全施設面積に占める割合 |
|---------|------|------------|-----------|-------------|-------------|
| 1 | 国頭村 | 19,480ha | 4,936ha | 25.3% | 20.1% |
| 2 | 東村 | 8,176 | 3,452 | 42.2 | 14.1 |
| 3 | 名護市 | 21,014 | 2,354 | 11.2 | 9.6 |
| 4 | 本部町 | 6,426 | 16 | 0.3 | 0.1 |
| 5 | 恩納町 | 5,066 | 1,556 | 30.7 | 6.3 |
| 6 | 金武町 | 3,756 | 2,251 | 59.9 | 9.2 |
| 7 | 宜野座村 | 3,127 | 1,610 | 51.5 | 6.6 |
| 8 | 伊江村 | 2,286 | 801 | 35.0 | 3.3 |
| 9 | 石川市 | 2,103 | 176 | 8.4 | 0.7 |
| 10 | 沖縄市 | 4,890ha | 1,801ha | 36.8% | 7.3% |
| 11 | 与那城村 | 1,874 | 0 | 0.0 | 0.0 |
| 12 | 勝連町 | 1,274 | 185 | 14.5 | 0.8 |
| 13 | 具志川市 | 3,094 | 297 | 9.6 | 1.2 |
| 14 | 読谷村 | 3,517 | 1,648 | 46.9 | 6.7 |
| 15 | 嘉手納町 | 1,504 | 1,247 | 82.9 | 5.1 |
| 16 | 北谷町 | 1,362 | 772 | 56.7 | 3.1 |
| 17 | 北中城村 | 1,150 | 213 | 18.5 | 0.9 |
| 18 | 宜野湾市 | 1,937 | 643 | 33.2 | 2.6 |
| 19 | 浦添市 | 1,891 | 280 | 14.8 | 1.1 |
| 20 | 那覇市 | 3,808 | 58 | 1.5 | 0.2 |
| 21 | 仲里村 | 3,773 | 4 | 0.1 | 0.0 |
| 22 | 具志川村 | 2,548 | 0 | 0.0 | 0.0 |
| 23 | 渡名喜村 | 374 | 25 | 6.7 | 0.1 |
| 24 | 北大東村 | 1,310 | 115 | 8.8 | 0.5 |
| 25 | 石垣市 | 22,883 | 92 | 0.4 | 0.4 |
| 基地所在市町村 | | 127,641 | 24,530 | 19.2 | 100.0 |
| 全 県 | | 226,523ha | 24,530ha | 10.8% | 100.0% |

注意1. 平成5年3月31日現在。但し、市町村面積は国土地理院資料平成4年10月現在

2. 計数は四捨五入によるため、符号しないことがある。

沖縄市および沖縄県の基地面積
(全国における割合)



注：在沖米軍基地、専用施設 23,742万㎡
一般使用 787万㎡

注：平成5年3月31日現在

地区別米軍及び自衛隊基地面積の割合

平成5年3月31日 単位：ha %

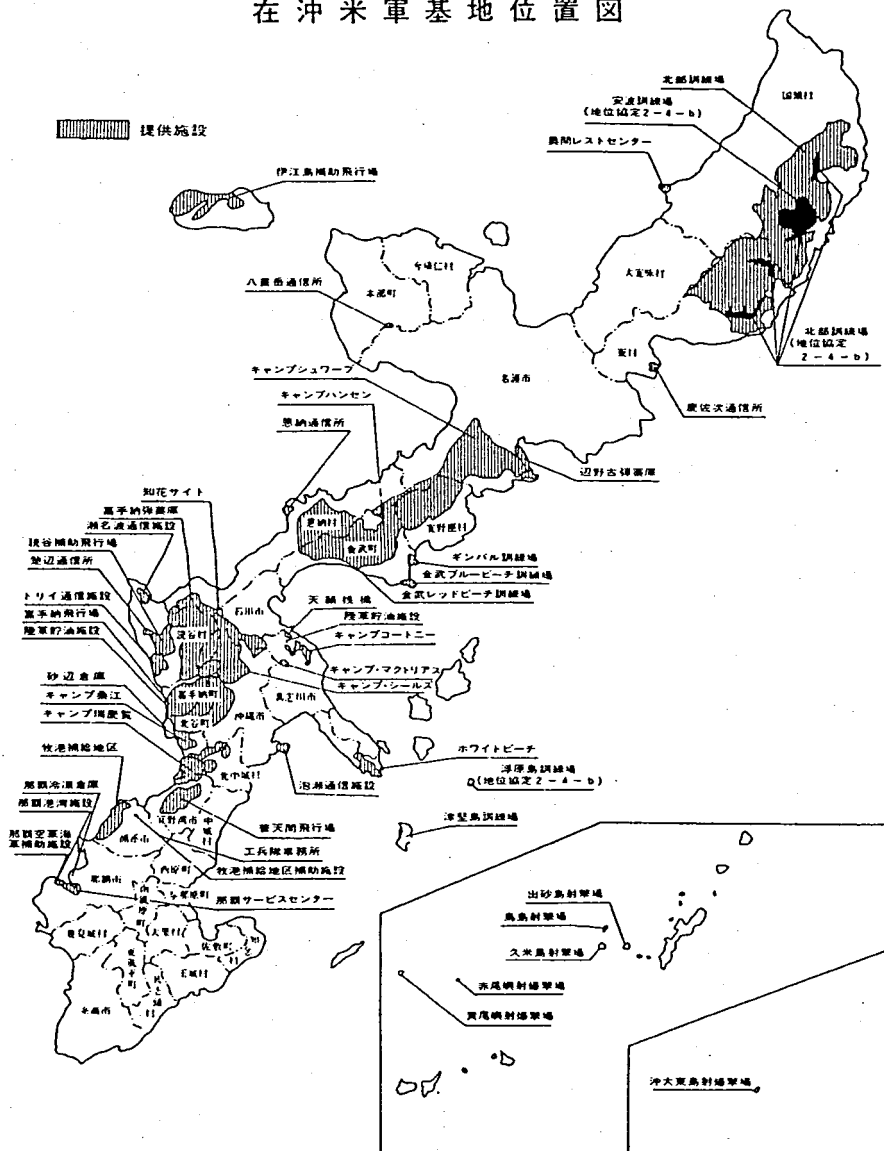
| 区 分 | 土地面積 | | 米 軍 基 地 | | 自 衛 隊 基 地 | | 基 地 計 | |
|--------|---------|--------|---------|-----|-----------|--------|-------|--|
| | A | 面積B | B/A | 面積C | C/A | D=B+C | D/A | |
| 沖縄全県 | 226,523 | 24,529 | 10.8 | 655 | 0.3 | 25,184 | 11.1 | |
| (沖縄本島) | 120,000 | 23,466 | 19.6 | 591 | 0.5 | 24,057 | 20.0 | |
| 北部地区 | 82,326 | 16,975 | 20.6 | 92 | 0.1 | 17,067 | 20.7 | |
| 中部地区 | 27,666 | 7,261 | 26.2 | 82 | 0.3 | 7,343 | 26.5 | |
| 南部地区 | 34,784 | 201 | 0.6 | 467 | 1.3 | 668 | 1.9 | |
| 宮古地区 | 22,561 | — | — | 14 | 0.1 | 14 | 0.1 | |
| 八重山地区 | 59,168 | 92 | 0.2 | — | — | 92 | 0.2 | |

資料：土地面積は国土地理院資料（平成4年10月1日現在）

基地面積は那覇防衛施設局（平成5年3月31日現在）

注：米軍と自衛隊の計が一致しないのは、共同使用の施設が両方に含まれているからである。

在冲米軍基地位置図



沖縄の深い憤り

みなもとひろみ

(ラジオ沖縄ディレクター)

「わたし、しらけてるんだけどサア」

10・21、私も八万五千人の怒りの渦の中にいた。声をかけてきたのは友人のフォト・ジャーナリスト。

「なんでサア、いつも一生懸命平和運動している人たちは、あの壇上にいないワケ！」

彼女の飾りつけないことばには、いつもハツとさせられる。確かに、この島ぐるみ抗議行動に火をつけた女性たちや、日常的にコツコツと平和運動を続けている草の根の人たちの多くは、群衆の中のひとりだった。見上げるような大看板に書かれた五つのスローガンには「女性」「人権」の文字は見当たらない。「これは安保の問題なんだ。おんな・子どもの人権なんか矮小化するな！」と女性たちがかかげたプラカードをこついた男性もいたという。

今回の事件は、私たちの貧弱な人権意識をあぶりだした。とりわけ女性の性を人権として取り扱ってこなかった男性マスコミは、あまりにも衝撃的な事件をまえに、および腰になるか、政治問題に逃げるか、興味本位の記事や番組へと走った。

この事件に抗議の第一声をあげたのは、北京のNGO会議から帰ってきたばかりの女性たちだった。「女性への暴力は人権の侵害であり、軍隊は、構造的暴力集団である。この事件は、兵士たちの個人的レベルをこえて、軍隊が犯した戦争犯罪だ」と抗議した。少女が受けた恐怖と苦痛、屈辱と悲しみを思つて体が震え、抗議文を読み上げる声も、涙で詰まった。

事件が世界的に報道され、これまで「沖縄問題はタブー」としてきた本土マスコミも動き出した。が、被害者の自宅や、学校の周辺をうろつくワイドショーのテレビカメラや、週刊誌の取材に対して、女性たちはもう一度、抗議の記者会見をしなければならなかった。「被害者を特定するような報道のありかたは、三人の米兵の行為と同じではないか」

―事件への抗議の第一声をあげたとき、女性たちがいちばん懸念した、メディアによる人権への「強姦」が起こっていた。怒りは頂点に達した。

そして、八万五千人が結集した県民大会。この頃、テレビメディアの論調は次の段階に移っていた。「沖縄のみなさん。あんまり感情的に騒ぐとためになりませんよ。もし、安保が廃棄されたら、自衛隊が軍隊になり、核も保有することになるかも……」と。「赤線がなくなったら、良家の子女があぶない」という理屈に似ている。ここに女性差別があるように、基地問題に、根深い沖縄差別を感じる。

「二度と私のような被害者を出さないために」と事件を公にした少女の勇氣に応えるためにも、基地が完全に撤去されるまで、私たちはこの闘いから、もう一步も後へは引けないと決意している。いま私たちにできることは何か。その一つとして、被害にあつた女性を女性の手で支えるための「強姦救援センター・沖縄」がスタートした。

私のワープロは、「こうかん」を漢字に変換してくれない。現実の社会から「強姦」はちつともなくならないのに、言葉だけが消え去ろうとしている。

「言い換え」は、事件の本質から目をそらすとして、抗議文書や署名用紙に、あえて「強姦」を使用している女性たちに対して、各メディアは「乱暴」「暴行」と言い換えてくる。そこには「強姦」の被害にあつたことを、恥ずかしいこととする意識があるのではないか。私たちの、そんな社会通念こそが、被害を受けた女性を傷つけている。

願わくば、少女に私たちの思いが伝わってほしい。あなたが被害にあつたのは、あなたのせいではありません。悪いのは、加害者です。あなたにはなんの責任も、落ち度もありません。あなたは少しも悪くないのです。私たちは、いつでもあなたを応援します。

仕事も家庭もパーフェクトにやりこなす。少なくとも、やりこなそうと努力することが、そんなに簡単なはずはない。「これじゃもたない」と限界を感じ始めた時、いつまでもスーパー・ママをやっていられなくなるのは、当然のこと。スーパー・ママ・ストラテジーは、能力と体力に人一倍恵まれたスーパー・レディーにのみ可能か、平凡でも一時期ならスーパー・レディーもどきも可能ということかもしれない。

悩んだ末打ち出した家事分担の工夫を、ナンシー（妻）とエヴァン（夫）の例で著者は取り上げる。私自身、身につまされて、読んでいるうち、のどがつまってしまった。

*ナンシーの提案：月・水・金は私がやるから、火・木・土は何か夕食をつくってみて。日曜日は一緒にやるか外食にしましょうよ。

*夫の実践：（第1週目から：）

火：買い物忘れ、冷蔵庫にもあまりない。「チャイニーズ・レストランへ行く」と外食。

木：「今夜はあなたの番ですからね」と念押しするのに、ハンバーガーとポテトのみ。それでも「美味しい」と褒めるのを忘れなかった。

土：また、当番を忘れた。

エヴァンにとって、家庭内の日常雑事は感謝されることのない仕事だったが、セカンド・シフトの公平分担は、自分の生活水準を下げることにほかならなかった。消極的拒否の繰り返しとサボタージュに手を焼き、ナンシーは音を上げる。

一人でやるのも大変だが、夫を巻き込むのもそれ以上に大変と、結局、面倒見の良いソーシャル・ワーカーのナンシーは、自分の仕事を縮小して、家事や育児の時間を捻出する。スーパー・ママ・ストラテジーの末路は、バラ色の未来を約束してくれそうもない。

スーパー・ママ・ストラテジー (Super・Mam Strategy)

奥川 睦

「家事など切り捨てればいい」と言い切る友がいる。一人ひとりが、自分のことをそれぞれにやっていけばいいだけ。それをしないから、一家に一人、家事奴隷としての主婦を必要としてしまうのだ、と。彼女の論理はしごく明快。しかも実践してしまっている。自分を名前で呼ばせ、過保護・過干渉は一切しない。離婚家庭の経済を支えないといけない母親の苦労を、子どもたちがハダで感じとっていたのかもしれない。

甘ったれた父親が暴君（やさしくものわがりのいい外見ながら）していれば、同じことをやるほうがトクと、子どもたちも学習してしまう。先述の友によれば「そんなことを学習させてしまう母親が馬鹿で、女が悪いのだ」ということになってしまう。「現実には、どうしてもそんなにスパツとはいかないヨ」と心のどこかで思ってしまう私は、家事奴隷の悪夢から解き放たれないでいる。

一般的に言っても女性は真面目で反省癖があり、雑用をついつい自ら取り込んでしまっは、その処理に押しつぶされそうになっている。それでもなお頑張ってしまうところが泣けるが、これも体力のもつ間だけ。ストレスを発散させるにも、エネルギーはいる。まして……。

体力のある間が勝負なのだが、元気な間は気づかない。で、手つとり早く取ってしまう戦略（ストラテジー）が、表題の語。

役割を変えることをめざすストラテジーとは対照的に、スーパー・ママになることは、働く母親に共通したストラテジーで、約3分の1がこのストラテジーをとっている。著者（アーリー・ホックシールド）は“スーパー・ママになること”の章で次のように述べる：

スーパー・ママ・ストラテジーを採用（？）することは、「家庭と仕事の相矛盾する要求をすべて自分の内に吸収してしまう」ことであり、自分たちのことを「手早く、手際のいい、有能な女性」「休息の必要もなく、個人的な要求ももたない女性」だと思い込もうとすることでもある。

彼女は、その結果「自分たちの感情に対する感覚を鈍らせてしまっは」、「無感覚になっは」「自分の気持ちがあからない」と訴えている具体例も挙げている。

看護婦

光

と

影

(27)

青木孝子さん(3)

増田れい子

どうしたら患者本位のいい看護ができるか、看護婦個人にとつて楽しくやり甲斐のある看護ができるか。

看護婦のトップであり、病院のトップのひとりである青木孝子さん「群馬県公立富岡総合病院副院長兼看護部長」の課題を要約すれば右のようなことになる。

そのための試行錯誤は日常間断なく続けられているが、そのなかで「申し送り」の廃止は際立つてインパクト大であった。習慣として定着してきたこの「申し送り」に思い切つてメスを入れ、廃止にふみ切つたのが一九八九年二月である。

あれからもう六年たつている。大胆な試みは、富岡総合病院のあたり前の日常になつた。

しかし、正確にいうなら、「申し送り」の廃止とは、従来の「申し送り」に付随していた「儀式」の部分の廃止したのであつて個々の患者のいまの状態、してきたケアとその結果と問題点などひきつぐべき「申し送り」のなかみを伝える仕事までやめたわけではない。

そんなことをしたら患者はデスペリトな状態におちこんでしまうし、ケアの継続性は失われてしまう。自ら看護を否定するような改革をしたわけではなく、一定の時間にナースステーションのデスクのまわりをとりまいて、○○さん、バイタルはこうでおシッコはこうで、訴えはかくかくで、処置はこうこうで、きょうはおフロに入つてもらう予定で……といった患者報告をベッドの数だけえんえんと行ない（だからものすこい早口）、それを一人ひとりが必死にメモする（ゴマ粒のような字になるのは、早く書くためでもある）のは、習慣とはいえ時間もかかるし青木さんなどはその間にフラフラツとたおれたことが何度もある。つまりシンドイ。

で、これを「申し送り板」に一括記入することで解決した。一日の尿量、排液量、処置内容、患者の精神面のこと、医師の指示とその変更、バイタルサインの異常値を書きこんだ「申し送り板」通称「メモ板」である。

しかしこれだけでは足りない。患者個々の入院時からきょうまでの一貫した看護記録が誰がいづみても手にとるようにわかる質の高いものとして用意されなければならない。

「メモ板」の新設と「看護記録」の充実。看護記録は従来、時間の経過にそつて変化や処置について記入してきた。これをやめていま必要とされているケアの種類とそれを行なつたあとの経過と成績評価を克明に記入する方式に変えた。

こうすると一目でケアのポイントがつかめる。すくなくともつかみやすくなる。もちろんこの記録はよりよいもの、より使いやすいものへと進化させるべく、常にアイデア募集中である。

「メモ板」と有効な「看護記録」のおかげで、チームリーダーと個々の患者をその日受け持つ看護婦とのミーティング、打ち合わせも短時間でスムーズに終わるようになった。以前は四十分から

四十五分かかっていたのが「儀式」を見直し実質本位をはかった結果「申し送り」は0分になったのだ。

○

青木さんの白衣の衿もとにはかわいい縞のリボンが下がっている。白衣はワンピースタイプで、病棟の看護婦たちはケアのときこの上にエプロン型の予防衣をつける。

リボンが愛らしい。実はこのリボンは、青木さんの白衣改革のシンボルでもあるのだ。

従来、看護婦は白衣の天使などと美名をかぶされてきたにしては、白一色のデザイン性のない制服を押しつけられてきた。このころはピンクやブルーも見かけるようになったがまだまだ固苦しい印象を残している。

「このリボンも私たち主張してとり入れたんですけど、医師のなかにはリボンに反対の声もあったのですよ。看護婦にはおしやれはいたらないという理由らしい……」

青木さんは看護婦だっておしやれはしたい、しよう、という柔軟派だ。リボンに限らない、したければピアスもいいし、髪型はもちろん自由、マニキュアもどうぞという。しかし、一部の有名病院では、ピアスもマニキュアも指輪も禁止だ。

「白衣は共有共用ですが毎日とりかえます。SMLの三種類をつくっておいて、クリーニングに出してまっさらなのを着ております」

誰が着たのかわからないのを着るのはイヤという抵抗感がなかったわけではないが、「クリーニングに出したら自分のだろうとヒトさまのだろうといつしよに洗われるのよ。何が自分にとってプラスか考えてみて下さいよ」などと押し返しているうちに白衣の共有共用、毎日クリーニングのシ

ステムが定着した。いまはいちいちタタんだ白衣に袖を通すが、デパートの洋服売場のようにズラリとハンガーにかけておいてさつと着がえる方式にしたいと、そんな細かいことにまで、配慮している。ムダな労力をいかに看護婦の日常から排除しその分、エネルギーを患者に向けてほしいからである。

「でも、ケアの間に五分でも十分でもティータイムをおとりなさいと私はすすめているんです。そのリフレッシュが、いい看護に結びつくと思います」

リズムをつけるということが、人間の労働には必要であり、とりわけ緊張の高い繊細さを要求される看護労働には、メリハリが大切なのだと青木さんはどこまでも、人間らしい労働を追求する姿勢だ。

○
ここでちよつと看護婦と患者の家族との関係ないし、ケアにおける家族の力についてどう評価しているか、質問してみた。

患者には家族がある。家族の意向を無視して治療が行われてはならないし、インフォームドコンセントというのは、患者とその家族をふくめて、同意を形成してゆくという意味であろう。

家族とどうつきあつていくか。看護婦にとつて、患者本位はゆるがせない。このとき家族が、看護婦とどういう関係になるか。敵になるのか、味方になってくれるのか。看護婦にとつて、患者の家族はひと筋ナワではゆかない相手である。

青木さんは、ひと呼吸してこういった。

「現実を申し上げます。家族にびつたりついて欲しい患者には家族がつかない、ついて欲しくない

い患者には往々にして家族ががつちりつく。ほんとうに正直申し上げてそうなんです」

つまり、家族が「カベ」になる場合が多いというのだ。

頸髄損傷で長期入院をしている患者Aさんがいる。労働災害に認定され、然るべく補償金も出て、Aさんの家族（妻と子）は、家を新築した。他病院から転院してきたのだが入院は通算すでに十年をこえている。

看護婦は必死でケアにとりくみ、クルマ椅子ながら時々散歩もでき、最少限のコミュニケーションは音声でできるまでに快復した。Aさんは自宅に帰りたいとしきりに意思表示する。だが、妻はAさんが自宅療養するようになると、ケアに自信が持てないと退院を強く拒否し続けている。そこを押し切つて退院させれば、Aさんの状態はいまより悪化することは目に見えている。入院していは体位交換、栄養面も万全で、褥創もできないが、手のない自宅に戻れば、たちまち褥創にせめられるだろう。そこまでわかつていたら、退院をすすめることはできない。非人道になってしまう。家族の介護力だけでは頸髄損傷という大きなダメージを負ったAさんをケアしきれないのだ。

病院が家庭崩壊の歯止めになつてゐるのは事実だ。Aさんの場合、看護婦がAさんの立場に一方的に立てば、家族とは敵対的な関係になつてしまう。家族に同調すれば、患者の意思にそむくことになる。何とも微妙なところに看護婦は身を置かなければならない。

「家がせまいというだけで、いったん入院したお年寄りには、快復しても家に帰れないことがよくあります。帰るにしてもそれはそれは遠慮して小さくなつてね。看護婦はいいですよ。患者さんは私たちよりも家族に気をつかつてますつて。私たちには何でも頼むけど、嫁や息子にはモノを頼みませんよ、つて。家族にはメイワクかけられないつていうんです」

かつて、家族が吸収していたメイワクとしてのケアを、家族は放棄しつつある。するとその分は、看護婦が吸収する役まわりになる。だが、いくら「申し送り」を合理化してケアタイムを増やしても、限度があるし、看護婦の人員はあらかじめきびしく制限されている。とすれば、結局は、患者がガマンを強いられる結果となる。

「メイワクをスムーズにかけられる家族や病院でなければと思うのですけど……」

この問題はすつきりとはしにくい。この社会せんとたいに病人を見守るゆとりが失われつつある……という、かつてはたつぷりあつたと錯覚するが、どうなのだろう。ともかく、いま現実に、病人は安心して病むという環境にはいないと考えるべきなのだろう。それではならじと、青木さんは汗を流す毎日なのだが……。

「いい看護というのはほんとにむづかしい面があります。たとえば褥創ですけど、褥創ができないようにこまめに体位交換して労力をかけますとそれは一銭にも評価されないのがいまの診療報酬のシステムなんです。食事でも口からとる方が、快復にはいいのですが、食事介助に時間がかかりますよね。クダを入れてしまった方がラクなのです。そうしてクダを入れると、これはお力ネが稼げるというシステムになっている。いい看護というのは、往々にしてお力ネにならない無料のケアと同義語なのです」

看護の現場ではこのあたりが一番の問題である。どこまで、いい看護をするか、できるか。青木さんたちの、正念場である。

看護婦の仕事の仕方をどう変えても、医療のなかの看護の位置づけ、評価が変わらなければ、根本的な変化、患者本位の医療、看護が実現することはないだろう。問題はそこまできている。

青木さんがさまざまなチャレンジを続けてきたそのきっかけに、実は前院長の須田昭男氏の示唆があつたのだという。須田院長はすでに故人となつたが、青木さんの耳には痛い言葉を放つたのだ。『看護はもつと独自性を持つべきだ』の一言だつた。

看護婦の仕事の定義は法律（補助看法）で明らかになように「療養上の世話と診療の介助」となつてゐる。しかし、現実には診療の介助と医師の世話に多くの時間をさかれ、看護婦も、患者より医師を意識して医師の手足として動いてしまいがちである。須田院長は患者のための看護婦に、重心を置きかえてほしいというリーダーシップを示した。これは、青木さんの念願ともびたり一致し、改革のスピードとグレードアップにつながつたのである。

「院長がどういふ方針を持つか。それは大きな決め手になります。リーダーの意思と哲学で、現場は変わりますから」

須田・青木のコンビがよかつたのだ。現院長とのコンビも緊密で、改革路線続行中である。

「どんなにいい看護をつみ重ねてきても、患者の生命に終わりがやつて来ることがあります。ふしぎなことに、ある日ベッドから「死臭」がただようのです。その「死」をどう迎え入れるか、私たち医療看護職についているものとつて、「死の教育」は実はほとんどどこかされていません。そこを早急に埋めたいと思つております。生き方そして死に方の学びです」（おわり）

看護婦・光と影の連載に長い間おつきあい下さつた「あごろ」読者の皆様、編集部の方々に厚くお礼申し上げます。なお、新稿をまじえタイトルもあらためて、来年（一九九六）一月末、岩波新書として出版する予定になつております。お礼かたがたご報告申し上げます。多謝。（筆者）

經濟を小説にする女性性

——清水一行の『動脈列島』の場合——

プリンドル玉枝

(コルビー大学)

男性のロマンとしての經濟小説

日本の經濟小説の主人公はほとんど全部男性で、読者の大部分も男性です。ということは、經濟小説は男の武勇談^ガ、男のロマンであるとも言えます。ところが、面白いことは、經濟情報情報を小説に変態させる大切な要因が女性性(femininity)だということです。今回は、清水一行の「動脈列島」(一九七四年)を例に考えてみましょう。

「動脈列島」の面白さは、確かにミステリーの筋書によるところがあります。サスペンス小説のように、この小説はまず「誰が犯罪を犯したのか」(Who done it)というジャンルの形態をとり、犯人が確定された時点からスリラー形式に代わり、読者をハラハラさせます。でも、サスペンスとかスリラー以外にもう一つ、文学的效果を上げる上で大切な役割を果たしているのが女性性です。つまり、これまで心理学者、人類学者、フェミニスト等が女性性と定義してきた要素が情報に人間性を加え、読みやすくしてくれるのです。

經濟小説の情報性

まず經濟小説の情報性について検討してみますと、經濟小説は情報の宝箱と言つていいほど政治や經濟に関する情報に富んでいます。「動脈列島」の場合も、新幹線の一車輛の目方が六〇トンで、普通一六輛連結ですから、一台の総重量が九六〇トンになり、これが平均時速二一〇キロで走ると、一五〇ホーンの騒音を出すこと。その騒音が線路の一・五メートルの距離にある住宅の瓦をずらしたり、家を揺さぶったりすること。これが四分おきに起こること。平均七〇パーセント満席とみて、一、五〇〇人の乗客が乗つているとし、平均二〇〇キロの速度で走つてゐる電車が横転した場合、千人の乗客が即死する計算になること。線路に異物が落とされるとATC自動装置が電車を止め、電車間の距離が異常に近くなつた場合は、CTCがその作業をすること。といった種類の情報は言うまでもなく、もつと政治的なこと、つまり、新幹線第一号は一九六四年にオリンピックに備えて準備されたこと、当時の線路の全長は五一五キロメートルだったこと、最終的に七、〇〇〇キロメートルの全国網を計画していたこと、なども知ることができます。その経費が膨大だったにもかかわらず、首相の「日本列島改造」の旗印のもとに全速力で計画の実行が遂行されたのです。

こういう情報はドライで、硬くて、量が増えたとプロットの進行を妨げます。でも、「動脈列島」では、それが読者の眼前を新幹線のように頻繁に通るのです。つまり、この情報を新幹線に例えれば、読者はいわばそれを我慢して見守つてゐる公害の被害者のようなものです。こ

の二者間を取りもつのは、名古屋中央病院のインターンで主人公の、秋山宏です。秋山は公害反対運動者としてテロ活動に出ることによつて、公害被害者、読者、および彼の犯罪を連帯づけます。みんなを同類項の仲間にするのです。ただし、公害被害者も読者も全く受け身的立場に置かれているのに反して、秋山とその犯罪は被害者を代表しているにもかかわらず、外圧に屈しない強さを持っています。外圧に屈しないどころか、彼の犯罪は公害の実態を暴露し、浮かび上がらせる鍵となります。被害者も人間であり、実際にどんなことに悩まされているかを読者に訴えるのです。これまで無視されてきた被害者の状況を、加害者や読者にもわかるような情報に置き換えるのです。ということは同時に小説中の人物を悩ませるさまざまな状況を読者の個人的関心事に組み入れることです。犯罪が凶悪化して、警察の警戒が厳重になるにつれ、読者はより詳しい知識を欲求するようになります。例として、最初に秋山がトイレに仕掛けた脅迫状と時限爆弾をつくる材料を発見した警官と鉄道当局が話し合う場面を見てみましょう。

「ところで騒音の六十ホーンというのは、なにか根拠があるんでしょうか」

「六十ホーンですか」

「脅迫状にありましたね」

「名古屋の新幹線控訴原告団の要求は、六十五ホーン以下ということになっています」

「するとそれよりも五ホーン下げただけなのかな」

「環境庁の騒音暫定基準が八十ホーンで、例外的には八十五ホーンとされているのですが、八十五ホーンならなんとか持つてゆくことはできます。しかし六十五ホーンとなりますと、時速二百キロのスピードを、七十キロまで減速させなければなりませんから、これではスピードを使命とする新

幹線の意味がなくなつてしまします。まして六十ホーン以下となると、時速も七十キロ以下。これでは現在新幹線は一日三十五万人の乗客を運んでいるわけですが、七十キロ以下になつたらスピードによるメリツトがなくなり、輸送人員も大幅に減ることになっていきます」

「スピードを落とさずに、騒音と振動をなくすにはどうしたらいいでしょうか」

「六十ホーン以下ですか」

「そう」

「路線の両側に、すくなくとも犯人が要求している倍の幅百メートルの緩衝地帯を設け、同時に現在工事中のものよりずっと完全な防音壁が必要です」

「それはやれませんか」

「不可能です。そうなつたら新幹線をあたらしくもう一本別に建設するのと同じ費用がかかつてしまいます」(四六・四七ページ)

この会話は、読者に、話者と同じくらい鮮明に、騒音、速度、事業利益とそれによる公害の関係を意識させます。

男性社会の構造

新幹線網を守る側の人びとは、首相を含む政治家、国鉄、警察、および大学の心理学教授かなります。この団体の権力関係は一枚岩的上下関係からなり、単純に上の者が下の者に命令すればいいのです。一番上の首相が絶対権力者です。

「だから何度も言っているじゃないか。犯人を捕まえること。一日も早く、犯人をつかまえてしまえば、なにもかも解決するんだ。政治的な配慮だなどとはけいなことを考える前に、国松君がしなければならぬのは、犯人を捕まえて、警察の威信を国民に示すこと、長田君は、その間事故のないよう、運営に万全を期することだ。長田君は、全国新幹線網構想実現のために、国鉄の総裁に就任したのだということを、忘れてもらつては困る。政治はわしがやる。君たちに政治の心配までしてもらわなくてもいい」(二〇七ページ)

このように言われて、言うとおりにしなければ、「うるさい、腰抜けだ。臆病者！　こんな子供じみた犯人の脅迫にうろたえて、恥ずかしいとは思わんのか」(二〇七ページ)

と、どやされます。ちなみに、心理学者・しまようこの言葉で言い換えますと、この「男性原理は、既存の要素の分析、分類、組み合わせ、統合などの方法によつて、客観的認識にいたるさまざまな原理の運用に価値を置き、その結果生じる効用を重視する立場²」です。一口に言う、融通の効かない原理優先の世界です。比喩的に言えば、首相を頂点とする新幹線警護者側は、一本気で、目的志向に侮られている点で、新幹線そのものです。首相はスピード追求に目がくらんでしまつていて、周囲の者の犠牲など眼中にありません。

私権のエゴにいちいちかわりあつていたら、公共事業などなにもできはしないし、むしろこれからさらに強まるであろうこの種の住民の抵抗を、いかに排除し押し切つて行くかが、新幹線網建設の成否を握る鍵であり、弱気は絶対に禁物……であつた。

すくなくとも、新幹線の建設にタッチする者はすべて、そのくらいの信念の強さを持たなければならぬはずであつた。(七五ページ)

沿線付近の住宅を買い上げて緩震帯を作る予算などとも念頭に無かったです。

桶野首相はやり抜くつもりだった。

どんな障害があろうと、持ち前の強引さで突っ走る。これらの全国新幹線網を完成させることが、桶野首相の日本列島改造という政治理念達成の、重要なステップであつた。総工費一三兆円……についても自信があつた。(五八ページ)

この単純にして外圧に肩すかしを食わせる姿勢を図形化すると新幹線のような形になるはず。ついでに、フェミニストの言う男根像(Dhalls)にも似ています。この仲間は男根特有の権力を売り物にしているからです。この仲間の男たちの肩書も、新幹線の金属製車体のように硬いのです。国松直樹は「警察庁長官」、明石裕介は「警視庁捜査一課特別班捜査係長」で、秋山の強敵、滝川保の肩書に至つては、「科学警察研究所犯罪科学研究所副所長」と新幹線のように長つたらしくも、堅苦しくもあるのです。小説の語り手はこれらの威圧的肩書をあたかも読者に見せつけるかのごとく並びたててくれますし、これらの人びとの活動に絡めて、「政治理念達成」とか、「全国新幹線網構想」とか、「爆発物取り締まり容疑」とか、堅苦しい漢字熟語もふんだんに使つてくれます。この男性たちの名前も「滝」とか「石」とか「松」とか、勢いが良い字や、固い字や、おめでたい字を当ててあります。これは男根性の誇る権力の誇示でなくて何でしょうか。読者は公害被害者のように圧倒されてしまっています。

この世界に属する女性はどうかという、彼女らには男根がありませんから、権威的にも全く影が薄いのです。滝川の妻、路子は、夫と新幹線に乗つても、ひたすら衝突事故を心配し続けるほど大人げありません。そのあげく、「女というやつは、くだらぬ取り越し苦勞をするも

のだ」(二九ページ)と夫にさえ輕蔑されています。その名、路子も、他人に踏まれることを暗示します。うつかりすると精神病者だとさえ言われかねません。長田の妻は肉体的不具者です。リユーマチで寝たきり。女性たちは男性に吹き飛ばされて、地べたに平伏しているかのようです。

この勢いのいい男性の権力は、よくみると、個人的なものではなくて、組織的なものです。滝川の場合、仕事が忙しくてめつたに妻と外出する暇が無いから、たまに一緒に外出できる時には、路子が甘えてしまうのです。女性は常に、男性に依存するよう組織化されているのです。滝川夫婦の関係は、こうした社会的条件に影響されている面が大きいといえます。そして、この社会的条件はフロイトの「リビド的欲求(libidinal)は男性だけのもの」という言葉を思い出させます。女性は、彼女自身の欲求というものを持たず、夫に寄生しながら、夫のlibidoを自分のものに転嫁してゆくのです。この状態をもう少し拡大して考えてみると、男性社会内でも、リビドを持っているのは、上下関係の上の者だけだということがわかります。

女性社会の構造

一方、清水が作り上げた、秋山とその女友達等からなる女性陣は、フェミニストが理想とする女性の社会を構成しています。伝統の性差別に準ぜず、よく馴染んでくれる男性の秋山も仲間入りさせてあげます。彼女らには自活する能力もあります。秋山が新幹線のトイレに落としたり二トロをあげた、君原知子は、名古屋中央病院の薬剤師です。その名が示す通り、彼女には

知識（知子）と気高き（君原）があります。彼女は、読者に物語を語る語り手^{ナレーター}でもありません。心理学者ジャック・ラカン(Jacques Lacan)の「言語は男性のもの」という定義を知つてか知らずにか、清水はあえて知子に言語の自由をゆだねています。秋山のもう一人の女友達、落合芙美子は、経済学専攻の大学生で、夜はバー勤めで、学費を稼いでいます。男たちが作った新幹線組織に乗せられて怯えている路子とは対照的に、芙美子は友達に借りた車に秋山を乗せて、東京から名古屋まで運転したり、彼を自分のアパートに匿つてやつたりします。頭腦的にも行動の面でもしごく活発です。彼女の名前にも、仏教を連想させるような崇高さがあります。三人目の女性、七五歳の秋山の患者、野上ヤスは、今は頻脈病で入院中ですが、新幹線公害に脅かされるまでは、貸間をして生計を立てていた人です。フェミニストのルース・イリガライが「女は男なしで自体愛ができる」と発言したことはご周知のとおりですが、この三人の女性たちも性行為はともあれ、経済的に立派に自給自足できる人たちなのです。

もつとも、他人に頼るとか、他人の面倒を見るとかいう概念はこのグループに関するかぎり問題外です。自然主義というか、博愛主義というか、要するに秋山と彼女たちは自主的ネットワークで結ばれているのです。このことは芙美子が秋山を最初に泊めてやることに決める場面が証明しています。

「いますぐ、ぼくは帰つてもいいんだ」

秋山は腰を上げかけた。

「秋山 宏……ね」

「そう」

「そうだったの。わたしわからなかった」

「美濃部だなんて、騙すつもりじゃなかったけど、あそこで本名は言えないからね」

「美濃部の出身だからでしょ」

「まあね」

「いいわよ」

「しかし迷惑がかかるよ」

「平気よ。昨日、お友達がきて、二人であなただこと話し合ったの。それで、ともかく素敵じやないのっていうことに、意見が一致したばかり。そのあなたに会えたんだから、わたし感激だわよ」

(二七二・二七二ページ)

秋山がヤスのためにテロ活動に立ち上がったのも同情からです。

はじめ野上ヤスは、心臓の不調を訴えていた。症状的には不整脈がはつきりしていて、冠動脈の硬化と診断された。担当医はジギタリス投与を指示したが、頻脈の度合いは高まる一方で、なにかの気配を感じると一分間に百七、八十もの脈博に増え、息切れと不安が老婆を包みこんでしまう。そこで直流電気療法が採用され、あの人と老婆の交流が始まった。(二〇・二二ページ)

男性陣内の女性が、家父長制的立場から見た女性像を維持しているのに反して、このグループの女性たちは、フェミニストが考える女性像を確立しています。彼女らは、初め知子の日記で紹介され、最後に秋山が知子を「強く腕の中で抱き止めながら」(四三九ページ)物語を完結しますが、その間に秋山が知子と美美子のアパートに隠れ住んだり、知子の日記の中心人物とな

つたりして、女性界に溶け込むのです。その日記の第一日目は次のように始まります。

三十分ほど前に、上り新幹線最終列車の不気味な風の悲鳴が、名古屋市内の沿線を駆け抜けていった。

夜になって、逆にむし暑さが増した。

ほんの、グラスに一杯しか飲まなかったワインの、酔いを意識する興奮で寝つけなくなり、手洗いへ立ったまま、暑くもあつたから机に向かつてしまった。いま、あの人は隣の四畳半の、いつもわたしが独りで寝ている三幅の敷き布団で、丸太ん棒を転がしたようにうつぶせて寝込んでいる。

(二七ページ)

知子の文章は新幹線の通過で始まり、秋山のヨーロッパ旅行のために開かれた送別会、ある看護婦が秋山に夢中になっていること、知子のもとのボーイフレンドとの関係、秋山との関係、なぜ秋山が急にヨーロッパ旅行に出る決心をしたかという疑問、彼がそれを説明したがないこと、ヤスの症状について、ヤスが新幹線の騒音で戦争中のB29を思いだすこと、朝六時二十五分から夜十一時三六分の間に新幹線が二二〇回通ること、ヤスがアパートを貸せないで困っていること、公害防止グループの活躍について、秋山との結婚に向ける不安、秋山が二トロを病院から盗み出すよう頼んできた時のこと、を通じて最後に爆発のニュースをまだ聞いていないことに対する安堵といった具合に、話題がクルクル変わり、とめどなく続きます。この日の分だけでも一〇ページの長さです。これは女性によって書かれたという理由だけでなく、文体の上でも女性的です。フランスのフェミニスト、エレン・シクスール(Elene Sixous)が言う「女性文(female text)」そのもので、「話者が意識の中心に位置せず、他人の話で自分の話が薄めら

れている³」のです。それはまた、「多方から同時に出発して、欲望が性別、権力、家族の再生産などにかかわりなく一つの体から次へと永遠に巡回していく⁴」文章でもあります。感情が論理の焦点を拡散させてしまおうと言つてしまえばそれまでですが、もう少しフランスのポストモダン・フェミニスト、ルース・イリガライ風に解釈しますと、「女性的統辞は、主体（主語）も客体（目的語）もたてず、ひとつであることを権力化せず、同一性のあらゆる区別、帰属のあらゆる形成、したがつて、専有のあらゆるかたちを不可能⁵」にするもの、つまり、博愛的だと言えましょう。ということとは、この文体は、女性陣の性格と一致することになります。秋山が女性陣員の立場から男性陣に挑戦することは、小説全体が女性性を帯びることです。

清水は、女性陣が、政治的に疎外されている事実を地理的「周縁」という概念でとらえています。だから、彼女らの本陣を首都の東京ではなく、名古屋に敷いているのです。この中心に対する周縁制は人類学者・山口昌男によると、多義性をも意味します。

興味深いのは、我々の概念は、文化の中心に位置する、または近い事象であればある程一元的であつて、差異性の強調がなされる。それに対して、周縁的な事物についての概念は、それが明確な意識から遠ざかっている故に、「曖昧性」を帯びている。曖昧というのは多義的であるということに他ならない。多義性は、そこで、分割するより総合、新しい結びつきを可能にする。何故ならば一つの語が多義的であるということは、表層的な意味では、他の語との弁別性を前提として意味作用を行なつても、潜在的には更に別の他の語とむすびついているということの意味する。

しまふようこも、多義性を「寛大さ」という言葉で置き換えて「女性原理」を次のように定義しています。「女性原理は、このような男性原理のみを中心として対象を理解することに疑

問をさしはさみながら、いまだ「客観性という市民権」を得ていない領域や方法に関心を持ち、論理的にすつきり解けないものへの寛大さをもつて対象にせまることに科学の意味を広げる立場だと言っています。清水はこの多義性を色彩で表現します。東京においても女性たちは男性に比べて色彩に富んだ衣服をまとうていますから、男でありながら派手なオレンジ色のオーブン・シャツを着てサングラスをかけて、彼女らの近くを歩いている秋山は、たちまち「どう見ても普通の勤め人という感じではない」（二九ページ）と語り手に見分けられて、普通の男としての資格をもぎ取られてしまいます。秋山は周縁とよほど深い関係があるらしく、約束の日には新幹線の線路にブルドーザーを落としに行く時もやはりオレンジ色のヘルメットをかぶって行きます。ほかに女性陣の周縁に行く時もやはりオレンジ色のヘルメットをかぶって行きます。彼が送る脅迫状も首相の秘書によつて首相が目を通す必要がない最低の「C」クラスに分類されてしまいます。芙美子と秋山の旧友が秋山の自殺を装う所も、万葉時代に流罪になった貴族、麻統王の歌碑の前です。その石碑には、

うつせみの命を借しみ波にぬれ

いらこの島の玉藻刈り食す（三三八・三三九ページ）

という悲しい歌が刻んであります。麻統王も海と玉藻ぐらいしかなない地の果てで、生と死の間をさ迷ったのです。この風景は、知子の「部屋から窓を開けると、四十メートルほどのところに新幹線の高架の脚注が黒グロと林立している」（二四ページ）という見捨てられたような感情にあい通ずるものがあります。およそ、女性とか、犠牲者とかいうものは、世の中に見離されている存在だということなのでしょう。

この情けない感情はまた、「動脈列島」の冒頭の文章とも共鳴します。
最後の、

暑熱とも呼ぶべき八月下旬の陽の強さに、東海道新幹線の沿線風景には気怠い灼けた疲労感が漂い、木も草も、そして山や川までがすべて息を詰め、喘いでいた。だが、この時間の列車番号が四百番台の新幹線は臨時便であつたから乗客もすくなく、車内の空調設備は余裕をもつて作動していた。(五ページ)

新幹線が通過する間、擬人化された風景は「気怠く灼けた疲労感」(五ページ)をもようして、喘いでいます。この風景は権力とその犠牲者を対置させる構想が著者の頭中に最初から一貫してあつたことを示唆しています。そして秋山に委ねられた役割はこの対置を崩して両陣を等値化することです。もし社会学者エドワード・シル(Edward Shils)が正しく、事実中心に近い者ほど権力が強いなら、名古屋あたりの女性にまでその権力の恩恵が届かず、ヤスのように首相の個人的野心の犠牲になって殺されてしまうことになるようです。ヤスが完全な孤独の中で死んでいった様子は知子の日記が伝えてくれます。

…中央病院を退院した六月中旬、あのひとが言っていたとおり、野上ヤスは五分おきの絶え間のない騒音と振動という、長い間彼女の命を削り、苦痛を与えつづけてきたその環境の中で、誰にも看取られずに息を引き取った。(二四ページ)

ヤスも麻統王もそれぞれの周縁の地で同じ運命を辿つたことになります。

女性陣には脅威の組織がない上、連帯感覚さえもはつきりしていません。物事を順序だてたり、人びとに格差をつけたりする組織は望ましくありません。秋山が女性陣に踏み込めるのは、

病院という組織を抜け出して、住所不定の放浪者になつてからです。家父長制的権力が女性たちに健全な自立を許さない限り、女性陣内で自立したい者はまず家父長制の範圍外に逃げ出さなければなりません。もともと家父長制組織の一員で、男性である秋山は、偽名を使つたり、ヨーロッパへ旅行に行くふりをしてアリバイを作つたり、自殺を装つて存在を否定したりしなければなりません。清水一行はこのテロリストに秋山宏という名とともに、広々とした秋の山のイメージを与えることによつて彼の女性陣入陣の準備をしておいたようです。知子も秋山の寝姿を「丸太ん棒を転がしたよう」「セベージと描写しているとおり、何となく野性的で、腕なんかも毛深いのです。しかも「秋」は日本人にとつてはロマンチックなセンチメンタルな季節です。秋山は「テロリスト」ですから、両生類のように権力誇示の男性陣と自然主義的女性陣を股に掛けて、両陣間を行つたり来たりします。梓にはまらず、広い野山を悠然と走り回るイメージです。彼の正体も性にこだわらず、肉体が男でありながら、心は犠牲者思いで、女性的です。ですから、小説全体の知子でない語り手も犯罪場面における秋山を名無しの「男」として報道します。

太い黒縁の眼鏡を掛けた長身な男は、新大久保の方から、新宿区役所通りを歩いてきて、まばらな通勤人の割には、車ばかりがやけに多い靖国通りを伊勢丹側へ渡り、参考町の交差点へ向かつた。

手には、小型のボストンバックを提げている。(二四八ページ)

名前が無いことが秋山を物体化し、動物化すると同時に、現在形を用いたこの文章は彼を無時限の空間に浮かび上がらせます。真正正銘の脱組織化です。

以上のことから明らかになることは、読者の興味をそそる秋山の犯罪が、元を正せば男性陣

と女性陣の対立に発していることです。復習してみますと、男性陣は新幹線、技術情報、政治権力と中心性、女性陣は、風景、公害被害者、女性文体、脱中心的拡散、および周縁性からなります。フロイトとラカンが異口同音に生物学的男女の区別は無く、あるのは象徴的男根の有無のちがいであり、男根は言語も含める秩序の象徴だから、その持ち主が何を欲しているか解明できるが、女性はずっと男根を持ち合わせていないから、秩序と何の関わりもなく、したがって女性が欲するものは、女性本人ですらはつきり説明することができないと言いましたが、『動脈列島』でも、警察側は、秩序外で行動する秋山の散発的犯罪を理解する術を知りません。

警察関係者にとつては、犯罪の漸進的な変化は、過去のデータによつてかなりな部分まで類推することができるのだが、わからないのは、過去に例のない、それにもわかに変化する犯罪についてである。これを未来予測ではメタモルフイックな進化、つまり変態的進化と言っている。要するに、昆虫が卵から幼虫になり、蛹になり、何度も脱皮を重ねて成虫になるというように、それまでの形をその都度変態してしまう進化であつた。〔中略〕

専門家であればあるほど、その未来像がかえつて掴めなくなるのは、犯罪の場合も例外ではない。

(一〇三ページ)

「女性は家父長制の堅苦しい枠の外で文章を書く¹⁰」とはイレイン・シヨワルターも言つた言葉ですが、女性陣に属する秋山も、ダイナマイトを作る材料をトイレに投下したり、新幹線の線路に油を塗つて脱線させたり、乗客をエーテルで眠らせたり、リモート・コントロールで新幹線の自動停止装置を混乱させたり、普通の男性には想像もできない技を多彩に披露して、権力組織陣を徹底的に混乱させます。

男性性と女性性の融合

この徹底的混乱が引き起こす結果は、リチャード・ブラウンが発表した「弁証法的皮肉」(dialectical irony)¹¹の状態です。つまり、対立する二陣が極度に影響されると相手に似た様態をとるようになることです。秋山があまりにも派手にテロ活動をするので、警察側はもう周縁を無視しきれなくなつて、名古屋まで調査網を広げ、敏感に秋山の行動を探り始めます。こうして、これまで何の意味もなかった周縁の「男」が中心権力の最大の関心事に飛躍します。新幹線の周りの景色が新幹線の中に舞い込んだようなものです。堅く組織立てられた情報陣が無組織の自然のなかに散りまかれたようなものです。同時に、ラジカル・フェミニストのメリー・デイリーが女性たちに声を囁らして、「存在としての静物(Being)」から活動中の能動態(Be-ing)になりなさい」と呼びかける声に女性が応じたようなものです。¹²

最初はテロリストに何ができるかとたかをくくっていた首相も、事件の拡大をおそれて記者クラブの口止めを試みます。ラカンが女性には言葉がないと言いましたが、「動脈列島」の首相も、記者に女性陣の代弁をされては困るのです。女性、つまり権力の犠牲者には黙つていてもらわなくては、権力の構造にひびが入ってしまうことを知っているのでしょう。でも秋山は黙つていません。自分の犯罪計画とその理由を直接新聞社やテレビ局へ予告します。これに対する一般の反響は拔群で、「もし犯人に会えたら絶対に協力したい」(二七五ページ)と、すっかり秋山ファンになる人も出てきます。手伝つて国鉄に脅迫状を書く人も続出して、秋山の声が

強く広く全国に伝わります。こうしてこれまで大衆の中で眠っていた被害者意識がばつちり目を覚まします。警察の手伝いをする大学心理学教授さえもが、「ああいうのは貴重さ。この世に、みずからドン・キホーテを買って出ようという人間が、いったい何人いるかね。いやしない。細菌学的に言ったら、汚染されていない純潔培養人間だからな。好きだね」(三九二ページ)などと言つて、うつとりしてしまいます。こうなると国会も放つてはおけません。国会の質疑応答は、これまたテレビの人気番組になります。首相も「全国新幹線網構想にたいする、絶好の攻撃材料をあたえているようなもので、野党が張り切るのは当然だぞ」(二九八ページ)と盛んに周縁の動きを気にします。

こうして、次第に中心と周縁が転置した結果のなまなましい例を一つ挙げてみましょう。これは秋山が夜遅く(山口昌男によると、夜は女性が活躍する時間)突然国鉄総裁の家を訪れる場面です。

「夜分で不都合でしたら、このまま引き返させてもらいます」

「いや」

「指名手配されていて夜しかうこけないのです。お話をさせていただけますか」

……警察だ。

一一〇番に電話して、警察を呼ばなければならない。

秋山 宏が、目の前に現れたのだ。

そうつぶやきながらも、落ち着いた相手の態度に、その秋山のはば三倍の年配であるはずの長田は、秋山の鼻先でうろたえ騒ぐわけにはゆかなかつた。

緊張で胸がくるしい。

…なにも、こわがる必要はないと、長田は自分に言い聞かせた。(二七八ページ)

警察を呼ぼうとする衝動と不安は長田の弱さを物語ります。対照的に、彼の頭中の秋山は堂々としています。このとつぴもない、前触れのない……フロイトとラカンが女性の気持ちにはわからないと言ったことを思いだしてください……訪問と権力の倒置は、ほかでもない山口昌男やポスト・モダン・フェミニストが言う「女性性」のいたずらです。

新幹線が、野上ヤスを萎縮腎と心臓の機能不全状態に陥れ、その命を奪ったごとく、秋山の犯罪も長田を恐怖させ、滝川の「血の氣」を引かせます(三八ページ)。秋山が新幹線を三度まで止めることは中心が次第に活性を失ってゆくことを意味します。乗客も事故に巻き込まれることを恐れて新幹線の利用を見合わせます。つまり、新幹線は「動」から「静」の状態に移るのです。同時により多くの警察隊が「風景」の中に忍び込みます。そして秋山が最終的に捕らわれるのは、言うまでもなく名古屋付近のみかん畑の中です。以前公害犠牲者の本拠地だった地区の、前に秋山が来ていたオレンジ色のみかんに囲まれて、秋に、権力側とその犠牲者側が対面するのです。権力者がすつぱりと犠牲者の環境に入っています。

もう少し秋山に焦点を合わせてみると、彼は「警察に追われながらの計画実行がけつして楽でないとはわかったが、それをしなければ、問題は解決しない」(三〇五ページ)と、何やら前に桶野首相が言っていたようなことを言いながら、犯罪を決行します。そうこうしているうちに、長田や滝川から引いた「血の氣」が秋山のほうで流れ始めます。というのは、秋山が警察の捜査網をこまかして通るために使う車が血液輸送車だからです。この車がもとの新幹線、そ

れを知らずに傍観する警察がもとの風景と入れ代わります。この逆転作用は秋山の勝利を意味します。その判決は知子が下します。

「でも、計画どおりブルドーザーは線路に落ちたんだし、これで絶対に新幹線は止めないって言っていた桶野首相は敗けたのよ。国鉄もそうだわ。今日一日、もう新幹線は走れないわ。秋山さん、あんた十月一日の新幹線を止めたのよ。だから成功したんだわ」(四三九ページ)

秋山が転覆させると予告したのは物質としての新幹線だけではなく、新幹線と風景の関係、権力者と犠牲者の関係、さらに比喩的に言えば、男女の格差であつたのでしょうか。動と静、加害者と被害者の差別は支配者によつて押しつけられるべきものではないのです。山口昌男が「工夫をめぐらし、空想する」「さまざまの夢や神を生む」¹⁴と性格づけている女性性を秋山はコチコチで融通の効かない男性陣の支配から解放させたかつたのでしょうか。それに甘んじて、小説の紙面においてもコチコチの専門情報が感性で潤うことは著者が心得ていたはずです。著者は公害被害者の控訴が政府の政策を変えられるとは思っていません。ですから、秋山の逮捕と知子が発する勝利の宣言という、ちぐはぐな締めくくりのし方をしたのです。知子の宣言は法的に何の意味もありません。でも文学的には重大な意義があります。もう一度山口昌男の論旨を借りますと、

記号は二重の作用を同時に行なつていうことにもなる。一方では、それは、負の項を対極において際立たせ排除しながら、他方では、負の項を通じて、未だ形をとらないが、人間が世界を全体的に捉えるために欠かせない宇宙力ともいうべき部分とのつながりを保たなければならぬ。この宇宙力とは、時にはエロスといわれ、時にはタナスともいわれ、さらにはまたニルヴァナとも

「自然」ともいわれるかも知れない。しかし我々がそれに対して命名できる範囲は常に限られたものでしかない。この「開かれた」状態が閉じられたら、それは「秩序」そのものを支え絶えず生成させる根源的な諸力の崩壊としてのエントロピーの増大にそのままつながることになる。¹⁵

ということですが。負の項（女性、静物、死、等）なしには現在健全のように見える「秩序」も生命力を失って、枯れてしまいます。女性性なしには「動脈列島」も永遠の価値を持つ小説ではなく、化石化した情報の端くれにとどまります。

まとめてみますと、清水一行は女性性を（a）男性権威の被害者、（b）秋山の犯罪の正体、（c）技術知識を小説にする文体、の三重構造に取り入れています。女性性を借りて「動脈列島」のテキストを「制度的な規定、定義を越えて、感覚をも動員して、何事かを理解するレヴェル」¹⁶まで昇格させます。お陰で、最後のページをめくり終えた読者は、小説中の人物と経験と共にしたような、新幹線のすべてを知ったような、少なくとも二種類の満足感に浸ることが出来ます。読者は「創造力の活性化をつうじて、意識と肉体ぐるみ、あるいは精神と情動ぐるみ、積極的に参加させ」¹⁷られ、つまり、大江健三郎が定義する「真の小説」にめぐりあうのです。たぶん、経済情報を小説に変態させたのが女性性だということに少しも気づかずに……。

〔注〕

1 トドロフはサスペンス小説がwhodunitとスリラーの組み合わせだと説明している。参照：Tsvelan Todorov, Introduction to Poetics (Minneapolis: University of Minnesota Press, 1981), p. 44-53.

2 しまようこ、「フェミニストサイコロジ」（東京：垣内出版，1985）p. 74.

- 3 Noriko Lippit & Reality and Fiction in Modern Japanese Literature (N.Y.: M.E. Sharpe, 1980, pp. 192-193 から引用。
- 4 Helene Cixous, "Castration or Decapitation," Signs Vol. 7, No. 1, pp. 53 から引用。
- 5 国領苑子の「イリガライと西欧形而上学批判：そして女の性はひとつではない」「別冊宝島」No. 85 (1988年12月), p. 136 から引用。
- 6 山口昌男, 「文化と両犠牲」(東京: 岩波書店, 1975) p. 6-9 から引用。
- 7 じゅんぽう, p. 74.
- 8 Edward Shils, "Center and Periphery" The Logic of Personal Knowledge: Essays Presented to Michael Polanyi on his Seventieth Birthday (London, 1961), p. 120. His paper is also quoted in Yamaguchi's book.
- 9 Juliet Mitchell and Jacqueline Rose, 編, Feminine Sexuality: Jacques Lacan and the école freudienne, Jacqueline Rose 英訳 (New York: Pantheon Books, 1982), p. x なる引用。
- 10 Elaine Showalter, "Feminist Criticism: Critical Inquiry" (Winter 1981), p. 201 なる引用。
- 11 Richard Brown, A Poetic for Sociology: Toward a Logic of Discovery for the Human Sciences (New York: Cambridge University Press, 1977), p. 176-177 参照。
- 12 Mary Daly, Beyond God the Father: Toward a Philosophy of Women's Liberation (Boston, Beacon Press, 1973), p. 34 参照。
- 13 山口昌男, p. 18-19 参照。
- 14 山口昌男, p. 137 から引用。
- 15 山口昌男, p. 201 から引用。
- 16 大江健三郎, 「小説の方法」(東京: 岩波書店, 1987), p. 81.
- 17 同上

〔編集後記〕

(沖繩より)

◆NGO北京沖繩実行委員会にひっきりなしに届くたくさんの署名(今日十一月四日も、半日で二千名近くに)同封されてくる短いけど心のこもったメッセージに胸を熱くし、力づけられています。

「あこら」の特集号が、全国の女性たちに読まれ、「いつさいの暴力を許さない、武器によらない平和」のたたかいが、さらに広がることを願っています。(高里鈴代)

◆「強姦」の文字をワープロでたたくたびに、胃の賦をわしづかみにされるような痛みが体をつきぬける。「乱暴」や「暴行」に書きかえることで、被害者の少女の痛みは少しでも和らぐのだろうか。ほんとうにそうだろうか。私の胃の痛みが和らぐことは確かだけど……。 (源啓美)

◆決して、決して起こってはならないことだけど、いつ起こってもおかしくない軍隊駐留の状態があるわけで、起こるべくして起こってしまった今回の事件だった。無念で、悔しくて、つらい。

つい先日、仙台市へ飛んでこの話をし、水を打ったような静けさと緊張のなかで傾聴してくれた女たちの真摯さ、目を腫らした姿が私の心にずっしりと沁みだ。

ひとがひととして尊ばれること(人権)、敵視・敵対のない環境(平和)に敏感な人はどこに居ても連帯できるということがジーンと沁みだし、地元の頑張りこそが広大な基地をも揺るがすという確信のようなものが自分の奥深く沁みわたる。

沖繩の女たちが出かけてゆく。佐賀、福岡、北九州市、東京、広島、神奈川へと。もつともつと拡げてゆかねば……。二十一世紀まで基地の固定化、拡大を許すか否かの瀬戸際、これほどの悪質なもののとの闘いである。沖繩だけではできるはずもない。日本中の島ぐるみの闘いと、世界中の支援、ネットワークがなければ、基地・軍隊はびくとも動くものか!

「あこら」がその声の広場を特集してくださったことは、涙がでるほど心の底からうれしいことだった。 (栗国千恵子)

(東京より)

◆北京で「南京大虐殺はヒロシマ・ナガサキの百倍も千倍もすさまじかった」と言われて絶句しました。相手の顔が見える虐殺の恐怖と怒り。沖繩も恐らく同じ思いでしょう。しかしただた耐えてきた。その五十年間の憤りと悲しみが、爆発したのだと思います。

どんな大金を払つても「南京」への謝

罪をしたことにならないのと同じように、ヤマトの人間は沖繩にどう謝ればいいのか。せめて即刻、沖繩からは基地の全面撤廃を「安保を堅持する」というのなら、代わりに全部ヤマトで引き受ける以外ないと思います。

それにしても戦後五十年、いまだに外国の基地がある日本は、まだ独立国ではないのだと、しみじみ思います。 (千)

◆一分間メッセージのテープをほどきながら、沖繩の切ない息づかいに、何度も涙ぐみました。切々としたテープを、全国各地で聞いてもらいたいなア。 (藤)

◆この事件を聞いてすぐ思い出したのが「太陽の子」——灰谷健次郎さんの本。主人公、明るく強く優しい沖繩の少女「ふうちゃん」が被害者の少女と重なります。今日は十一月四日、大田知事が村山首相と会談します。知事ガンバレ! できれば会談の背後で「ふうちゃん」と一緒に応援団を作ってエールを送りたいです。

(礼)

◆……と思いきや、明けて五日の新聞の見出し「首相、署名代行を決断」ンなもの決断してどうするんだ! 沖繩の気持ちなんかどうでもいいの? 村山サン、この号読んでヨ!

(あ)

I
速報・私たちの旅

II
NGOフォーラム

III
政府間会議と行動綱領

IV
資料

北京会議の報告集を出します。

I は〈あごら旅の会〉の速報ですが、II III IVは、
〈あごら〉以外の方々のお力もお借りして、できる
だけ臨場感のあるものを、と思っています。

ワークショップの記録、写真、資料、感想文等々、
お待ちしております。

採用させて頂いたものは、薄謝をお贈りします。 あごら「北京会議記録集」係

あごら 212号 ●発行 1995年11月10日

●編集 あごら沖縄

●発行所 BOC出版部 〒160 東京都新宿区新宿1-9-4-303

●TEL 03-3354-3941 ●FAX 03-3354-9014 ●振替00100-0-5264

●発行人 あごら企画会議 ●定価 1,250円(1,214 円+税36円)

この ひろい宇宙に
たった一つの地球

その 大きな地球に
たった一人のわたし
そして あなた

かけがえのない地球
かけがえのないわたし

かけがえのないあなただから
たいせつに たいせつに しよう

あなたも
わたしも

地球も

たった一度きりの人生だから

思いきり

のびやかに生きよう

だれもが だれをも

ふみしだくことなく

胸の底まで深く息をし

ああ 生きててよかったねと
ほほえみあえる地球にしよう

へあこら

人と人の出会うひろば

へあこら

人と人の共に生きるひろば